

# 牧谿筆布袋圖

男爵 益田孝氏藏……

益田男爵家には秘寶が多い。そのうちでも、牧谿作と傳へらるゝ腹擦り布袋の幅、これは天下の數奇者が、眞に垂涎措かぬ絶品、足利の東山時代に、例の「江天暮雪」など、共に、わが國に渡來したものであらうといはれて居る、この幅は三幅になつて居て、左右には蘆雁の幅があつた。これはもと、戰國隨一の武將といはれた例の上杉謙信、趣味の頗る廣かつた男といはれてゐるだけに、この三幅をいつの頃よりか秘藏して、軍略に疲れた朝夕、かれの眼を楽しませる、唯一無二のものであつた。

○  
 その後もこの三幅は、上杉家の重寶とせられて來たが、徳川治下にある時、上杉家では、將軍家に對して非常の不仕末をしたことがあつた。そのために、徳川家の怒りを買つて、つひには一家の興廢にも係はるやうな雲行きとなつたが、時の老中某は、將軍家と上杉家の間に立つて、東

牧谿筆腹さすり布袋



任儀 後 後  
 罪造我闍婆者  
 多可存天宮  
 皆全無味伎倆  
 大開笑口拍

傳へられて來た、牧谿作といはる、三幅のうち、腹擦り布袋圖を進物とした。左右蘆雁の圖は、牧谿筆布袋圖



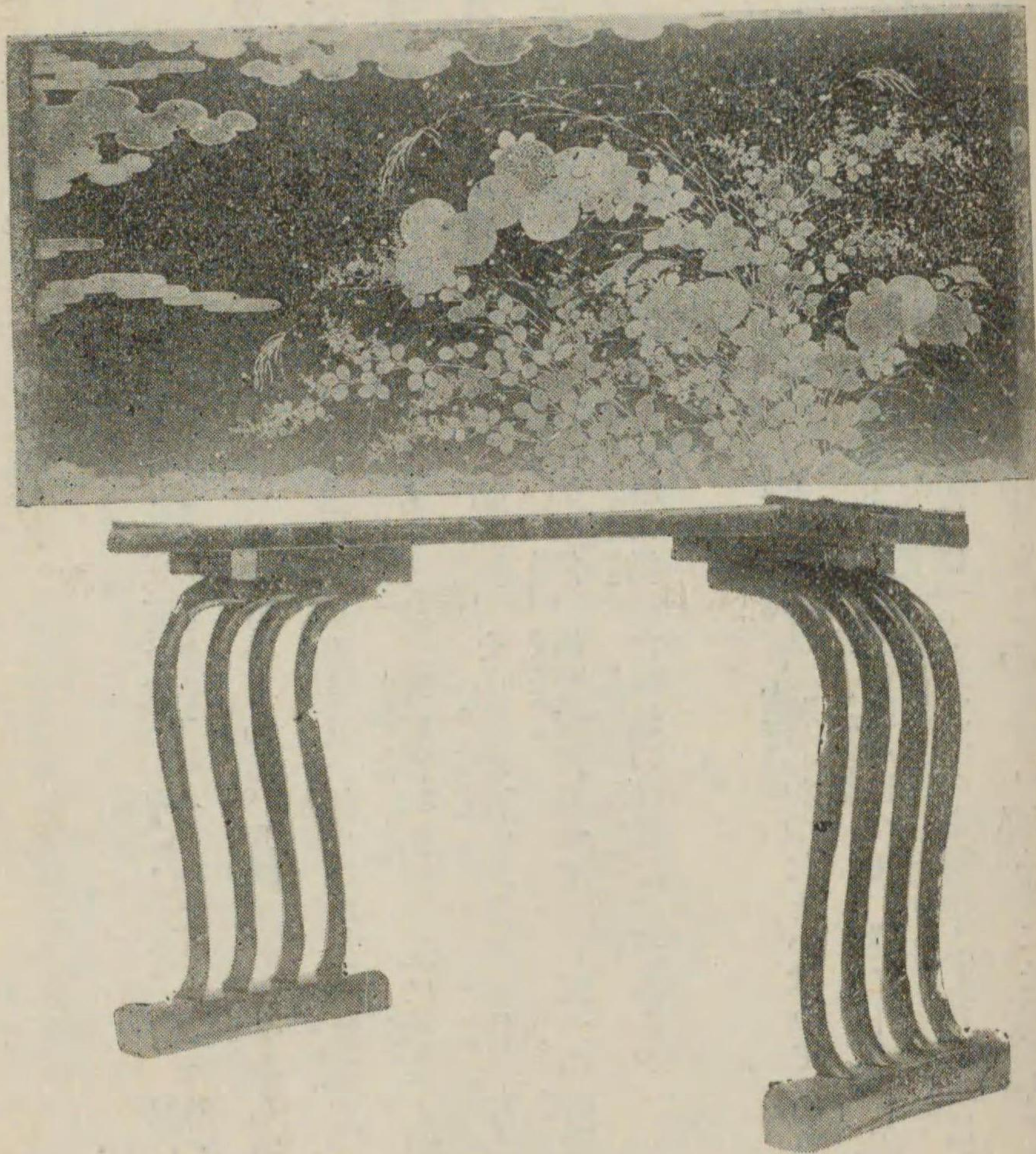
今でも上杉家に珍藏せられて居る。

○  
腹擦布袋の幅を贈られた老中某の家に、家産が傾いた。その所藏品賣立の時に、第一を呼ばれたものは、無論この腹擦り布袋であつた、米澤の出身、下條桂谷畫伯はこの話を聞いて、舊藩主の家のためにと、上杉家よりの委囑もうけて、取戻し方に骨を折つたが、つひに逃げ出した腹擦り布袋の一幅は、上杉家へ戻らず、益田孝男の手に入つたのである。この腹擦り布袋の藝術的價値は、狩野之信始め、代々狩野家の畫家が、上杉家、または老中某の屋敷に来て、願ひ出て模寫して行つた一事でも、はつきり判るといはれて居る。

### 秋草蒔繪八足机

… 帝室博物館藏…

帝室博物館に、秋草が蒔繪せられた桃山時代の八足机がある。甲板に、萩すゝきなど群がり亂れてゐるうちを綴つて、眼も一しほあやかに、菊の咲きわけて居る形、如何にも桃山をしのばせる繊細華麗な趣きを漂はせてゐる。これについて居る金の金具には、御紋章と同じ十六枚の菊、または桐の花の金具などもついでゐる。それにこの甲板のうらに朱で「御内殿」と認められて居る。この點から押しても、桃山御殿に使はれた品であることも、ひとしく想像のつくところ



秋草蒔繪八足机

桃山時代蒔繪秋草八足机

としく想像のつくところ



ころであらう。

○ 一世の豪華をきわめた桃山御殿の調度品で、今の世に引つゞき残つて居るのは、京都の高臺寺にある、國寶指定にかゝる幾つかのものである。當時あの豪華をしのぶには、これを見た方が、一番の早道であるといはれて居る。高臺寺は、桃山御殿の調度品を、悉く持運んで来たといはれて居り、現在に傳はつて居るものでは、扉に竹に松、それに菊などが、金蒔繪であしらはれて居るお厨子、花筏の金蒔繪ある須彌壇、その他秀吉や北政所の使つたものと覺しい、葎桐の紋散らしになつて居るお膳、竹模様の手筥、梅花形になつて居る五つの壺を組合せた薬味入れ、腰かけ手拭かけ、秀頼の時竹生島神社に納めた蒔繪の社殿などがある。

○ 桃山時代に於ける、蒔繪の流行發達は、著しかつたといはれて居るが、その時代の蒔繪の特色は、梨子地を土臺として使つて来た従来の型を破つて、逆に花などを梨子地にした新しい行き方が流行したので、極めて派手にばつと目立つのを特色とした。現にこの八足机に蒔繪せられてゐる菊花なども、表を梨子地にせられて居るが、加ふるにその形もすこぶる派手で、古今を通じての絢爛時代を偲ばせるに充分であるといはれて居る。

### 日暮料紙蒔繪硯箱

子爵 藤堂高寛氏藏

○ 子爵藤堂高寛家、隨一の家寶とせられて、一世にその珍奇の姿を誇るものに、日暮の料紙硯箱がある。常憲院時代の蒔繪もの、模様は支那風の樓廊山水、これが一杯に浮き出て、その精巧緻密な、名工の技に、眼を奪ふものゝある上に、配せられたる樹木には珊瑚を用ひてゐるほか、青貝や象牙をもつて所々を點綴する巨匠の腕の冴え、まことに、徳川初期唯一の藝術品を誇稱せられて居ることも、無理からぬ話である。

○ 徳川家の基礎、やうやく固まつた三代家光のころ、諸國に割據する外様の大名は、表面、徳川家へ歸順を装ふては居るが、それは皆うわべの空事にて、いつの時か、機を掴んで徳川家を倒し天下を掌握せん野心を抱いてゐた、徳川家には、參勤交代を始めた、外様大名の領地の四面に

日暮料紙蒔繪硯箱





日暮時繪硯箱

は、譜代大名を配し、その一舉一動をつぶさに探らせ報告せしめたり、隠密を送つたりして、野心の擡頭を牽制してゐたが徳川家に最も怖れたことは、外様

大名が、いづれも経済的に豊潤なことであつて、萬一の時には、兵馬を閲することが、比較的内容易に行はれるといふその一事であつた。

これ等の諸大名を、完全に自己の支配のもとに置き、枕を高くして寝るには、第一にかれらに對して、極端なる経済的疲弊を與へねばならぬことであつた。幕府の智囊が、最高幹部會を開いて、これが對策としてきめたことは「使拂ひ」といふ經濟壓迫法であつた、それは寛永十一年ごろ、たゞに外様大名のみならず、譜代大名に對しても、この政策を用ひることになつた。使拂ひ」といふのは、四海の波風靜かになつたためもはや軍用金の貯藏に及ばぬ筈、生活に必要以外な金は、悉く使つて仕舞へといふ意味なのである。

諸藩の大名は、この政策が實行されかゝると、ひとしく、自己の勢力と、幕府の勢力をくらべて見た。しかしそこには、あまりにみぢめな自己の姿が現はれて來るため、諸大名は最早、大勢力に對する反逆の矛を納めて、唯々諾々としていひなり次第になつた。この使拂ひの政策は、一面に諸藝術の勃興に、異常の刺戟を與へたのは無論であつた。この時代に、一世を驚かすやうな

日暮料紙時繪硯箱



贅澤な藝術品が現はれたことは、一再でなかつた。その頃藤堂家の當主は、大學頭高次であつた。高次は幕府から、この經濟疲弊政策の實行を強要せらるゝと、矢張りあり餘つた貯藏金で、いろ／＼贅澤なものも造らねばならなかつた。

高次が求めた各種の藝術品のうちで、眞に一世を驚ろかすに足るものと稱せられたのが、この日暮料紙硯箱であつた。これは當時隨一といはれた蒔繪師、梶川某に申付け、金に糸目をつけずに製作させたものであつた。この話が傳はると、三代家光はすぐに高次を召して、その料紙硯箱を一見したいと望んだ。高次は大自慢で、硯箱を持參すると、あかずに眺めてゐた家光は、格別結構に出來てゐるので、見あかずに日を暮らさせる絶品だと激賞した。高次は面目をほどこし、この紀念のためにと、この料紙硯箱に、「日暮」の銘を與へた。これは、藤堂家代々の秘寶とせられて來たが、いつか、分家であるいまの持主、藤堂子爵家に傳はつたものである。

### 國寶 慧安東巖蒙古降伏祈禱文

京都 正傳寺藏……

慧安東巖の蒙古降服祈禱文は、京都正傳寺の所藏になり、國寶の指定をうけて居るもの、蒙古襲來の國難をうけた文永の昔、わが國民の胞より迸はしり出た愛國精神のいかに熾烈であつたかを見る、たゞ一つの參考資料ともなるべきもの、事實、當時の空氣を知るうへに於て、この祈禱文を描いては、他に正確なことを知る事が、頗る困難だといはれてゐる。

東巖は、天臺宗書寫 山圓經 寺の僧侶、夙に國士の風あり、豪宕不羈の性、あたりに鳴りとどろいた、文永年間、悟る所あつて、禪宗教義を學ばんために、支那に渡らうとして、筑前博多まで來ると、こゝで、當時名僧の名高かつた、悟空といふ大智に會つた、そのために、支那に行くことを中止し、悟空について禪道の妙諦をきわめ、京に歸つて、福田庵を結んだ人であつた。

文永五年の二月、蒙古の使者が、始めてわが朝に渡來した。そして鎌倉の北條執權職に會つていろいろの事を申込んだが、鎌倉幕府では、一料簡で計らひ兼ねることから、朝廷へ奏上してお指揮をうけ、その趣きを蒙古の使者に、返事として與へねばならなかつた。しかし蒙古の申込が穩かなものでなかつたので、これに對する返事は、使者に與へられなかつたので、使者はそのま

慧安東巖蒙古降伏祈禱文



正傳禪寺住持東巖 慧安大衆 某甲存神  
一心啓白八幡大士六十餘明一切神壽  
今日本國天神地祇以於正法治國以來  
詔額眷屬充滿此間草木土地山川泉澤  
水陸虛空無非雷逆和光之慶各、振威  
各、現德可令研伏他方惡賊首在女帝  
名曰神功懷胎母人相苗產月為防他則  
無量惡敵誓心火定起勇猛心日之國中  
一切神祇知其志念皆隨從歸於千珠  
大海枯竭燦於滿珠海水盈滿無殺惡敵  
漂沈無餘此之兩珠俱是如意今現在於  
玉宮正殿十善華開寶珠集現十惡之眼  
靡不可見昔日神功堂異人乎今八幡宮  
大菩薩是渴惡滿神唯無善根正傳一衆  
懇懇祈念鎮護捨幼甚深依佛大衆 某甲  
今在天地樹下石上草衣木食滴水寸土  
無非對恩行道於善賢歸國家和恩報焉

寶國 慧安東巖蒙古降伏祈禱文

ま蒙古に立還つた。この事實は、日本ぢうの津々  
浦々の耳から耳へ、矢のやうに飛んだため、國難  
來の不安な豫想にうたれた人々の心は、恐ろしい  
動搖がつゞいて、神社佛閣につめかけては、何十  
日間といふものは、日本が永久に安泰であるやう  
にと、お禱りを始めた。——この禱りをするこ  
は、鎌倉幕府でも、特にその費用を與へて、獎勵  
したぐらゐであつた。

○ 兎角するうちに、文化六年の九月に、いよ／＼  
蒙古が大軍を閲して、日本に攻入るとなごいふ噂  
が傳はつて來た。人々の胸は、一樣に眞黒な雲に  
滲んで、生ける空がなかつた。東巖はその時、四  
十五歳であつたが、噂のその日もすぎた十二月か

ら、幕府獎勵のお禱りとは全く關係なく獨力をもつて、京の岩清水に籠り、六十三日間の禱りを  
つゞけた。——この時に奉つた願文と卷數は、いま京都の帝大で、秘藏をして居る。

○ 文永七年、蒙古よりは二度目の特使がやつて來た。東巖は、早くも穩かならぬ空氣が流れて居  
るのを知つて、いよ／＼人間の力を超した佛の力に頼らねばならぬ事を知つて、その年の十二月  
二十七日から、翌年の三月一日まで、第二回の禱りをつゞけた。場所は前と同じ岩清水であつた  
が、その時の願文と敬白文が、いま國寶の指定をうけて、正傳寺に保存せらるゝそれである。二  
度目の特使が來朝した時は、朝廷より蒙古へ返事を與ふることに、廟議一決したので、東巖はこ  
れを限りなく憤ほり、これ日本の國辱だと、輿論の喚起に努めたので、幕府では、蒙古へする返  
書の原稿まで出來上つてゐたのだが、輿論をおそれ、つひに握りつぶしにし、二度目も返事を  
與へなかつた。當時東巖がいかに民衆のうちに力を藏し、幕府に怖れられてゐたかを窺ふに足る  
一事である。

○ 願文は卷物にせられてゐる、その軸のところ、小さく和歌一首が刻まれてゐる、和歌は——

慧安東巖蒙古降伏祈禱文



「末の世の、末の末までわれ國は、よろづの國に、すぐれたる國」といふのである。——文永九年に、蒙古より三度目の使者が來たが、幕府はこれにも返事を與へなかつた。やがて文永十一年十月三日に、高麗と蒙古は共同で大軍を動かして、隱岐對馬に掠奪を擅まゝにした、それから八年目、建治も過ぎて弘安四年の五月及び閏七月に、三度襲來したが、此時は筑紫の神風に遭つて、蒙古の軍勢、悉く懺滅した。東巖は、弘安の役の始まらぬ前、建治三年五月、齡五十三歳で死んだ。——東巖は、應永二十年、稱光天皇から禪師號を贈られ、宏覺禪師となつた。かれの願文と敬白文の藏せられてる京の正傳寺は、最初今出川一條上ルに建立されたが、後洛西賀茂に移されて現在に及んでゐる。正傳寺の方丈は、桃山御殿からうつした建物で、保護建造物になつて居り、畫聖永徳の描いた屏風なども藏せられて居る。

### 大日本史草稿

……伯爵 徳川圀順氏藏……

元祿四年五月、常陸太田の西山に光圀居を結び、粗衣粗食、西山隱士と稱し、閑雲野鶴をと

もとして風月を樂しんだ徳川光圀、飄逸の一面に、齡若きときより勤王の志すこぶる厚かつた。いま徳川圀順侯第一の秘寶となつてゐる光圀の選した大日本史の草稿史冊、この修史を志したときは、光圀は僅か十八歳の時、かれの一生のうち、この大日本史の選に志したこと、元祿五年八月、攝津湊川に於て、朱舜水の贊を碑背に刻んで「嗚呼忠臣楠子之墓」と自ら題した碑を建て、天下正道を明かにした二つの事柄は、光圀の愛國勤王を歴史的に語つた、最も大きな事實である。

○ 徳川光圀の選した大日本史、すべて四百三卷より成り、古代より南北朝にまで及んだ國史である。光圀がこの修史を思ひ立つたのが正保二年であつたが、明曆三年には彰考館を創立し、元祿十年には既に神武天皇より後小松天皇にいたる百王本紀が出来上つたが、光圀は同十三年、病を得て死んだ。光圀の訃音が幕府に達するや、幕府は天下に令して、七日間音曲を停止せしめたといはれてゐる。光圀が世を去つても、かれの子孫は、かれ一生の大事業であつた大日本史の遺志を繼ぎ、その完成に急いだが、正徳六年、本紀列傳とともに脱稿し、嘉永二年には紀傳出版の運びとなつた。



○ 光圀は徳川頼房の第三子であつたが、兄の頼重を越して水戸家の相續者にせられたので自らを安んぜなかつたといはれてゐる。十八歳の時伯夷傳をよんでその高義を慕ひ「載籍あらざれば虞夏の文得て見るべからず、史筆によらざれば何を以て後の人をして觀感するところあらしめんや」と叫び、懺立修史に志したものであつた。光圀はこの大業に志すや實録を探ねまたは私史を搜り、幾多俊才の士を招きて檢討反覆し、つひにこの大偉業を成し遂げるまでには、光圀及びこれを圍繞する學徒俊才の骨や血が、殆んどこの仕事のうちに溶けこんだといはれるぐらゐに、苦心を重ねたさうである。

○ この大日本史を見ると、そこに幾多かれの卓見が現はれて來る。神功皇后を后妃に列し、大友皇子を本紀に掲げ、正朔を南朝に繋けて、神器の京都に入るに及びて、始めて統を小松天皇に歸したことを書誌してあるなどは、その一例である。光圀はこの大日本史を、初めは朝廷をはかりて名を附せず、たゞ史稿とばかりいつて居た。光圀の死後、かれの子孫はこの志を繼ぎて、校訂刪補を怠らなかつたが、玄孫治武にいたりて、關白鷹司政熙によつて、大日本史の名を公

にせんことを請ふた。

○ この時は百王本紀すでに成り、光圀の死後、正徳五年四月のことであつた。宮中では、そのことについて度々會議が開かれたが、つひにお許しになつたので、水戸家では直ちに鏤刻にかゝり、上表してこれを獻じた。その時これを御覽になつた光格天皇のお喜びは、一と通りでなかつた。つひには、有難きお言葉をさへ水戸家に賜はつた。光圀は、文教未だ明かならざる時にあつて、尊王を唱へ明文を正し、心を修史につくして千古の廢典を起したといふかどで、明治二年十二月に從一位を贈られたが、明治三十三年十一月、さらに御追贈のことあり、正一位に陞叙せられた。

### 大石良雄所用の手鑑

侯爵 徳川達道氏藏

赤穂浪士の吉良邸の討入は、三歳の兒童にも知られてゐる名高いもの、今更喋々を要しない。この手鑑は元祿十四年十二月十四日、吉良の邸に討入つた折、總大將の大石良雄が用ひたもの  
大石良雄所用の手鑑

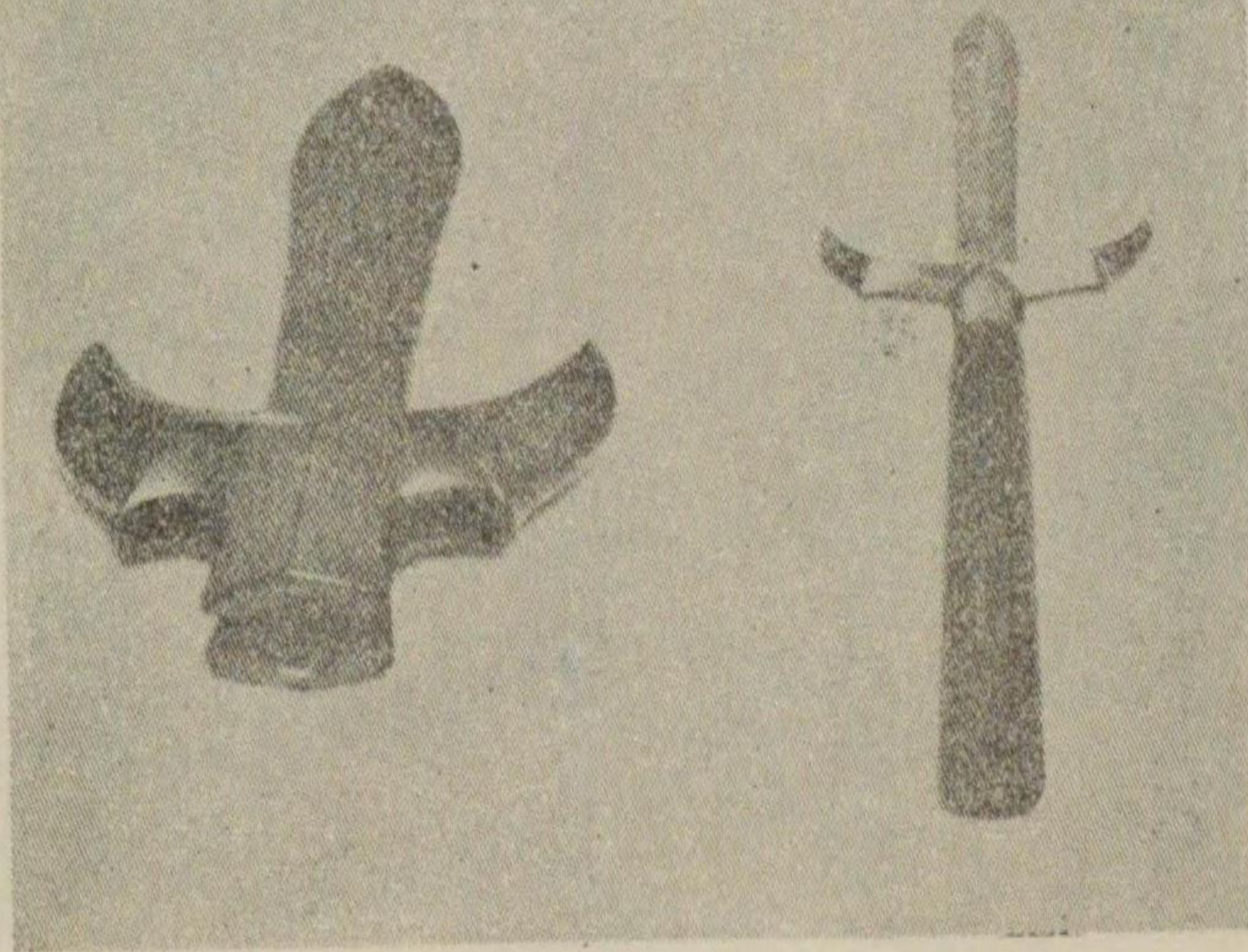


# 千鳥十字字鑑

銘住東叡山忍岡邊

延寶三乙卯年八月日虎入道赤穂浪士大石良雄所持

赤穂浪士大石良雄所持



その氣魄が漂ふてゐるかと思はれる、一ツ橋徳川伯爵家の秘藏で、かつて公開されたことのないもの、國民精神の鼓舞に資する参考品の一つとして異彩を放つものである。

この形を「千鳥十字字袋穂」と云ひ、長さは縦三寸五分、横二寸で極めて少さき形である。寛文年間、長曾根興里が鍛えたものである。銘に「住東叡山忍岡邊、延寶三乙卯年八月日虎入道赤穂浪士大石良雄所持」とある。

## 國寶、北野天神緣起繪卷

…北野神社所藏…

紙本着色、縦一尺七寸二分、天満宮菅原道真公の傳記繪で、總て八卷である。古來同種幾多の天神緣起中、特に此の八卷本は承久本又は根本緣起と稱し、最も古く最も代表的のものとして尊重されてゐる。第一卷より第六卷迄は専ら菅公の一代に關する事蹟。七八兩卷は地獄變相、天人衰相等を圖す。筆者は藤原信實、詞書は後京極良經と傳ふるが適證はない。色調豊麗、筆致極めて健放自在、やゝ野趣を有し特異の感覺に富んでゐる。

國寶、北野天神緣起繪卷



日本名寶物語

國寶 北野天神緣起繪卷 (恩賜御衣の圖) (一)



國寶 北野天神緣起繪卷 (恩賜御衣の圖) (二)



國寶 北野天神緣起繪卷



### 毛益筆芙蓉麝香猫

……男爵 團琢磨氏藏……

毛益は南宋の始頃孝宗の乾道中畫院の待詔となつた人で、動植畫の名手である。我が國に流轉

毛益筆芙蓉麝香猫



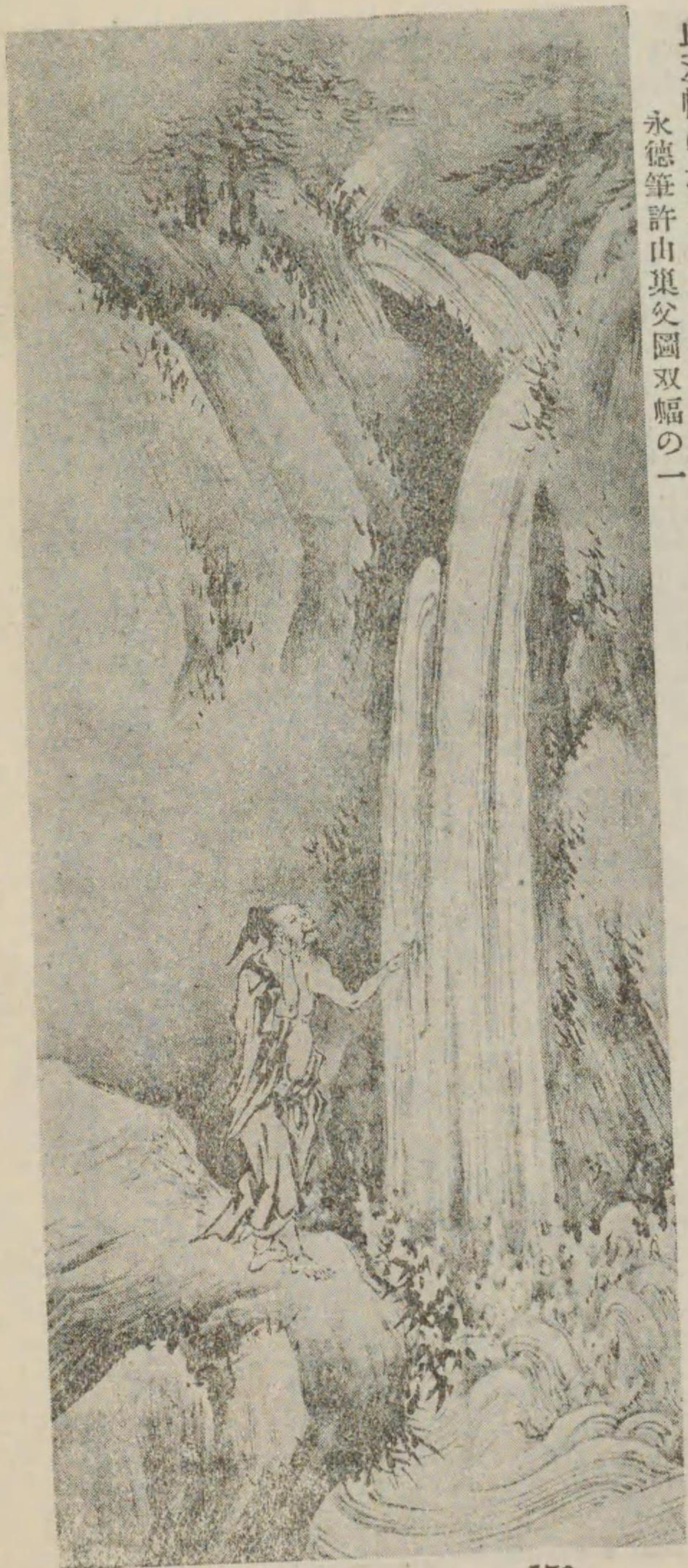
した毛益の内では、まづ此の麝香猫を推して代表的のものと稱してよからう。金泥を交へた設色の  
美妙は南宋畫院の盛觀を偲に餘ある神品である。此幅もと仙臺伊達伯爵家傳來の寶汁であつた。

### 永徳筆許由巢父圖

……小川常吉氏藏……

此双幅は秋元子爵家の舊藏にかゝる有名なる永徳である。永徳は狩野元信の孫、織豊二氏に仕

永徳筆許由巢父圖双幅の一



毛益筆芙蓉麝香猫



へて、専ら當時の建築裁飾に巨腕を揮つたのであるから、双幅畫の遺作は比較的少い。其の内に此畫は彼が活達豪放の特風を示して、どこことなく莊重の貫祿を帯び筆に千金の力がある。

永徳筆許由集父圖双幅ノ二



### 傳光源氏繪冊

……伯爵 伊達興宗氏藏……

伊達興宗伯の秘寶、數あるうちにも尊ばれてゐる源氏繪の帖、これは土佐光元の繪と傳へられてゐる。源氏繪といひ、源氏物語繪卷といひ、いづれも題材を「源氏物語」によつたものである。ことは無論であるが、「源氏物語」の著者は、平安朝一代の才媛を謳はれた紫式部、五十四篇より成る小説で、光源氏といふ貴族を中心に置き、當時の上流社會に流れて居た油のやうな空氣を、縦横に描破した傑作である。前後二卷にわかれてゐて、前卷四十一帖は光源氏の生ひ立ちから、死ぬまでのかれの動きを描いたもので、光源氏の周圍に、多くの貴賤男女を織込んで、その性情の相違を書綴つてゐる。

○ 次の三帖は、後篇十帖との間をつなぐ連鎖的の記述になつて居り、その後篇十帖には、光源氏の子童大將と匂部郷安を主人公とし、これに大君、中君、浮舟を取交せて脚色して居る。

傳光源氏繪冊



前篇の物語りは錦繪をくる如き華かさがあり、後篇に盛られたるものは、俄かに世界を一轉して沈鬱古沼の寂びた趣きがにぢみ出てる。この兩篇が互に呼びかけることによつて、その構想の上へ限りなき變化と興趣を集めて、平安當代の空氣が、紫式部の絢爛なる筆先きに躍つて、餘す所なきまでに書きなされてゐる。

紫式部が、この著を發表した時、「源氏物語」が、平安朝の智識階級に數賞せられたことは、實に想像のほかであつた。そして當時の畫家のすべては、競つてこの「源氏物語」を繪にすること、この世に生れ出でた一つの使命でもあるかのやうに、誰彼れも繪にした。そしてその繪なり繪卷なりが、これまた異常の歡迎にあつたことは、想像のほかであつた。足利の末葉に土佐光信が出て、盛んに殿上、有識の繪を描いてから、この刺戟にあつた土佐派の畫家たちは、源氏繪を描くに長じて、或者は素描に、或者は彩色に、競つて華麗精緻を極めたものを發表した。

源氏物語繪卷中、優秀を稱へられたものは、主殿頭隆能の繪で、詞書は世尊寺權中納言伊房と傳へられて居る。隆能は寛治ごろの畫人、伊房は永長元年九月十日に死んで居るから、ほどそ

の時代も窺ふことが出来る。この繪卷はいま殘缺を諸家に秘藏せられてゐる。足利時代の末より桃山時代にいたるまでの源氏繪を代表してゐるものは、伊達家の光元と傳へられるものであるが、光元は土佐光茂の男、天文十年二月、從五位下左近將監に任ぜられたが、永祿十二年一月十三日故ありて戦死を遂げた人である。時に三十歳であつた。光元の遺したといはるゝものは、伊達家の源氏繪、天神、大黒、若竹鶏繪屏風、酒飯論などがある。

### 小僊筆避暑閑居圖

……子爵 青山忠敏氏藏……

吳偉、字は次翁、小僊と號す。明朝中期の人で、浙派の大家である。小僊の畫は古來我邦に舶載したのが少からずあるが、就中此の双幅は最も大にして最も勝れたものである。題讀は小僊の歿後二十八年目の嘉靖十五年の追書で、筆者東郭山人鄒守益は王陽明の高弟で、續文章軌範を選んだ有名なる學者である。



小僊筆避暑閑居圖

小僊筆避暑閑居圖



小僊筆避暑閑居圖双幅の二



小僊筆避暑閑居圖双幅の一

日本名寶物語

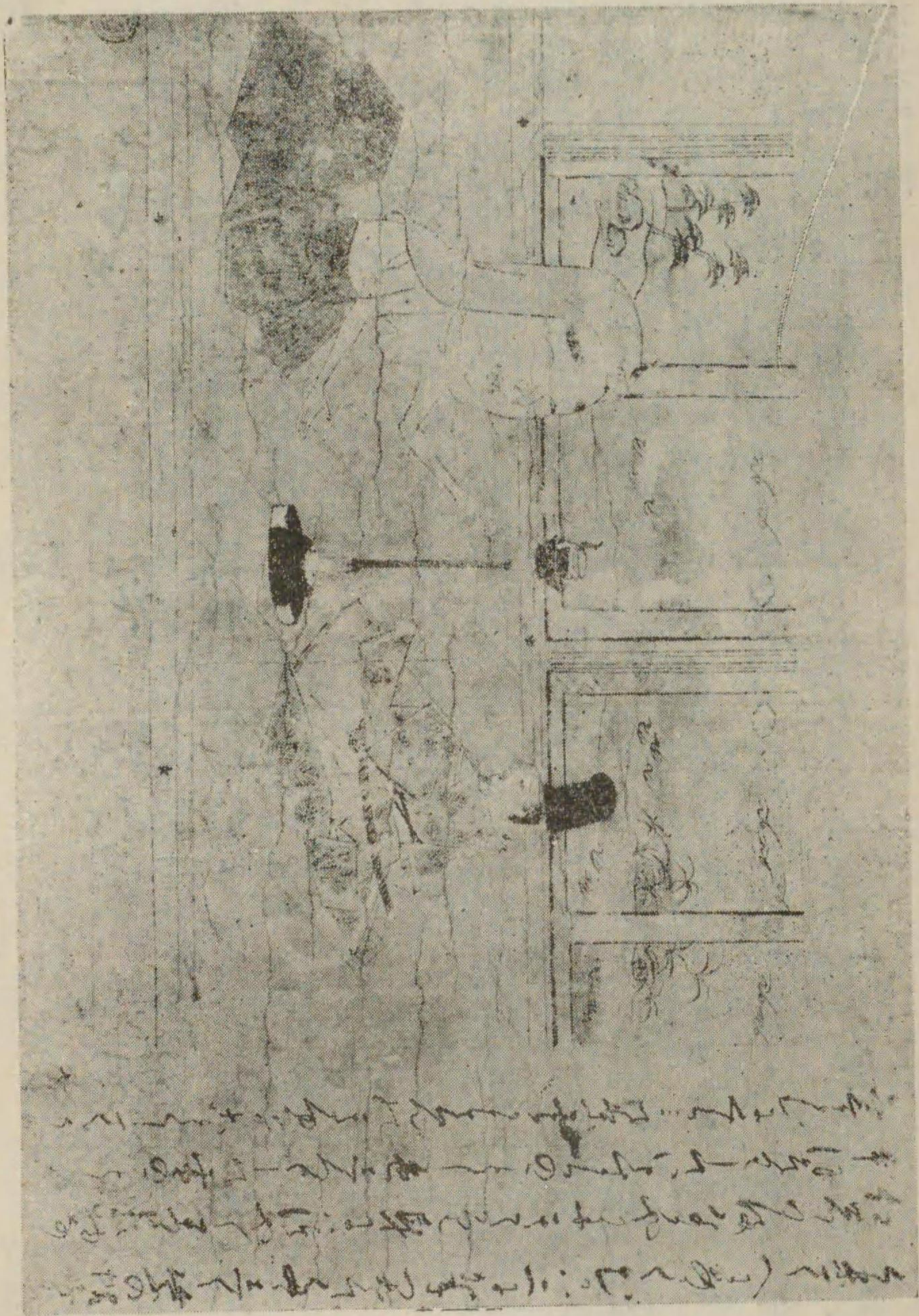


# 土蜘蛛草子

……東京 希室博物館蔵……

この繪卷は、丹波大江山の酒吞童子征伐で有名なる源頼光が、その四天王渡邊綱等と土蜘蛛退治をしたといふ傳説を描いたもので、繪と詞書とでおの／＼九段となつてゐる。筆者については、諸説紛々で、いづれを信すべきかは可成困難な問題である。或者は土佐光顯だといひ、或者は土佐長隆だといつてゐる。また詞書についても兼行法師の筆であると唱へる人もある。

○  
光顯は、永和、康暦の頃の人であらうと想像はされてゐるが、果して然うか、今の處詳らかではない。従つてその作品だといふものに信賴するに足るものが殆んど傳つてゐないといつてよい程である。長隆は「藤原長隆」とも稱してゐた。鎌倉時代に、正二位左中將家信の四男として生れ、自分も從五位下越前守に任ぜられてゐるが、當時の國畫風の大家として、却つて世に知られてゐる。晩年剃髮して「快閑」と號してゐた。年代から云へば、彼の蒙古襲來の前後即ち弘安、



土蜘蛛草子

土蜘蛛草子



永仁の頃の人である。

繪の筆致から見れば、鎌倉の末期か足利初期の畫風を持つてゐるので、或は傳ふるが如く、土佐長隆の作かも知れない。詞書の兼行説は全く當らないものと言はれてゐる。なぜなれば、兼行は、觀應元年に六十九歳で入寂してゐて、長隆とは年代を異にしてゐるからである。

○

この繪に現はれた傳説は、今日、能の中にも存在してゐる。  
小蝶といふ侍女、典藥頭よりの藥を持ち來りて、病中なる源頼光に薦めて去る。深更に入りて、頼光獨り病床に惱めるところへ、不思議なる僧形の者、病を訪ふとて出で來り、頻りに千筋の糸を投げかくれば、頼光は枕頭の膝丸を抜きて切りかけつゝ、「得たりおう」と罵る聲に化生の者は消え失せたり。一人武者は、かの聲に驚きて駈けつけ來り、ありし事どもを承りて、直に人々を伴ひて化生の者の血痕を追ひつゝ、葛城山なる古塚に達す。即ち其塚を取り崩せば、土蜘蛛の精靈顯はれ出で、千筋の糸を繰りかくるを、大勢の者ども中に取り込めて、遂に其首を得て歸る……

然し『土蜘蛛』なる言葉を、史實的に考察して見ると、元來、或る異種族に與へた異名であつて、古來我國に棲息してゐた穴居民族を指すものである。攝津風土記中に「此人垣に穴中に居る、故に賤號を賜ひて「土蜘蛛」と云ふ」とある。平安朝の頃までも、大和吉野川の上流に棲んでゐたらしく、右の傳説も、恐らく、この穴居民族を征伐した事件を、「土蜘蛛」といふ名から動物の「土蜘蛛」に傳化して、一種の妖怪變化の物語に組み上げたものであらう。冒頭の大江山酒吞童子征伐は、更にこの土蜘蛛退法から變化した傳説であるとするは至當でなからうか。因に、この繪卷は、もと片桐家の至寶であつたが、現在は帝室博物館に所藏されてゐる。

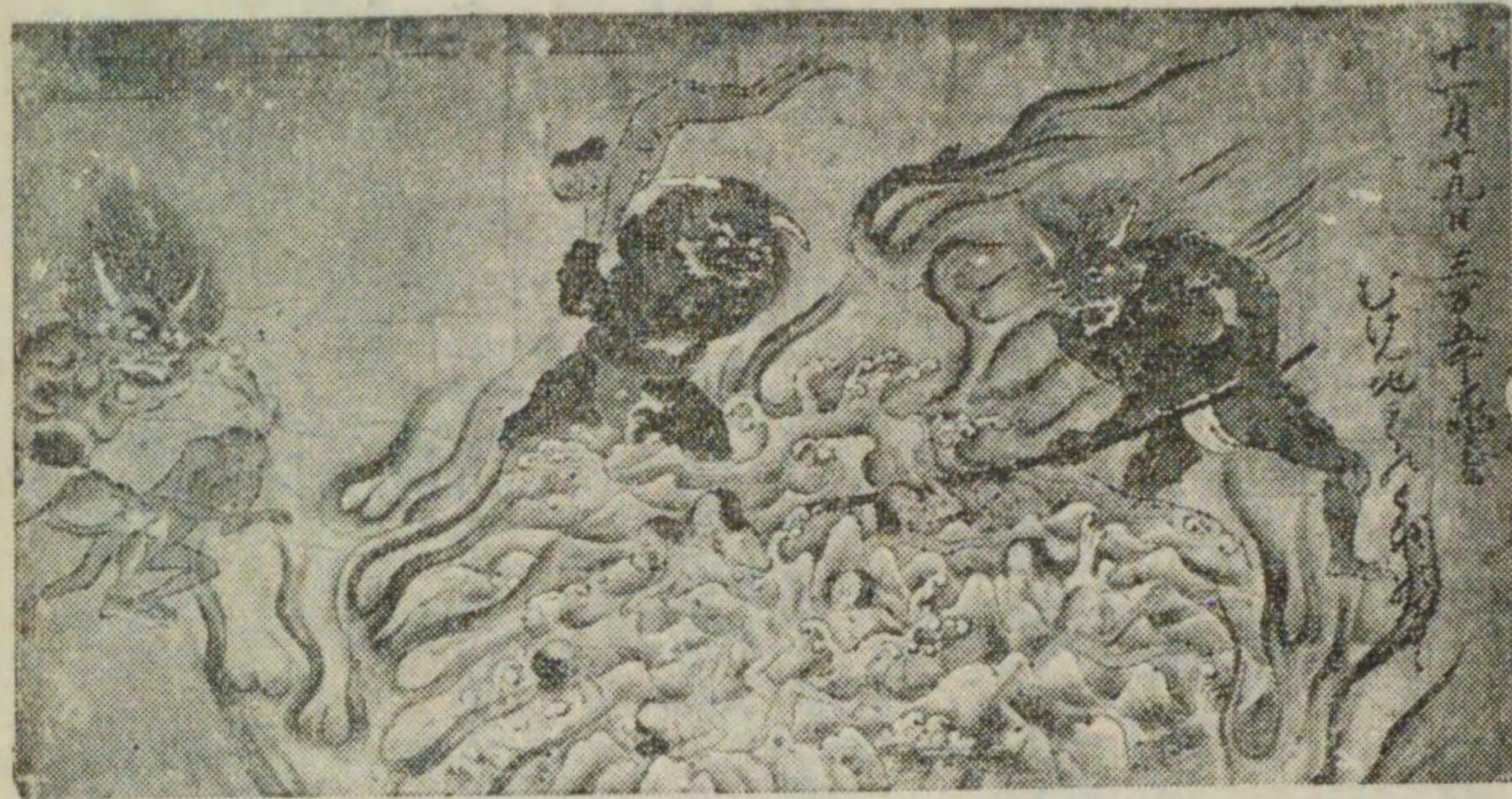
### 矢田地藏縁起繪卷

…根津嘉一郎氏藏…

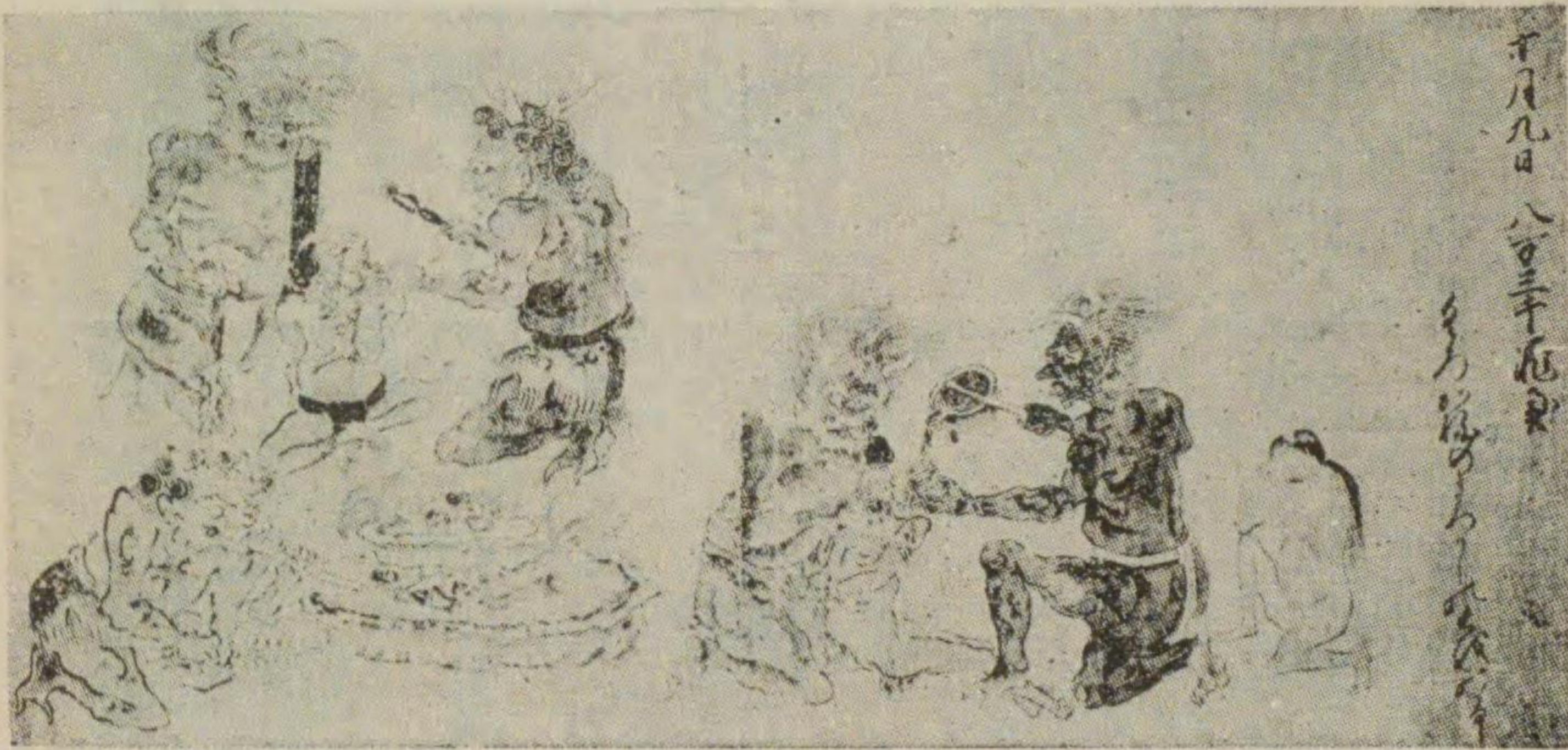
矢田寺（又は金剛山寺ともいはれてゐる）は、天武天皇の御代に、護持僧智通僧正が、天皇の御願によつて、大和國添下郡に建立されたもので、そこに安置されてある地藏本尊の因縁、靈驗

矢田地藏縁起繪卷





一の起縁藏地田矢



二の起縁藏地田矢

を、二卷の繪卷ものに收めたものが即ち、この『矢田地藏縁起』である。社寺の所藏なら既に國寶に編入さるべき名卷。

延暦十五年の頃、この寺に一人の聰明な上人が居た。そしてこの上人には厚く歸依して居る小野篁といふ男があつた。身は本朝にあるが、魂は閻魔廳にあつた。ある時、閻魔廳の群臣共は會議を

開いて、篁に菩薩戒を受けさせ様と勧めた。篁はこれを知り、戒師には是非、上人を呼んで呉れと申出た。上人は直に冥府に呼び出された。彼は閻魔廳に着くと、一度地獄といふものを見せ

て欲しいと魔王に頼んだ。閻魔王は、彼を伴れて、とある丘に立たせた。鐵の扉は重い呻き聲を立て、開かれた。見ると内は猛火が炎々と天に沖して燃えてゐる。その光景が如何にも物凄いで、流星の上人も襟を冷

した。すると、この猛火の中に一人の僧が現はれて、自分の苦惱によつて衆生を濟度してゐる勇ましい姿を發見した。上人は、王に『あれは誰れだ』と訊ねた。王は『地藏菩薩だ』と教へた。そして菩薩を呼んで、上人と話をすることを許した。

菩薩は『自分は釋尊附屬に従つて、惡業の衆生を濟度するために、斯くの如く身に炎を浴びて苦を受けてゐる。お前が、この王宮に来て菩薩戒を授つたために、地獄中の衆生は救濟された。お前は、こんど人間界に歸つたら衆に告げて「苦果を恐るゝ者、我に結縁せよ」と言へと、諭し



た。

上人は、魔王から一個の小箱を興へられて、再び人間界に歸つた。この小箱の中には米が一ばいに入つてゐた。しかも米は、いくら使つても減るといふことがなかつた。上人はこれを以つて人を助けると共に、地藏の戒を守つた。人々は、上人を『満米』と呼び、その徳を慕つた。そこで上人は、京から著名の佛師を招いて、等身大の地藏尊を刻らせた。その姿は、恰も、彼が冥府で目撃した地藏菩薩の光景を像つたといはれてゐる。

以上が矢田地藏の由來記で、この説話を繪卷にしたのが『矢田地藏縁起』であるが、この外に、この地藏の靈驗を描いた繪卷の一卷がある。同じく『矢田地藏縁起』と呼ばれてゐる。その靈驗の一つは、大和國宇智郡櫻井郷の武士、武者所康成が、幼児母と共に他家に養はれたが、繼父は、亡父の遺業を奪つた上に、康成を酷く虐待した。康成は怒つて遂に繼父を殺害しやうと決し、天慶五年九月、夜討ちに向つた處、運悪くも母を殺してしまつた。彼は大に自己の罪業を歎いて、矢田地藏に救ひを求めた。地藏は彼を憐んで、彼が歿後、地獄

の苦難から救濟してやつたといふ靈驗物語りである。

繪卷の作者は、高階隆兼(春日隆兼ともいふ)とされてゐる。隆兼は、延慶、元徳(鎌倉時代)の畫家で、四位右近將監繪所預に任ぜられてゐる。住吉家に傳へられてゐる摹本の奥書には「詞世尊寺殿、箱に家隆卿と書付あれど非なり。繪春日隆兼眞顯無相違者也」とあるが、畫風から察すると、南北朝以後のものらしく、卷の奥書には『正徳五乙未歲五月某寄附』として、施主の名と法林寺の名が書いてある。法林寺はこの繪卷の最初の持主であつたらう。因みに、矢田寺は淨土宗西山派の寺で、現に京都市上京區寺町三條上ル天性寺前町に在る。

### 天狗草子繪卷

帝室博物館藏

全部で七卷本となつてゐる。即ち、興福寺、東大寺、延曆寺、圓城寺、東寺、醍醐寺、高野山の各一卷で、こゝに掲げた繪卷の一部は、右のうち帝室博物館が所藏してゐる延曆寺の一卷であ

天狗草子繪卷



る。

筆者については、慶安の頃、土佐派の大家として知られた土佐行光であるといはれてゐるが、果してさうか判然しない。或者は土佐光信だと稱してゐる。然し、この繪の筆致から窺へば、恐らくは鎌倉の末期か、然らずば足利の初期の作であることは、間違のない處であらうと思ふ。又徳川公爵に所藏されてゐる『興福寺』の詞書には『干時永仁四年之天初冬十月之日なり』と録されてゐるから、大體の見當はつくだらう。

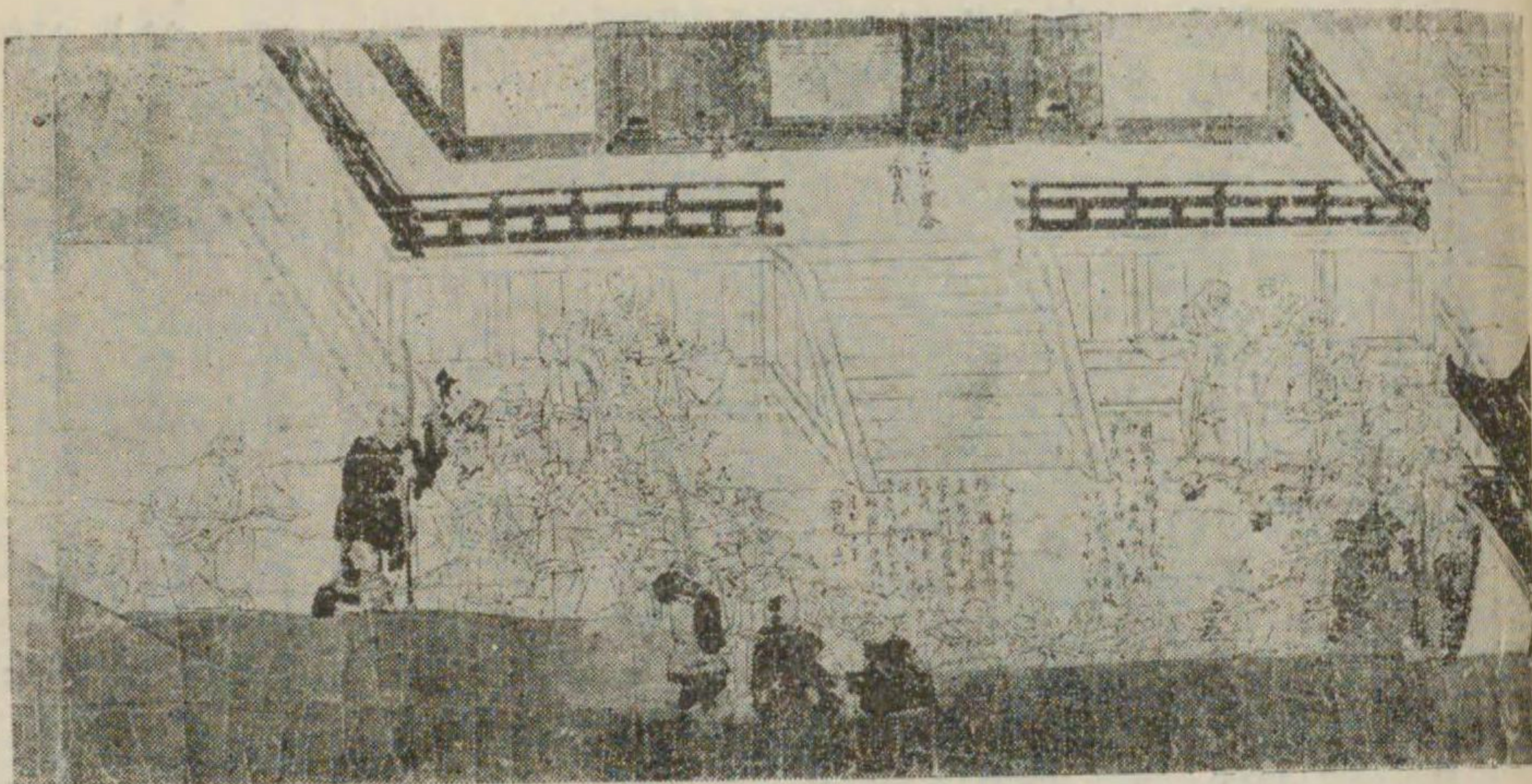
非常に繊細な筆の運びと、精妙な色彩を放つてゐるところ、風景畫としても確に、素晴らしい傑作であることは、今日と雖も猶専門家の讃を吝まぬ作品で、當時の國畫風の一標本であるといつても決して過言ではあるまい。

この繪卷を『天狗草子』と呼ぶに至つた由來は斯うである。その詞書の中に  
魔界の果報は、僞慢をもて正因とし、謡曲をもて助業とす。慢に七種あり。いはゆる卑慢、慢、過慢、慢過慢、我慢、邪慢、増上慢是なり。これによりて日本國の天狗多しといへども七種を

いす。これ即ち、興福、東大、延暦、圓城、東寺、山臥、通世の僧徒なり。これみな我執に任じ、僞慢をいだき、名聞をさきとし、利害を事とすとあるから、當時の興福寺、延暦寺等の僞慢なる僧徒の生活を『天狗』に諷して戒めたものであらう。

この『天狗草子』の外に、今一つ同じ名で世人に傳へられてゐる繪卷ものがある。即ち、土佐永春の筆といはれてゐる、別名『是界坊繪詞』のことである。これは足利初期の作であるとされてゐるが、畫題の内容は全然異つてゐる。

支那から日本へ渡つて來た『是界坊』別名『是害坊』といふ僧、日本を小國と侮つて、日本の僧徒等と盛んに宗論を戦はして見たが、脆くも敗北の憂目を見た上に、



天狗草子繪卷の一部

清水寺縁起物語繪卷



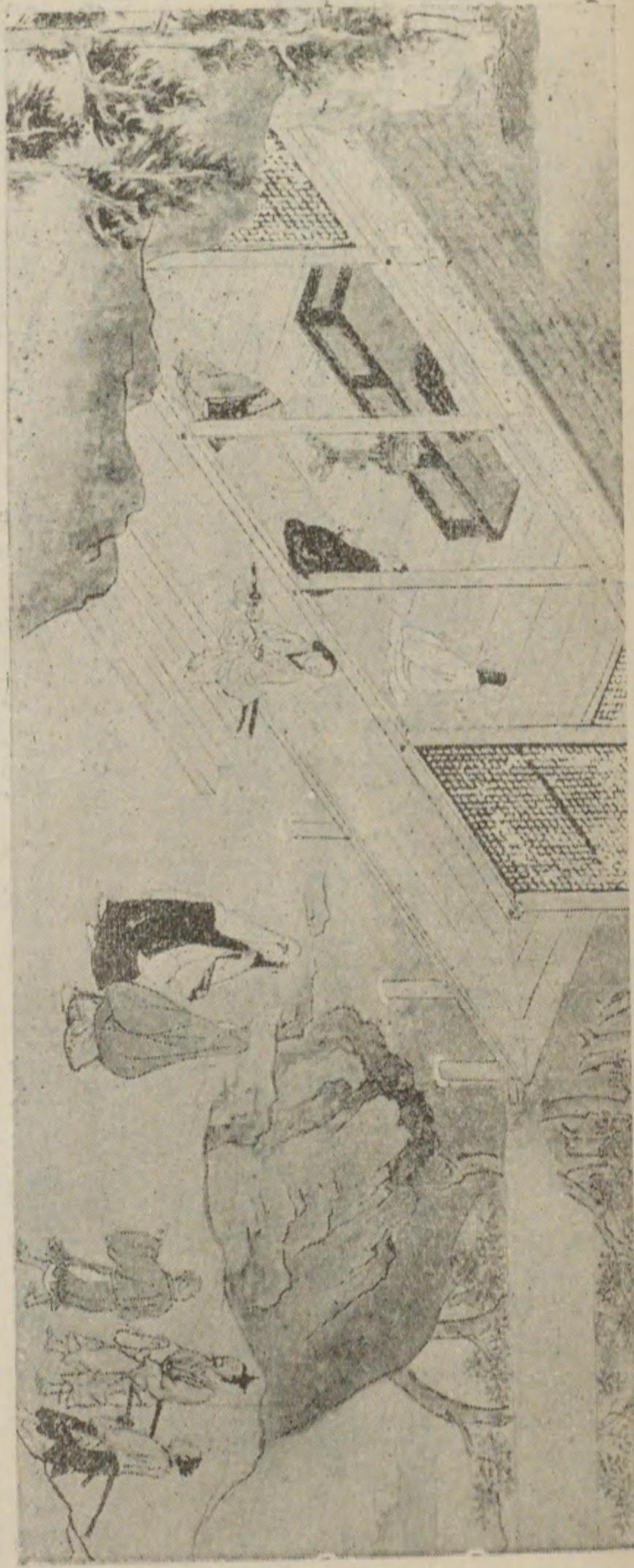
ひどい老病に取りつかれて逃げ歸ることもならず、悶々の永い月日を、加茂川の上流、とある湯治場で送つたお蔭で、漸く身心を清淨にし、スゴく〜と故國に去るに當つて和歌一首を残して行つたといふ話を畫にしたものである。世人よく兩者を混同する虞れがあるので特に附記して置く。

### 清水寺縁起物語繪卷

帝室博物館藏

帝室博物館のものになつてゐる清水寺縁起は、繪卷もの、一つで全三卷になつてゐる。繪は悉く土佐刑部大輔光信の筆、詞書は上卷が、近衛關白道直と中御門大納言宜胤、中卷が三條西右大臣實隆と東山右大臣義政、下卷の筆者は、三條太政大臣實香と、甘露寺大納言元長の筆になつて居り、いづれも美しい水莖のあとが、光長光起とともに、土佐三筆といはれた、巨匠光信の精魂を傾けた繪卷へ、さらにあやかなる匂ひを滲ませてゐる。

光信は土佐宗家の畫人である。畫所預となつて、さらに右近將監を関し、越えて刑部大輔に進



第一の巻繪物語起縁寺水清

み從四位下に叙せられた畫人である。畫家に生れた光信は、代々の血をつて最も畫にしたしみ父廣周の畫法を學んで、幼時より畫香複郁としてあたり放ち、廣周より限りなき期待を傾けられてゐた。二十餘歳の時、明國に遊ばんと欲して計畫を進めたが、とう〜その計畫も挫折した

清水寺縁起物語繪卷



ので、こんどは焦點を他にうつし、古來和畫に名のある覺融、信實、宅魔、巨勢、住吉などの筆意を窺ひ、長所のみを咀嚼して、自己の一丸とし、獨特の風を拓いた。光信の畫は専ら氣韻を主とした。その人物を描くに主力をそぐ所は、身體衣冠の姿と、男鬚髮の態にあつたといはれてゐる。彩墨ともに細筆を用ひて、彩畫には金碧を施し、墨畫には輕暈を加へたので、内に筆の力を伸ばし、外に逸遊芳艷の情を現はしたので、その雅致巧妙、當時の畫壇を驚ろかせるに充分であつた。この巨匠があらゆる自家の特長を誇張して描きあげた清水寺緣起物語繪卷、この一作の前に、畫人悉くひれ伏したといはれてゐる。

○ この繪卷の上中二卷は、重に坂上田村麿の蝦夷征伐の繪が描かれて居り、下卷には僧兼慶が諸國修業のさまを描いたものであるが、これは、足利時代の風俗を假りて描いて居る。光信は大永五年五月の廿日、九十二歳の高齡で死んだ。光信の作品には、この清水寺緣起始め、源氏五十四帖表紙の繪、大畫源氏屏風十雙、石山寺緣起などの大作がある。

### 國寶 餓鬼草子

……備前 曹源寺藏……

岡山縣上道郡富山村にある古刹曹源寺、こゝに國寶の指定をうけてゐる餓鬼草子が、第一の寺寶として庫裡深くに秘められてゐる。詞書を書いた人は、誰であるか明かでないが、繪は土佐光長と傳へられてゐる。一丈七尺八寸九分の長さある大物、これが七段の繪詞になつて居るが、これから押して、ほかにも殘缺のあることが想はれる。第一段の詞書には「鬼あり、食水となつたがきかみたれておもてにほおさりふたがりてさのみることあたはず、飢渴の火身のうちをやくとあり、さんくと垂れたる髮、面を蔽ふた物凄き餓鬼が、川の水を飲もうとして居るのを、守水の惡鬼、牙を鳴らしてこれを吐るところや、追はるまゝに去つて行く旅の人の、水に濡れた草鞋を嘗めて飢を凌いでゐる所などが現はれてゐる。

○ 第二段には、塔婆に滴る水を飲もうとしてゐる餓鬼の圖があり、この詞書には「おなじ鬼また

國寶 餓鬼草子





國寶 餓鬼草子の一

人の死にたる親の爲めに水を汲みて施す滴りをわづかにあたりつきて飲みて命を保つ」など、書かれるる。第三段は「日蓮始めて六通を得て亡母の恩をむくひんと思ひて」といふ説明の繪に、日蓮が老母に食を進めやうとする、そこより火を發して食ふことが出來ず、日蓮もさすがに佛に縋りこの苦痛を救ふ方法を聞こうとする所を描いてる

る。第四段には日蓮が佛説に従つて、まづ第一に大勢の僧を供養し、その餘り物を母に與へて、腹を充たさせやうとする圖があり、その詞書には「佛答へ、宣はん、汝飲食をまうけて自慾の僧を供養し」とある。この第三、四の二段は、日蓮の故事によつて、餓鬼の苦を現はしたものである。

第五段には「恒河の邊りに五百の餓鬼あり、天量劫の中に水を得ること能はず、河の邊りに至ると雖も、水皆火と見えて飲むこと能はず」といふ詞書に對して、光長は、佛渴鬼のために慳貪の應報を説き、濟度の法をきかせやうとするが、渴慾にせかれてその法耳に入らないので、佛少しの水を與へたので、その理が通ずると共に、餓鬼道を脱して天國に赴く圖を書いて居る。

第六段に描かれた繪は、被髮長面の餓鬼が、阿難に解脱の途を問ふたので、阿難は佛に計り佛名を唱へ、種々の供養してその苦患を遁れさせるところであるが、これには「鬼あり焔口となつて、その形醜くして瘦せ枯れたり、口の中より火燃えて」との詞書がある。第七段には、「佛阿難に教へ給ひしにまかせて比丘あり」とあり、比丘佛の教へによつて、四佛の名を唱へて回向し

國寶鳥獸戲畫



供物を餓鬼に施して苦患を救ふところを描いてゐる。以上の第五、六の二段は、鬼道飢渴の苦患を救ふべき手段を説いたものである。

### 國寶 鳥獸戲畫

…山城 高山寺所藏…

鳥羽僧正は平安朝末の畫家、名は覺猷、大納言隆國の子、覺圓僧正の弟子である。大治五年正月十九日權僧正に任ぜられ、長承元年五月二十七日僧正となり、同三年閏十二月二日大僧正に轉じ、保延元年九月二十三日兼法務となり、同二年四月大僧正並に法務を辭し同四年十月天臺座主に補せられ法輪院と號したが、まもなく辭退して同六年九月十五日入寂した。歳八十八才であつたが、僧正は畫を善くし筆致飄逸でしかも姿態活動し、當代の名匠のみならず、古今を通じての名匠であつた。

その作品今日に傳ふるもの、最も名のあるのがこの『鳥獸戲畫』である。倭錦には鳥羽僧正戲畫叢書續光長筆とあるが鳥羽僧正一人の手に成つたもので、うち二卷は猿、兔、狐、蛙の類の

遊戯圖で、一卷は龍、虎、牛、馬、鶏、犬の戲圖、一卷は人物の遊戯である。この四卷あつて國寶となつてゐる。僧正は資性洒落で磊落の筆致と奇抜な意匠を以て當時の人々を驚かしたので、後世徳川時代に至り戲畫を試みる者がこの僧正の名をかりて『鳥羽繪』と呼んだので即ち僧正がその元祖となつた。古今著聞集に僧正の逸話を載せて云ふ。

鳥羽僧正は折き世にならびなきるかきなり、法勝寺金塔の扉の繪かきたる人なりいつほどの事にか供米の不法の事ありける時、繪にかゝれける、辻風の吹きたるに、米の俵を多く吹き上げたが、塵芥の如く空に上るを、大童子、法師ばら、走りより、取とどめんとしたを、様々に面白く筆を揮ひてかゝれけるを、誰がしたりけん、その繪を院御覽じて御入御ありけり、その心を僧正に御尋ねありければ、あまりに供米不法に候て、實の物は入り候はで、糟糠のみ入りて、軽く候ゆるに、辻風に吹き上げられ候を、さりとはとて、山法師ばら取り止めんとて候が、可笑しく候を書いて候と申されければ、この比興なりとて、夫より供米の沙汰きびしくなつて不法の事なかりけり、同僧正のもとに、繪かく寺法師ありけり、あまりに好きならひければ、後さまに僧正の筆をも耻ぢざりけり、此事を僧正嫉ましくや思はれけん。如何にもして、折を見出さんと思ひ給ふ所に、ある時件の僧、人のいさかひして腰刀にて突合





一の畫戲歌鳥賣國



二の畫戲歌鳥賣國

ひたるを書い  
て、自愛して  
るたりける  
を、僧正見給  
ふに、そのつ  
きたる刀、背  
中へ劍ながら  
出たりけり、  
よき折と思ひ  
て、のたまひ  
けるは、和尚  
が繪書、永く  
とどむべし、  
如何なるもの

か、人を突くに劍ながら背に出る事あるべき、つか口まで突きたるなどをこそ、いかめしき事には言ふを、これはあるべくもなき事なり、かくほどの心ばせにては、繪書しべからずと云はれければ此僧かいかしこまりて、この事に候、これは僧の故實に候なりと云ふを、僧正云はせもはてず、和法師が繪の故實かたはら痛しと云はれるを、少も事とせず、さも候はず、古き上手其の書いて候おそくつの繪など御覽も候へ、その物の寸法は分に過ぎて大に書いて候事、いかでか實にはさは候べき、ありのまゝの寸法に書いて候はゞ、見所なきものに候、ゆゑに繪そら事とは申す事にて候、君のあそばされて候物の中にもかゝることは多くこそ候はめと、へりおかす云ひければ、僧正ことはりにおれて言ふ事なかりけり。

狭衣物語繪卷殘欠

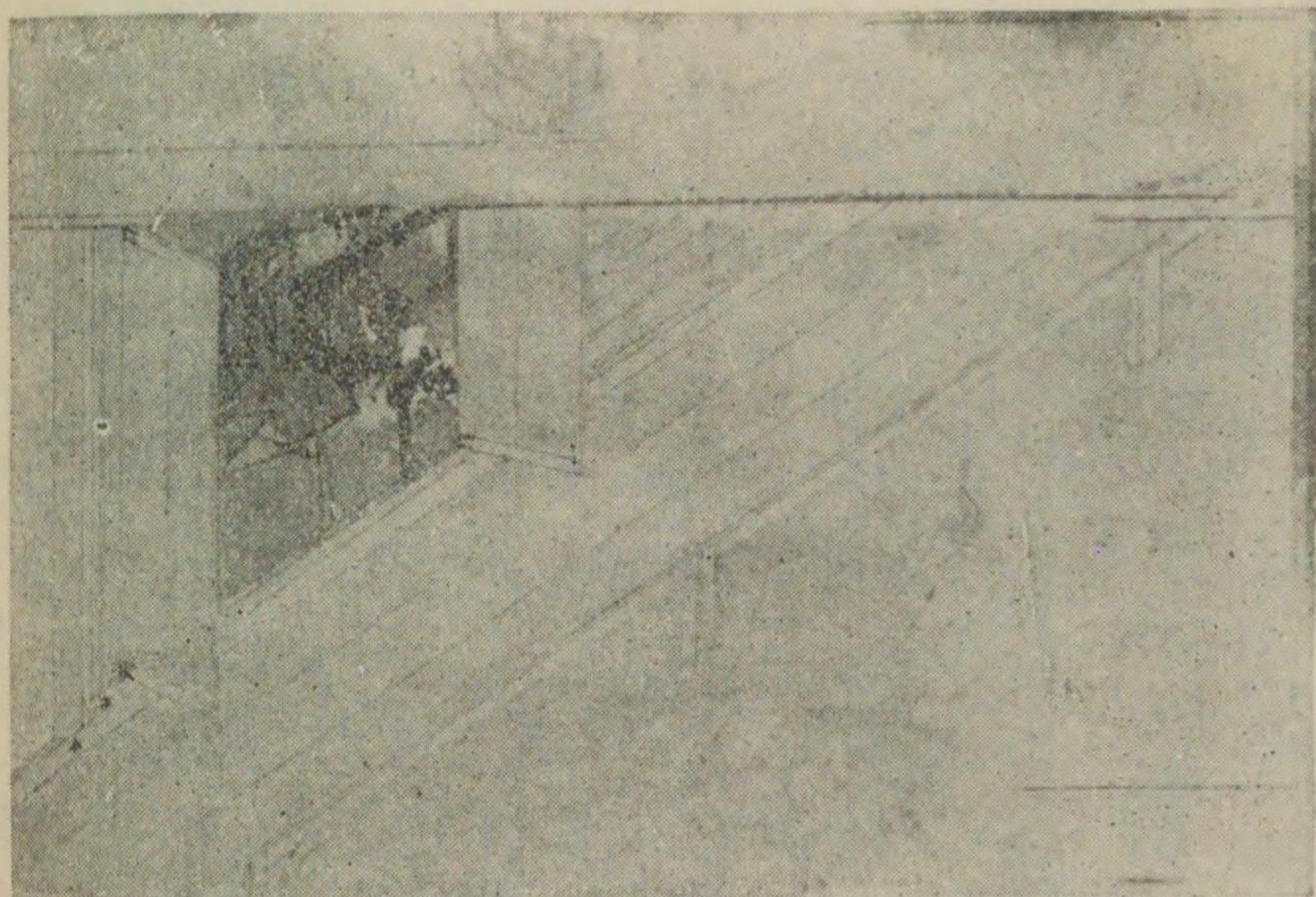
……東京 谷森淳子氏藏……  
……同 皇室博物館藏……

古今著聞集卷十一に「天福元年春の頃院藻壁門院方を分ちて繪づくしの見おほひありけり云々、

狭衣物語繪卷殘欠

52





狭衣物語繪卷の一部分

院の御方御覽ありて狭衣の繪八卷、またさまぐの物語り交せて四季にかきて一月をひとまきに十二卷にせられたり」とあり又本朝畫史に「後高倉太上天皇嗜畫圖會書狭衣物語古實」とあつて如何に物語を繪に寫したことの遠きかを知ることが出来る。

今傳ふる古畫は倭錦に、畫飛彈守光秀、詞伏見院宸翰とあるものだけで、光秀は地下傳に依れば從四位下刑部大輔吉光の男にして飛彈守に任せられたるものにして更に扶桑畫傳に依れば元亨の頃の人と言はれて居るが伏見院は文保元年に崩御あらせられたれば其年代略一致して居ると言ふことが出来る。

此名繪卷はもと東叡山寛永寺に所藏されて居

たが、去る戊辰の兵燹のため惜しくも所々焦爛して四方に散亂したもので兩家所藏の分は其一部である。

### 御物桂本萬葉集 (二〇九頁参照)

……帝室御貸下……

萬葉集の原本並に本文成立當時に近いものは、今一も世に傳はらない。僅に平安朝時代書寫の萬葉古鈔本のうち御物桂本萬葉集がある。桂本萬葉集は平安中期の最古のもので、紫、藍等七色の織色紙に、金銀泥で草木色鳥を描いた眼も綾な卷子本一巻で萬葉集の卷四が書かれてある。伏見天皇の御愛品であつたと覺しく裏面の織目織目に御花押がある。筆者は紀貫之また源順といひ柏木政矩や小杉博士は俊房であると言はれたが、何れも定かでないが、筆跡のめでたさ、料紙の美しさより見ても尊いが、平等院が出来た頃の能書家の筆になることだけは判る。この桂本萬葉集はまた桂萬葉ともいふそれは元、加賀の前田利家の室松子が所藏して居つたのを、その孫女が桂宮智忠親王に入興した折、引出物としてさへけたもので、明治に至つて帝室の御物となつた

御物桂本萬葉集



御物金澤本萬葉集  
現存せる萬葉集古寫本五種の一である。これは元、金澤の前田家にあつた爲の名とも、金澤文庫にあつた爲の名とも言はれる。收むるところは萬葉集卷二の大部分(五十八枚)と卷四の小部分(二十枚)との零卷を一帖にしたもので、唐紙地に金銀砂子を散らした結構なものである。筆者は古來源俊賴と傳へられてゐる。

御物

金澤本萬葉集

……帝室御貸下……

御物金澤本萬葉集

現存せる萬葉集古寫本五種の一である。これは元、金澤の前田家にあつた爲の名とも、金澤文庫にあつた爲の名とも言はれる。收むるところは萬葉集卷二の大部分(五十八枚)と卷四の小部分(二十枚)との零卷を一帖にしたもので、唐紙地に金銀砂子を散らした結構なものである。筆者は古來源俊賴と傳へられてゐる。

天皇賜海上女王御歌一首  
赤豹之越馬柵乃織結師姪博者疑毛奈思  
賜前哥歌  
海上王奉和歌一首  
倭之引夜音之連音小毛夫之漸幸  
于爾之好毛

御物桂萬葉集

だが、先年の田中親美氏の説によつて藤原伊房の孫に當る藤原定信の筆と鑑定せられたものである。表紙の畫(室町時代)題簽(徳川初

52



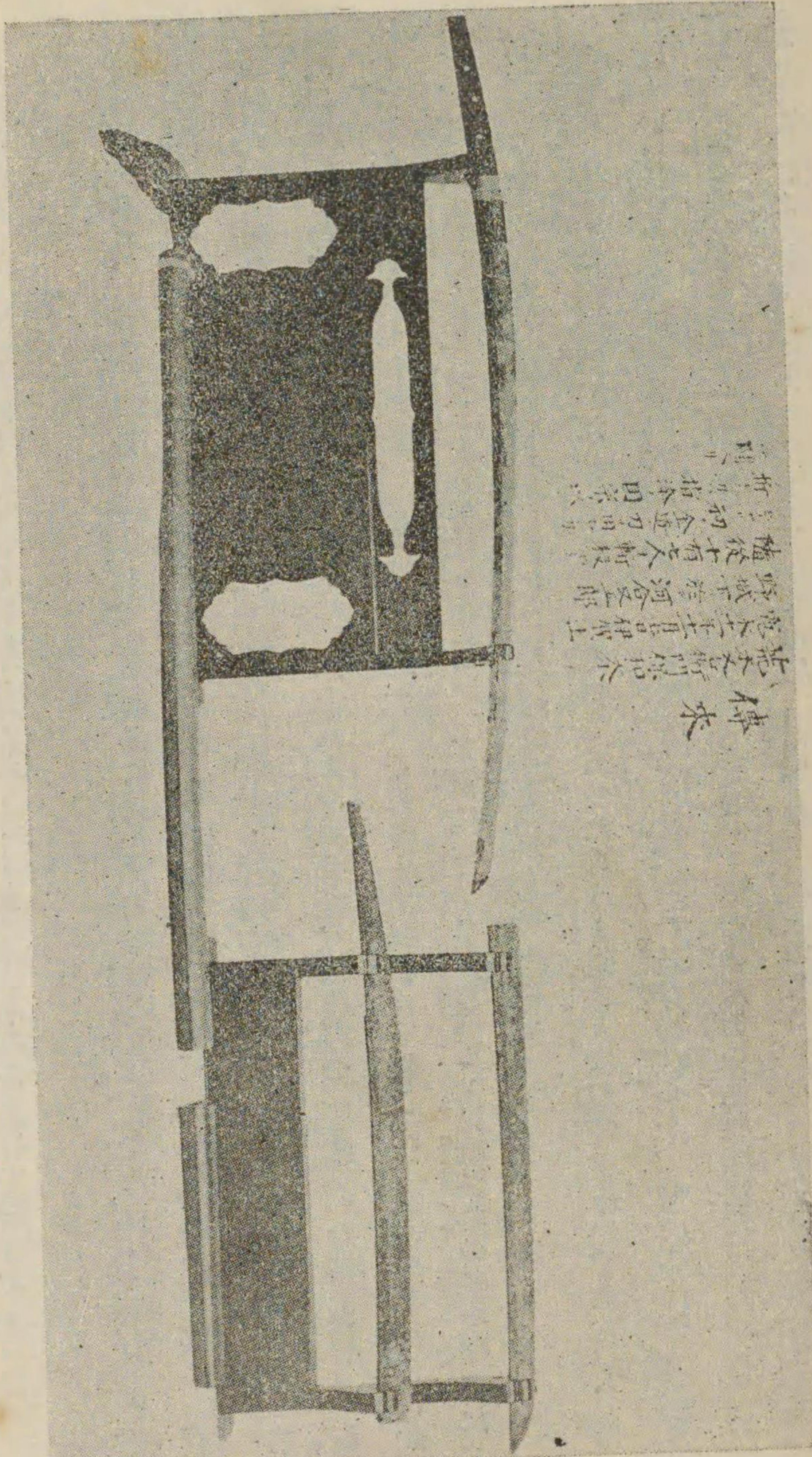
期)は後世のもので、縦八寸八分五厘、長さ大略一尺六寸六分の襷色紙十二張である。明治四十三年明治天皇が前田家に行幸の際、献上して爾來御物となつたものである。

### 荒木又右衛門の刀

侯爵 池田仲博氏藏

講談に、浪花節に、さては童話にまで、其武勇傳を謳はれる荒木又右衛門保和が義に感じての仇討、寛永十一年十一月七日、日足の短い冬の日を江戸に急ぐ本田甲斐守の家臣、河合又五郎とその黨衆十八人の主従が駕を速めて伊賀の上野に差掛つた……とこの時、積年の怨みに燃える、これも甲斐守の家臣松平數馬と荒木又右衛門が行く手を遮つた。徳川時代、天下三大仇討の一と云はれる氣持の好い場面が展開されたのだ。

松平數馬の姉は、當時天下に劍士の譽れ高かつた又右衛門の戀女房であつた。數馬の弟源太夫は些細のことで又五郎の刃に掛つて非業の死を遂げた。寛永七年のことだ。それから四年の



荒木又右衛門の刀

刀佩門衛右又木荒



間敷馬と又右衛門は共に藩公の仕を辭して流浪の旅に仇打を念じながら機會を待った。流浪數ヶ月、機會は來た。『義弟源太夫の仇を報ゆる所存』……と堂々と名乗をあげて斬りかゝつた。

折れた一振り、長さ二尺七寸四分來金道を眞向に振かざして目にも見せず二人を斬伏た。美事な腕前、それもその筈、伊賀國荒木村の水呑百姓に生れはしたが幼少より膂力衆に勝れて劍道を好み、鋤鍬を捨て、村を飛出し、劍聖柳生十兵衛、宮本武藏に師事して奥儀を許された又右衛門の腕だもの、周章狼狽連らねて立向ふ十八人を相手に、仇を打つ一念凝つた刃の鋭さ、斬込む刃をがっちり合せた刹那、ボツキリ折れた。それと意氣組んで斬こんで來る敵を尻目にかけて指添の、國宗二尺一寸二分を縦横無盡に振つて遂に十八人を斬捨て、見事義弟の仇を報じた。

劍豪荒木又右衛門の佩刀だからよほどの業物であつたらうと後世人は想像するのであるが、事實は大いに然らず、陳列された如き極めてお粗末なもの、その時分の代金が、せいゝ百文か百二十文位であつた。現在の相場でも三圓位の品であることはその佩刀を見れば判る。しかもこのお粗末な刀で闘ひ十八人を斬捨てた又右衛門の手腕、全く劍豪の名に恥じないものがある。

折れた金道作の刀は錆びるに任せて當時のまま、また國宗作の脇差も點々として血糊の跡を残して當時を物語るかの如く、武勇傳の歴史に飾られて昏々として眠つて居る。侯爵池田仲博家の秘藏になるものである。

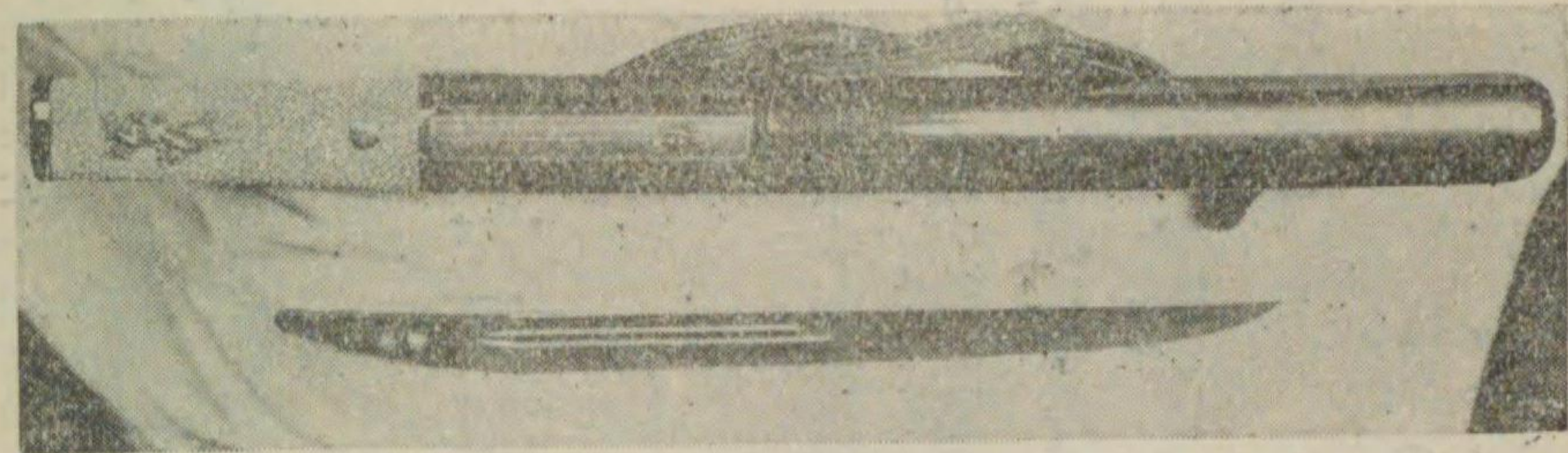
### 大俱梨伽羅廣光刀、太鼓鐘貞宗小脇差

……伯爵 伊達興宗氏藏……

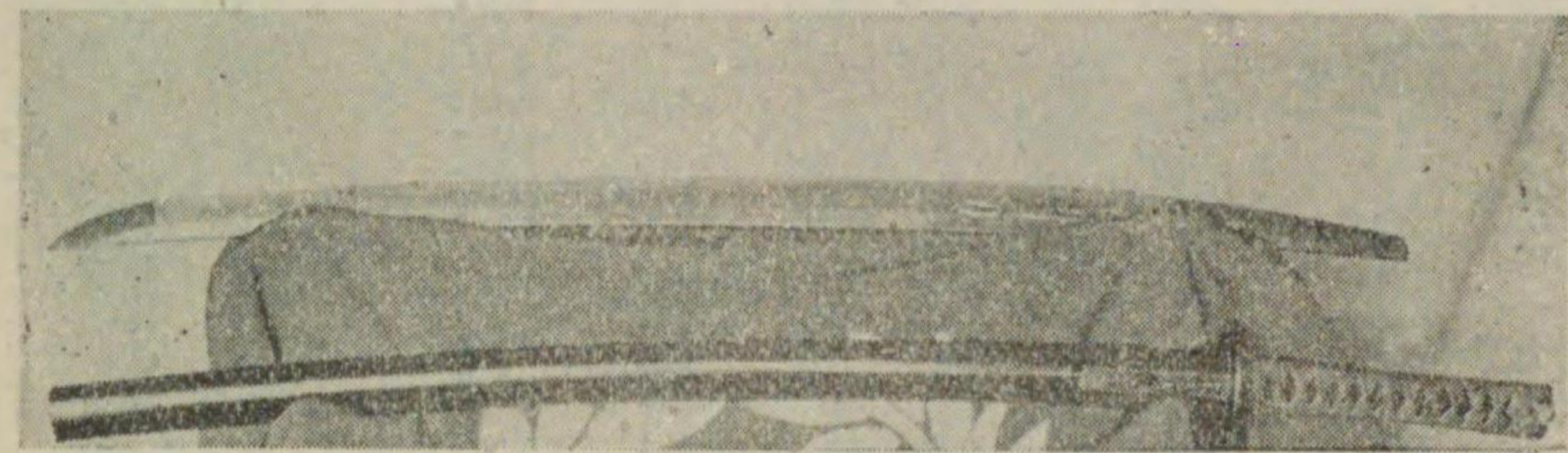
伊達家の『觀瀾閣寶物目錄』が都合六冊、これに載つてゐる、古文書や寶物は、二棟のコンクリート建の寶物藏に、身動きもならぬほどつめられてゐる。このうちの一冊、刀劍類で、書き込まれてゐるものが二百餘振、梅雨前や秋晴れの日に、手入れするのが本當ではあるが、伊達家の寶物は、驚くほど多數に藏せられてゐるので、年が年中、家職の人達が、手を入れてゐるぐらひである。

○  
その豊富な伊達家の寶物の中に『大俱梨伽羅廣光』がある。無銘で、長さが二尺二寸三分、作者太俱梨伽羅廣光、太鼓鐘貞宗小脇差





太鼓鐘貞宗小脇差



大俱梨伽羅廣光刀

は相州の住人正宗の高弟相模國廣光、五百八十年前、觀應の昔につくられたものである。刀身に、抜け出でんばかりの、龍の彫刻があるために、『大俱梨伽羅廣光』の名がうまれてゐる。

○ 鑷、切羽ともに金無垢、柄には白革が巻かれてゐる。目貫は光乗のつくつた紋桐鳳凰、小柄は、宗乗作の赤銅紋俱梨伽羅、鞘は黒塗りの磨き出しである。これが緞子の袋に納められ、昔ながらの夢のふところ抱かれながら、したゝる如き光芒いよ／＼湧えて、函底深く眠つてゐる。

○ この刀はもと、徳川秀忠の秘藏であつた。元和六年十月二十一日、陸奥守伊達政宗の子美作守忠

宗が、江戸城石垣の修理を命令されたので、立派ものをつくり上げると、秀忠はその功をたゞえてこの廣光を忠宗に與へた。この刀は、當時千貫を稱へてゐたが、安永七年には、さらに、金百枚と稱された名刀である。

○ 伊達家では、この廣光のほかに『太鼓鐘貞宗』の小脇指がある。これは天正のころ、和泉の堺から出た。多くの名物の一つで、太鼓鐘といつた。同地の豪商が所持してゐたものなので、この名がついた。元和三年十二月十八日、秀忠の養女で、池田輝政の娘振姫が、正宗の子美作守忠宗と結婚をしたとき、秀忠から婿引出に贈つたもの之である。延寶四年の折紙で、三千貫をいはれた。

○ 長さ八寸三分五厘で無銘もの、貞宗は正宗の門弟であつた。今から約六百年前の、建武のころに鍛へられた小脇差である。これについてゐる目貫が、祐乗作の二足連れの金紋獅子、小柄は、宗乗の作で赤銅紋刺、筭は裏板金、これも宗乗の作になつてゐる。

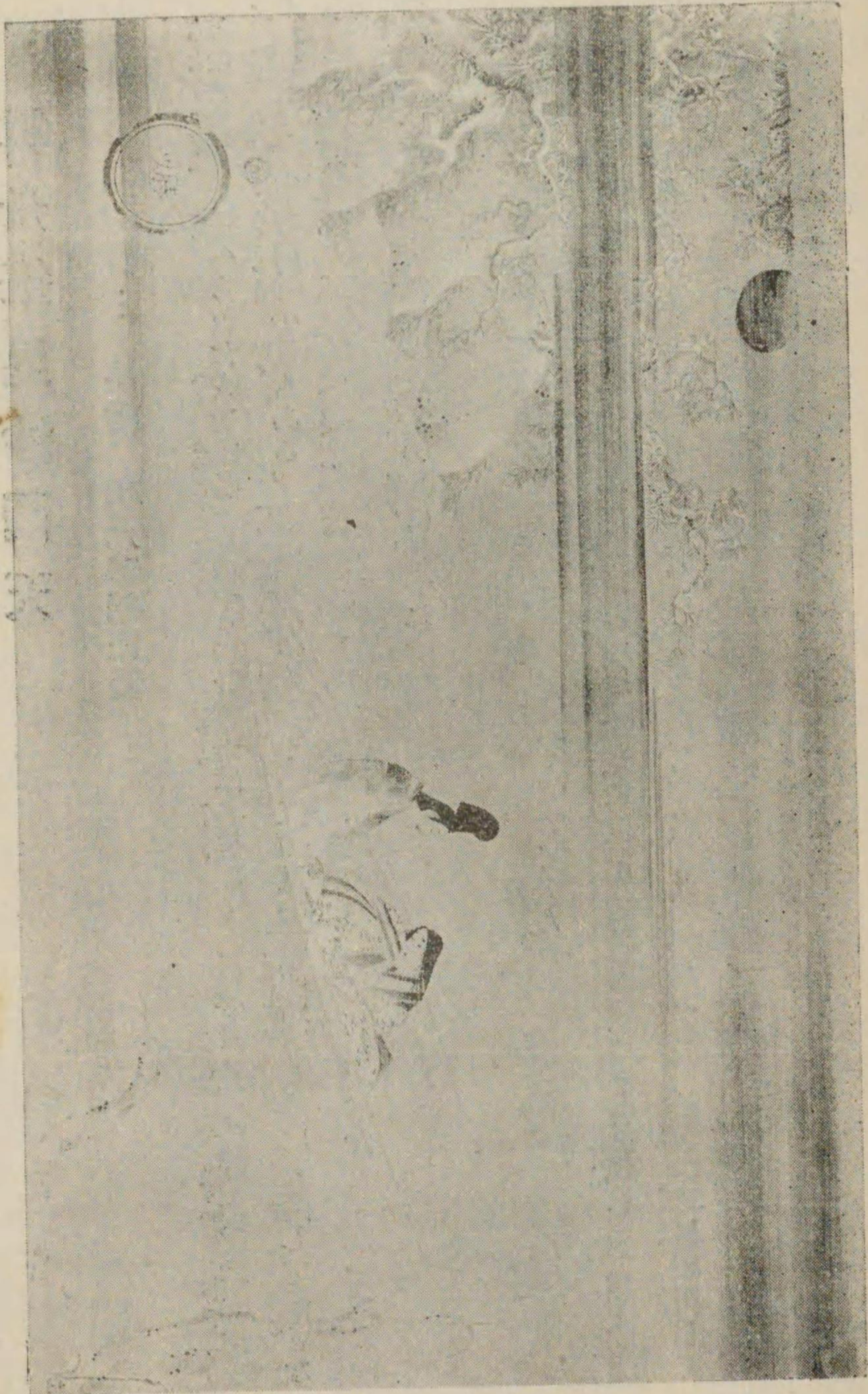
太俱梨伽羅廣光、太鼓鐘貞宗小脇差



# 又兵衛筆故事人物圖卷

……侯爵 池田宜政氏藏……

岩佐又兵衛、名は勝以（一に勝重）といひ、有名なる戦國時代の勇士荒木村重の子に生る。幼にして外戚を繼ぎ、長じて織田信雄に仕ふ。慶長年中土佐光則に大和僧を學び、後一家の風を形成す。その題材として描く所のものは主として當時の風俗、人物、美人等で筆致優麗精巧を極む。實に彼こそは浮世僧の始祖である。信雄の死後漂浪して越前國福井に至り越前家に仕へて名聲大いに顯れたが、後將軍家光の召に應じて江戸に至り淹留年を経た後慶安三年六月二十二日歿す。その世に傳はる自蹟の中、最も有名なのは武藏國川越喜多院に國寶として保存せらるゝ三十六歌仙であるが、この故事人物圖卷一卷も稀世の傑作で十二場面より成り安宅の辨慶を始めとして何れも人口に膾炙した題材を描いてゐる。その緻密にして丹念な筆致に接するとこの人の人格の程も充分に偲ばれるのみならず、浮世僧の始祖としての貫録が充分にうかゞはれる。



又兵衛筆故事人物圖卷

部一の巻 國物人事 故衛兵又



# 雪舟筆毘沙門天

……子爵 秋元春朝氏藏……

雪舟は畫聖と稱へられた人で本名は等揚といひ雪舟は其畫號であるが其他に備溪齋、米元山主人、揚智客、雲谷軒等の號もある。備中赤濱の人で年十二、三の頃同州寶福寺に入門して僧となつたものゝ天性畫を好んで經卷を事とせず、度々師僧に之を戒められたがなか／＼聽かず或時師僧は大いに怒つて雪舟を本堂の柱に縛つた。

夜に入つて師僧は親ら堂上に行つて將に其縛を解かんとしたら忽ち雪舟の膝下に鼠が走り出したのを見て師僧は驚いて之れを逐ふた。併乍鼠は動かないので師僧は怪んで熱視したら雪舟が自ら足の拇指を以つて堂上に滴る涙痕にて鼠形を畫いたもので、之れを見た師僧は其妙に服して繪畫に親しむのを責めなくなつた。雪舟は壯年となつて相國寺の僧洪徳禪師の弟子となり又鎌倉に赴き建長寺の玉隠永興に従つて永興雪舟のために漁樵齋の記を作つた。

後寛正年中（一説には應仁元年とも云ふ）便船を求めて明に入り修業したものであるが雪舟

毘沙門天



の畫中でも此毘畏門天は特に傑出したもので、秋元子爵家秘寶の隨一である。此幅は大正十二年の大震災の際神田駿河臺の秋元邸が三方から火に襲はれて此幅も持出す場所もなく、同邸泉水の汀に箱の儘置いて避難したが、邸は火災に罹つたが不思議にも此幅は何等の厄もなく残つて居

雪舟筆毘沙門天



た。雪舟の靈氣が此一幅に存して居たのであると評判されたのも無理からぬ事である。

### 國寶 當麻曼陀羅緣起繪卷

…鎌倉光明寺藏…

淨土宗の信仰起こつて、往生極樂の思想益々盛んとなるや、當麻寺の根本曼陀羅崇拜の念が愈々昂まつて、その縮影などが轉々として流布されるに到り、遂ひに此の曼陀羅の織成の由来を叙述した緣起繪卷が現はれる様になつたが、その内で此の鎌倉光明寺の藏本は其の尤も著るしいものである。

上下の二卷になつて居る紙本着色で、詞繪各々三段ある。上卷は當麻寺の起源から法如尼(中將姫)稱讚淨土經書寫の様、曼陀羅織成の料にとりて藕絲を採るべき蓮莖百駄を運ぶ圖、佛形石光明を發し其石を彌勒に作り、伽藍を營んでその竣功する圖等あつて長さ十九尺二寸ある。

下卷は化女天より降り來り藕絲を機にかけて曼陀羅を織り成してから、五色の雲に乗つて飛び去る様、次に彌陀の妙相を現する圖があつて、法如尼往生し二十五菩薩來迎の圖に終つてゐる。

長さ二十二尺五寸あつて、圖は凡て景物を配する事少なくて主として明確に事を寫す事に努めてゐる。其の描線と傳彩との調和最も宜しきを得て居り、人物樹木の手法が毫も滯滞するところなく、一見人をしてそれと首肯せしめるところは構圖手法兩者相俟つて考熟の境に進んでゐる故であらう。此の緣起は繪卷發達の經路よりしても鎌倉中世に近き作と斷ぜられ、淨土曼陀羅流行の結果より推してもまたその時期を降らないものであらう。詞書は鎌倉初世の繪卷に行はれた後京極風を帯びて繪は住吉慶恩と傳へられてゐる。

○ 之れに松平樂翁の添書がある。それに曰く

『この曼陀羅緣起は住吉法眼慶恩が筆なり、筆力顯然として疑ふべからず、まして住吉家の古記に慶恩が曼陀羅緣起をゑがきしをしるし有をや、抑々慶恩は元暦建久のころ攝津國住吉の繪所なりさればこそ詞書せられし後京極殿と代もあひかなふべけれ、しかるに永眞の證侍るはいかゝあら

國寶 當麻曼陀羅緣起繪卷



む、よつてこのことを明かに知らしめむがため、寛政五年十月九日左少將定信がいつけ侍るなり  
(花押)

これは狩野永眞 上巻の跋書に『土佐古將監眞跡決然而涉于猶豫者也』と題したので、特に住吉家の説を容れて辨妄の道に出でたのである。その年代鑑定に於ては、大體當を得た説と云はれる。

### 名物 眞守 太刀

伯爵 松平頼壽氏藏……

天下の業物として其名を謳はれながらも遂ぞ姿を見せなかつた名劍がこの眞守作の一振り。  
長さ二尺五寸三分、莖長六寸、眞守造の三字の銘は、今を去る千九十六年の昔、仁明天皇の承  
承年代、伯耆國の巨匠眞守が鍛えあげたものである。光芒秋霜凜烈として人に迫るの概がある。  
新羅三郎源義光の佩刀で後三年の役にこれを佩ひて従軍した。子孫武田家累代の寶であつた  
が勝補が滅んだ後、徳川家康の所持するところとなつて鐘愛されてゐたが、武田萬千代、徳川頼

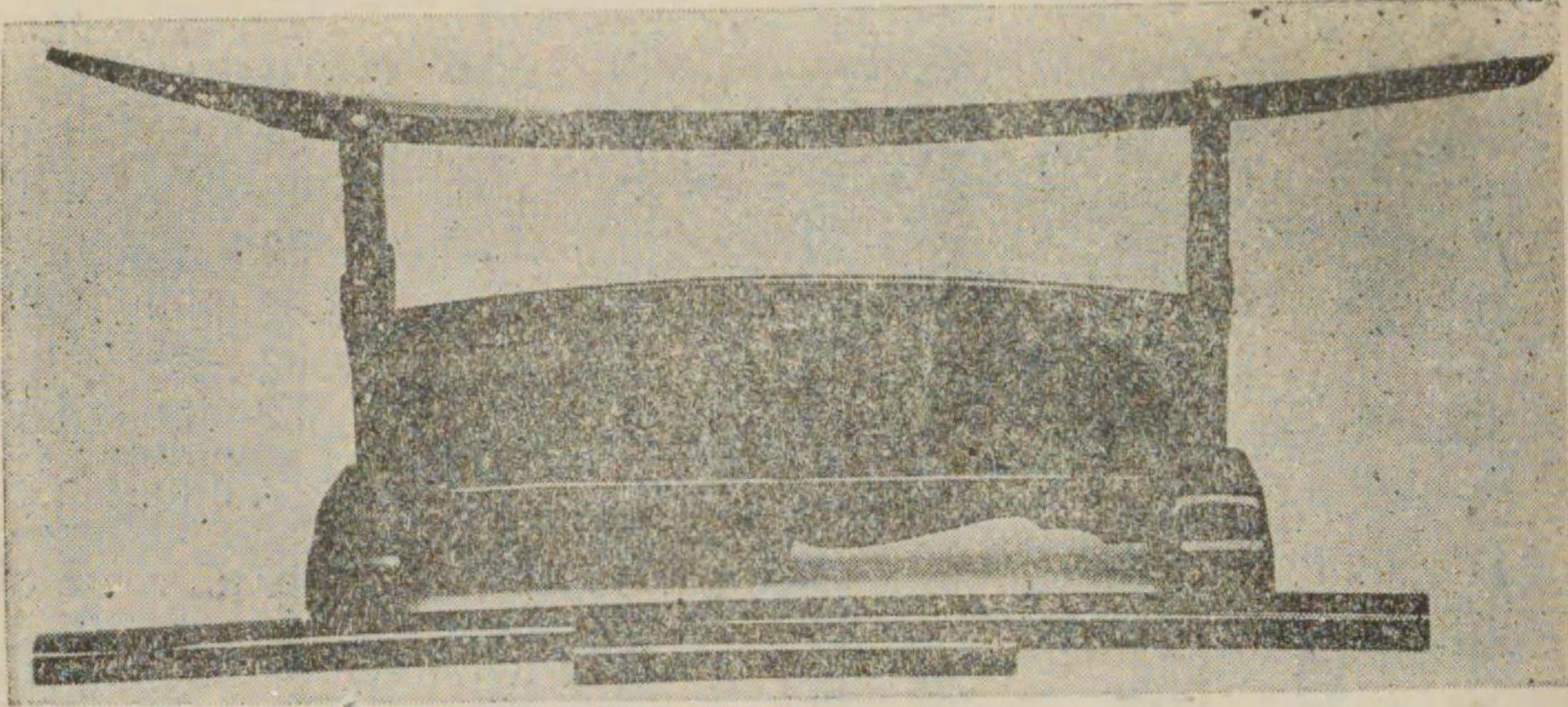
房を経て松平讚岐守頼重に傳えられた。

元祿年間のことである。將軍常憲公に寵愛されて權勢飛ぶ  
鳥も落すといはれた大老柳澤甲斐守吉保が、これに執心して  
是非見せて呉れと申込んだ。大老の言葉なれば拒むことも出  
來ず見せたところ、

『これは我祖先武田家累代の寶刀であつたのだ。我家系を證  
明せるものであるから』と難題を掛けて、これに武田信玄  
の紋を彫つた。はゞきをつけて終つた。

事理をつくして返却を乞ふたが大老吉保はこれに耳を藉さ  
なかつた。

○  
松平家としても困つたものゝ、時の大老に楯突くことも出  
來なかつた。權勢を持つた大老にこれを強ひれば、或は勘氣



伯耆國眞守太刀

名物眞守太刀



に觸るやも知れず、其結果に思ひ到つて忍辱、深く鑒戒したのである。……と云ふのも若し大老の勘氣に觸るれば讃岐十二萬石を國替えさせられるかも知れぬ。赤穂の淺野が亡んで家臣の悲惨な離散を眼の前に見せられてゐたのだから、忍べるだけ忍べ、己を屈して國を保つたのである。

○ 名劍一振りの禍と云えば云えるが、眞守の太刀が如何に傑出した業物であつたかが窺ひ知られるのである。この太刀はそれから後、再び松平家に戻された。後世の子孫、深く藏して珍重すべし』の家憲も道理こそ。

この太刀は既に千百年に近い年月を経てゐるにも拘らず作品恰かも新たなるが如く、鶉の毛ほどの汚損がない。正に天下の逸物と謳はれるのも無理はない。

### 堀田加賀守正盛殉死の脇差

伯爵 堀田正恒氏藏……

長さ一尺五寸一分、無銘であるが、傳は越中の刀匠、宇津になつてゐる。

○ 中心に金銘で『予父正盛賞此利刃以是殉死遺言而與予、堀田正俊記』とある。正盛の長子正俊の父の死を悲しむ父子の情が、あり／＼と目の前に浮んで来る。

○ 慶安四年四月二十日、櫻花燎亂として世は春の最中、花見遊山に太平の夢を貪るの時、江戸城内は、上を下への騒ぎであつた。『將軍様が死になされた』の報は飛電の如く、町から町へ、國から國へ傳はつて行つた。三代將軍家光公が死んだのである。歡樂の世は、沈靜の奈落に墜ちるが如く、動哭の聲のみ、寂として鳴りを鎮めて將軍様の死を悲しんだ。

○ 前老中堀田加賀守正盛は時に四十四才の男盛り、家光將軍の知遇寵愛を一身に集めてゐた。それと云ふのも、三十餘年の長い間を君側に侍して、忠勤をぬきんでたからである。

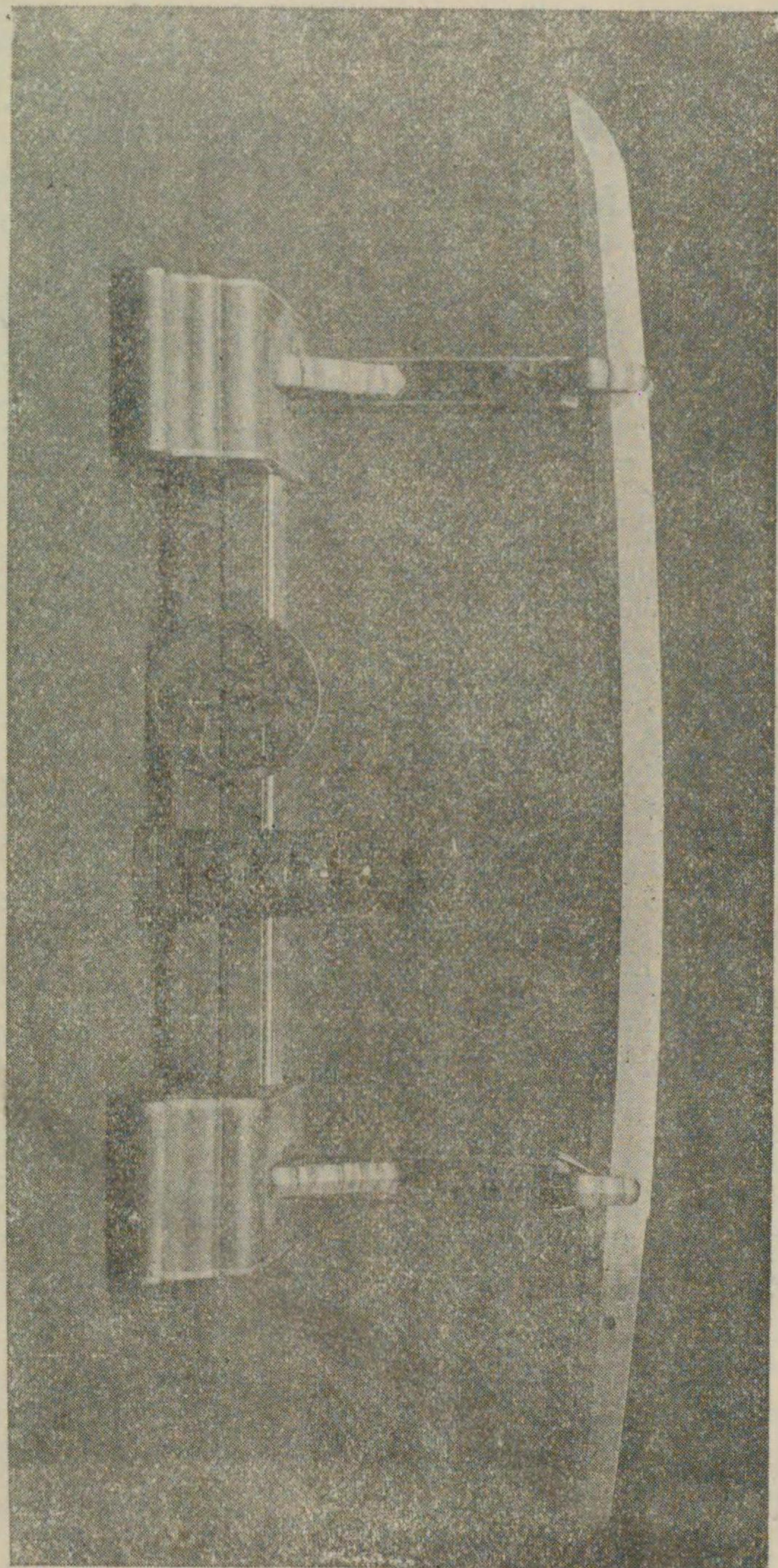
○ 君恩身に泌みてゐる正盛はこの時深く心に殉死を決してゐた。

○ 顔色も蒼ざめ失神したやうになつた正盛が、わが邸に歸つて來たのは、今の午後六時頃、將軍の死に悔も申し述ぶる家人の聲を凜然たる態度で受けた後、靜かに『恩愛の我君のためお供仕

堀田加賀守正盛殉死の脇差



りて泉下に仕えん』と殉死の決心を打明けてから、『お前達は正盛の心中、よく搦んで呉れるであ



義隆の死殉盛正守賀加三郎

ろう、決して止めるな』と諭した上、正盛にたいしての殉死を固く戒しめて

堀田加賀守正盛殉死の脇差

「君えの忠義をつくせ」と囁まして風呂を浴び、心身を清めて白装束、端然として腹眞一文字に搔さばいて君公の跡を追つたのである。

忠魂永く君側に眠る……何といふうるはしい物語りであろう。

○

閃々たる亂れの尖先に、こびりついた血糊の痕がこの美しき物語りを昔のままに傳えて、見る人々の襟をただして、知らず、臉の熱くなるのを覚えるであろう。

正盛の遺骸は特に日光大猷院廟の傍らに移して葬られた。當時、いこの局として大奥に仕えてゐた正盛の母は

『日頃頼み奉りし君にも遅れ、わが子をも先立たせて、これから後を何を頼みに永らへん』とまた双に伏して果てた。時方に六十三歳であつた。

### 木村長門守重成最後の佩刀

子爵 秋元春朝氏藏……

木村長門守重成最後の佩刀



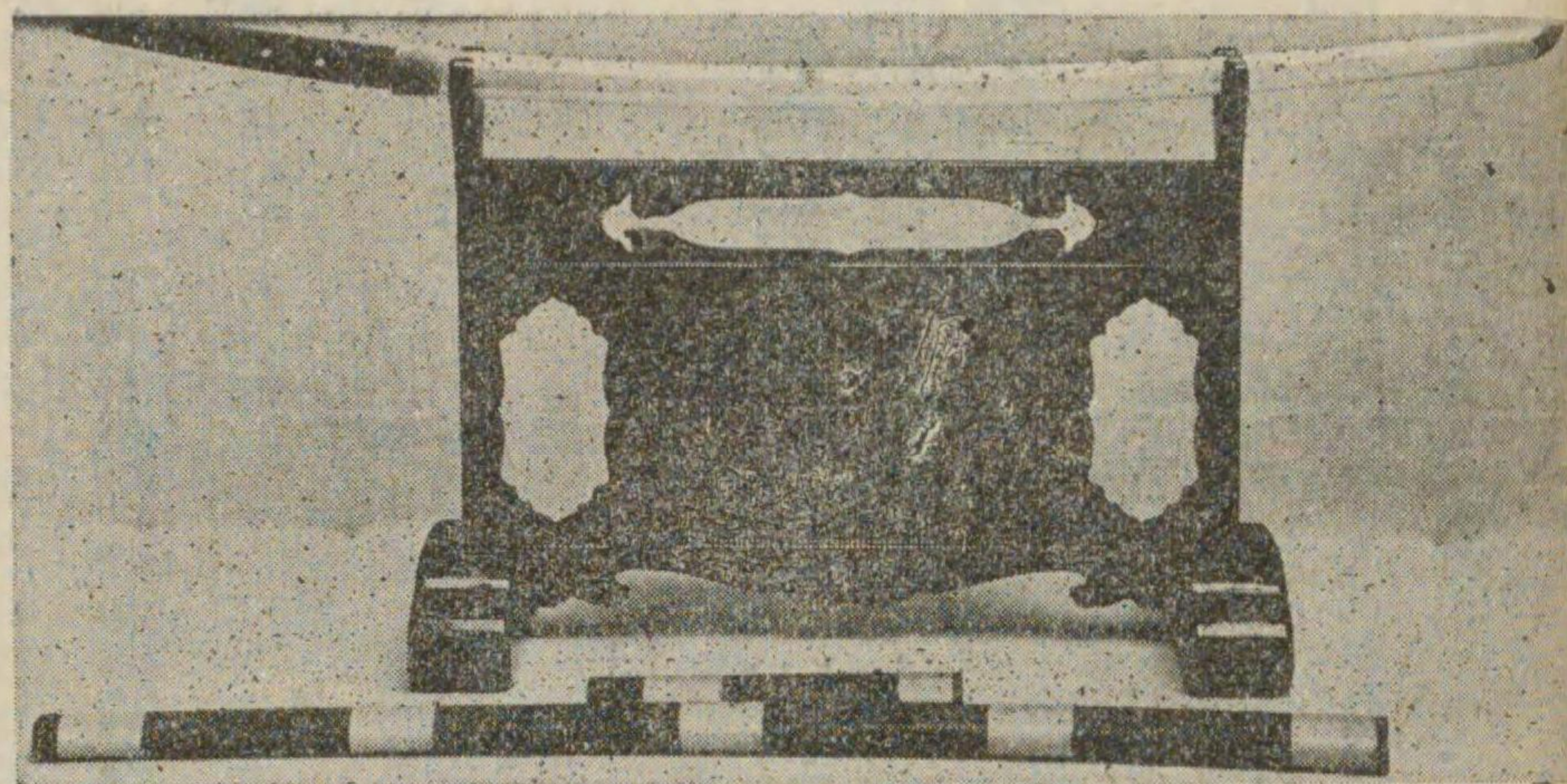
長さ二尺三寸一分五厘、備前の名匠一文字助吉が一念凝つてこれを鍛えたと傳えられてゐる。焼刃の冴え見る人をして寒からしむる業物、刻名は見えぬが表に『洛陽堀川住藤原國廣上映』と有り裏に象眼で『道芝露、木村長門守』とある。

武將長門守の差料としての相應しさが推察されるし如何に重成が寵愛したかど窺はれる。道芝の露……の意味こそこの一刀の斬味を云つたもので、朝露含む道芝が觸るれば墜ちる如く一閃到るところ直ちに斬れる。觸らば斬られるぞの意味、重成がこの冴えに心奪はれて象眼にしたものである。

大阪夏の役起り、兩軍の雌雄決せんとする元和元年五月五日の朝であつた。決戦の場所を巡歴して地の利を得んと、江州若江、東磧、玉串川一體の地を血戦の場所に決めておのれの陣屋今福に歸つて來た。明日の決戦も忘れたかの如く、入浴して髪を洗ひ、香を焚き『猿樂』の曲を謡ひ小鼓を打ち鳴らして悦に入つたのである。餘猶を見せる武將重成はこの時二十一才、白面清秀の若櫻であつた。

○

木村長門守重成最後の佩刀



木村長門守重成最後の佩刀

明くれば五月六日、露踏み分けて進む軍勢、旗鼓に鳴る重成の手兵五千七百である。先陳を承るは平塚五郎兵衛、戰場と定められた若江に着くと、東軍(徳川勢の藤堂進七、玄蕃などの先陳)既に間近く押寄せてゐたことを知つて直ちに配陳し玉串川の堤防に銃手三百五十名を伏せ奇策縦横の策戦で見ると、中にこれを打破つた。この時、宿所高安を發して道明寺に赴かんとしてゐる井伊直高の軍勢は、重成の旗印を發見して若江に向つて、ひた押しに進んで來た。若年とは云え智謀に長けた重成勇戦奮戦、幾度か敵を惱したが、衆寡遂に敵せず戦死して、惜しまれる武將長門守重成は櫻花に魁けて散つたのである。

この時、最後まで重成の手に握られてゐたのがこの助吉の一振りであつた。刃にかけて斬捨てた敵勢の首も少



ない數ではなかつたろう。

其後この刀は同藩士中根主税正和が寛文の頃まで所持してゐたが、後ち秋元家に傳つて今日に至つたのである。

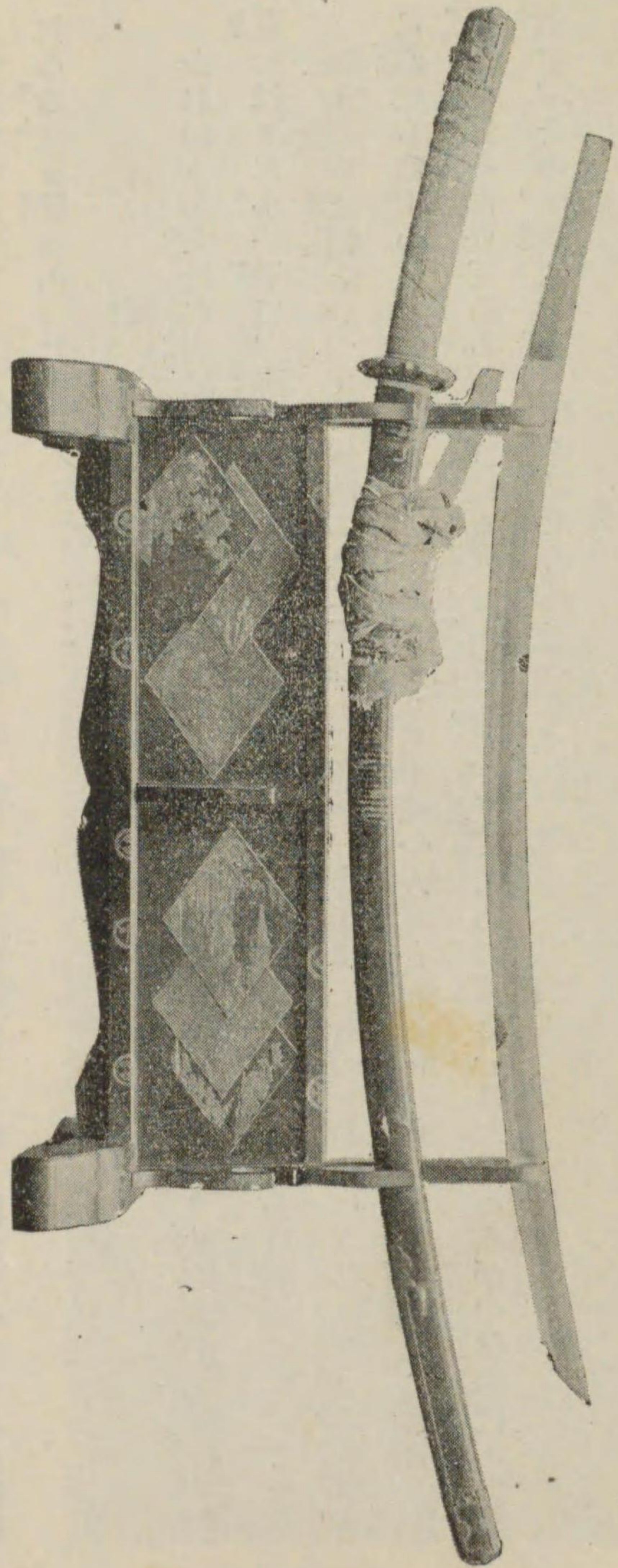
### 正恒太刀

……伯爵 小笠原長幹氏藏……

伯爵小笠原長幹家に傳はつてゐる正恒の太刀、二尺六寸五厘、この太刀は巨匠正恒のうちでも殆んど最上層に位する絶品、小笠原家にあつては、有數の重寶に數へられて秘庫深くに秘められてゐる。

正恒は備前の刀匠、その腕の牙え、當時宇内に、名を知らぬものなきまでに鳴りとどろいた。當時の武士の持つ、最高の願ひと誇りは、この正恒の名刀を所持することにあつた。正恒を佩いた武士は、たゞそのことによつて、かれ等の周圍より、人間的階級の上に、一段の高い所に祭り

あけたぐらひであつたとさへ傳へられてゐた。



刀 太 恒 正

長徳のころの刀匠に、その巨腕に舌を捲かせた正恒は、奥州にうまれた男であつた。かれの父

正恒太刀



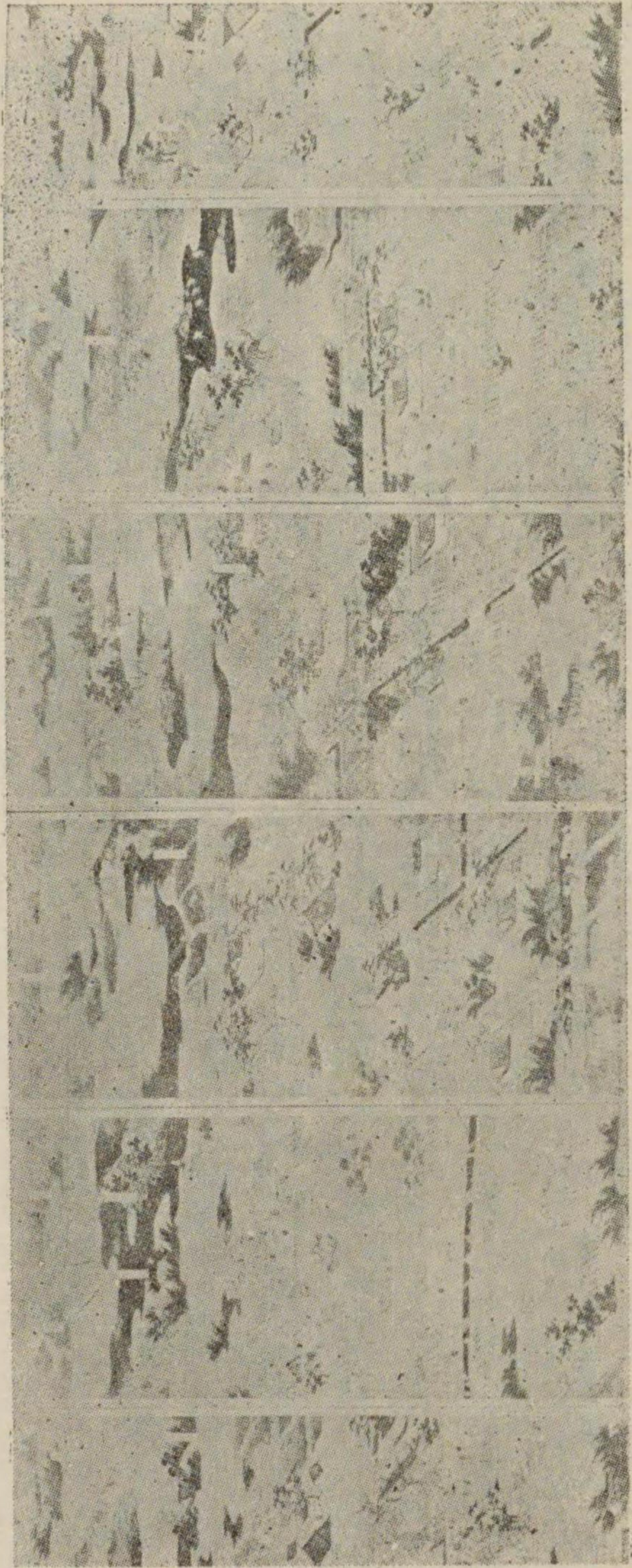
は有政、これも名だゝる刀匠であつた。かれ等父子は、故あつて生れ故郷の奥州より、刀の國備前に渡つて來た。業物をつくるうへに、正恒の持つ天稟の才能と、晝夜不斷の練磨とは、忽ちの間に群匠を壓して、大正恒の名をとどろかせた。かれは古備前のうちに、動かすべからざる確固たる地位を築きあげた。

かれのうち上げた刀は、その姿いと細く、庵淺めに、板目鍛細に美しく、刃絞は正恒獨特、子亂れはまた小一子に、沸匂いと深くつくりあげた。正恒の同銘を有するもの數名あつた。これを古來七種の正恒といつて、備前のみにて五名、備中、豊後に一名づゝあつた。しかし、小笠原家に藏せられてゐるこの正恒こそ、七人のうちで第一人者と稱され、もつとも際立つた作品に限の品位を保つてゐる。二代目も同じ正恒銘で、長元ごろの人といはれてゐるが、父初代正恒に似て、その位列は、上々作と稱せられてゐる。

### 洛中洛外屏風

……公爵 三條公輝氏藏……

洛中、洛外のさまを、鳥瞰的に描いた、いはゆる京名所屏風は、近世京都の屏風屋で、盛んに



京名所屏風

につくられたものである。今まで、古いところでは、徳川期の狩野元信が描いたものなど、珍重せられて來たが、其他は多く仕入れたもので洛中洛外の屏風なるものは、多數あるが、その中に

洛中洛外屏風



在つて、この三條家のものは、最も古いものとして、尊ばれてゐる。それはこの屏風中の貼札をみると、「くはうさま」の文字がある。即ち公方様は足利將軍のことで、正しく、足利時代に製作されたものと、鑑定せられてゐるのである。

○ 平安の都は、文事、藝ごとが、最も華やかに咲き揃ふた時代であり、その最も優れた時代であつたが、この都も、戦塵に覆はることが、一再ではなかつた。その中でも、最もこの古都の、眠りを慌しく呼び起したものは、あの應仁の亂であつた。この戦渦につままれると、畏こくも、禁裡にまで、その禍ひを及ぼしたが、上下の人心亂れさぶうちに、たゞ一つ、藝術の芽生えのみ心ある人々によつて、いたはり育てられて來た、この洛中洛外の屏風は、應仁の亂後、さほど達くない時代につくり上げられた、のびやかな藝術の所産であつた。

○ こんな殺伐な時代のうちにあつて、藝術のみは、殺されずに育つた。繪にあらはされた、この頃の風景風俗は、徳川節儉時代の風俗とちがつて、華麗豪華のさまを見せてゐる、それは、次から次へと、兵燹に會つてゐる、荒んだ時代にあるものとしては、われ／＼には、到底想像もつかぬ絢爛なものである。

ぬ絢爛なものである。

○ この頃、京の氣質は、宵越の金は使はぬといふやうな時代であつた、この洛中洛外の屏風に盛られてゐる悉くのものは、全くその氣質を思はせる行き方をしている、この中には「犬追物」や「勸進能」など描かれてゐるが、能樂の繪では、恐らくこれが、最古のものだらふといはれてゐる。能樂の繪では、「藥師寺縁起」などいふものがあつて、これが最古を稱へられてゐるが、この原本は、現代に見當つて居らぬので、洛中洛外に盛られたこの種のもものが、最古といはれてゐる。この屏風には、祇園祭の繪などもあつて、堀河通りの商店の風俗なども描かれてゐるが、風俗資料として、此上もないものだといはれてゐる。繪は、飛びぬけて上手だといへぬが、その構想の新鮮さ、無論、飛凡の畫家が、心血を濺いだものらしい。

○ この洛中洛外の屏風は、近衛家か、三條西家で描かせたものといはれてゐる、京には、五攝家などいふ名門があるに係はらず、この中より、近衛家たゞ一軒と、三條西家が、屏風に描かれてゐるところを見ると、どつちかで、この屏風をつくらせたことも肯かれる。いま本國寺の秘藏に

洛中洛外屏風



なつてゐる、山王祭の屏風を見ると、紀州家が中心になつて描き出されてゐるが、この屏風は、紀州家で作られたものである點より見て、この洛中洛外の屏風も、近衛家か三條西家で、つくられたものだと思ふことが至當であらふ。

### 光悦茶碗

……伯爵 酒井家正氏藏……

近衛信尹、松花堂とともに、寛永三筆といはれた本阿彌光悦は、本職は刀劔の鑑定家ではあつたが、樂焼などをつくるにも、他の及び難い風格を、その手づくねの上に見せて來た、光悦はことに、茶碗をつくることがかうまかつた。かれは多くの茶碗をつくつては、氣に入らぬものは、どん／＼と毀して行つたが、これ等のうちより、選びに選んだもの十種を、かれは、かれの魂だと稱して、朝夕珍重した。

この光悦手づくねの茶碗十種のうち最もかれの氣にいつてゐる一品、それはいま、酒井家正

伯の秘寶になつてゐる、富士の銘ある茶碗であつた。光悦は物に淡泊な男であつたので、自分の持ちものは、惜し氣もなく人に與へた。そして光悦には、藝術に對して一種の偉い見識を持つてゐて、自分の作つたものは、人の所有に歸しても、結局自分のものだといふやうな信念を抱いてゐたので、かれが名づけて掌中の珠としてゐた茶碗十種でも、それが眞の愛好者であつたなら、望むに任せて手放した。しかし、その十種中にも、筆頭を稱えてゐたこの富士銘の茶碗だけは、何と請はれても手放さず、手函に秘めて寵愛した。

光悦に一人の娘があつた。光悦はこの上も無い子煩悩であつたが、一粒種の娘だけに、目にいれても痛くなかつたらしい。この娘も、齡ごろになると、光悦も手放さねばならなかつた。娘はある武士と結婚することになつた。光悦は娘が晴れの式場に行く日に、父として最後の訓戒を與へた。そして、かれは、命よりも大切だと、常々稱してゐた富士銘の茶碗を、函の中から取出して、榮えの引出ものとして、娘に贈つた。娘は父の身を思ひやつて、濡れた顔を、二つの長い袂でつゝんだ。

光悦茶碗(銘富士山)



その時に光悦は、娘にいつたことがあつた。それは、武士といふものは、常に経済的に窮乏をしてゐるものなので、婿たる侍の、武士道がたゞぬ萬一の場合があつたら、その茶碗を賣つて、金を得よといふのであつた。この言葉を聞くと、娘の濡れた顔に、急にかゞやかしき光があつた。娘は、自分の着てゐる小袖をちぎつて、その茶碗をうけた。そして娘は父の顔を仰ぐと、光悦の眼も、急に濕ふて來た。この茶碗を、一名小袖茶碗と呼ばれるのには、こうした一つの美しい挿話があつたのだ。

酒井家の手にうつる前、この小袖は袷紗につくりかへられた。この茶碗は、湯呑形のものであるが、小豆の地色に、木の葉を片々と浮かせてゐる。その上に、黒色を上へ次第にほかしてゐるので、雪峰富士の姿を、黎明に仰ぐやうな感じがあるといはれてゐる。この茶碗の「函書きには「不二」と書かれてゐるが、この筆者も、或は光悦であるまいかといはれてゐる。

### 蛇皮線

……侯爵 尚 裕氏藏……

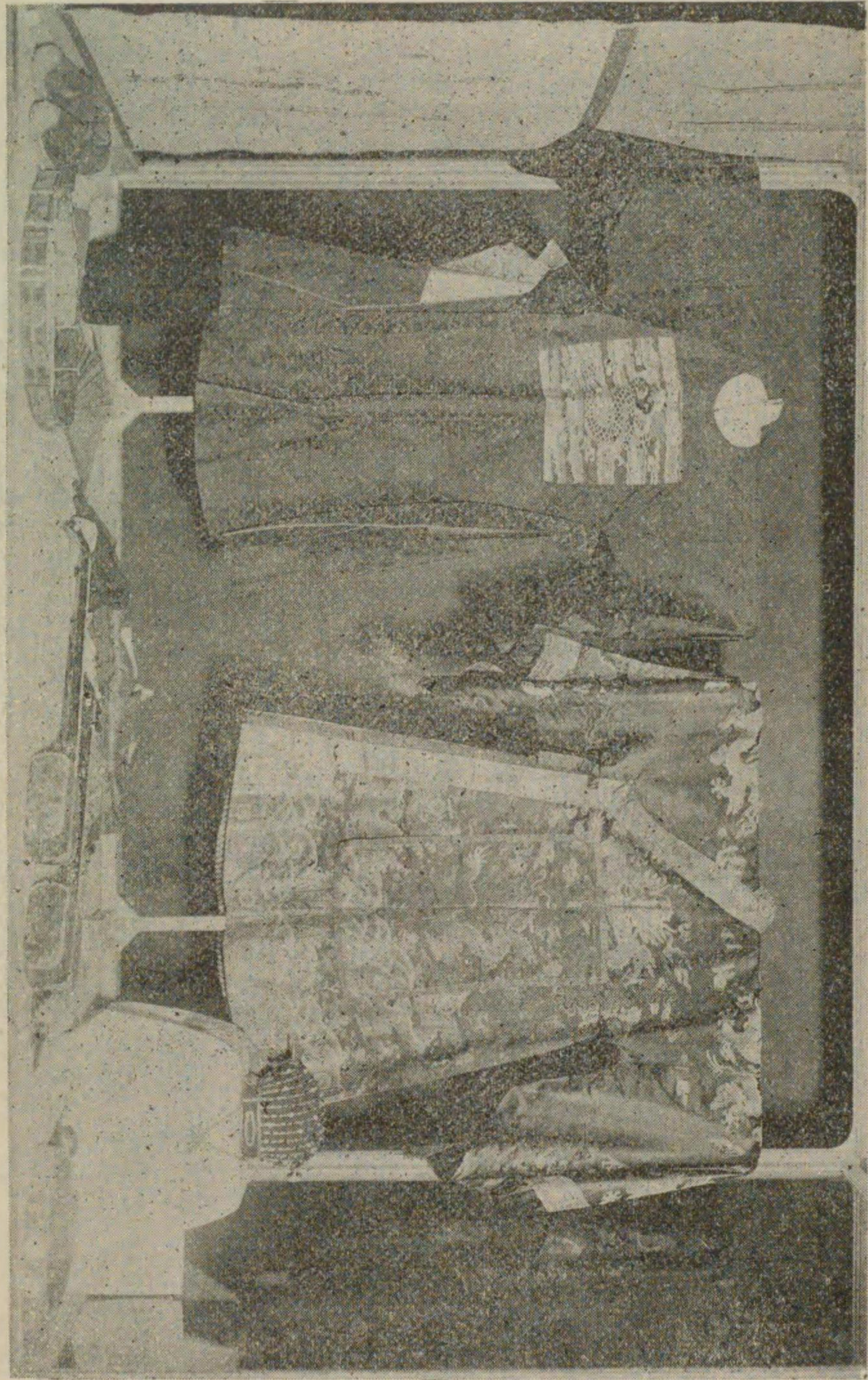
もと琉球の王家、尚侯爵の秘藏してゐるものに、二つの蛇皮線がある。これは、琉球の國寶となつて、尚家に代々傳へられて來たものであるが、共に數萬金の價を稱へてゐる。この蛇皮線の作者は、今より二百餘年前の人、當時隨一の名工とたゞえられた、眞壁某の作になるものであるが、この名匠のつくつた蛇皮線は、二里をはなれても、此の音色、明瞭に聴き得るものだといふから、いかさま、國寶にもなるわけである。

しかし、蛇皮線といふのも、三味線といふのも、ひとしく徳川後期にうまれた當て字だといはれてゐる。「三線」と書いて、さむせんと讀ませるのが、正當だと、その道の研究者はいつてゐる。この三線は、琉球にも昔はなかつたものであるが、今より五百三十四年前、支那から琉球へ渡來したものであつた。琉球より泉州境へ來たのは永録年間で、當時は、貿易の風やうやく盛んになり、各種の樂器もおびたゞしく輸入され、當時の音樂界に、大きな革命機運を持こんだものである。

琉球にも、もとは三線はなかつた。ところが、明の洪武二十五年、(西曆千三百二十三年)に渡

蛇皮線





(左)冠衣及文節帝曆藏明 (前)樂皮蛇 (右)冠衣玉珠璣

來した、その頃琉球は支那の支配をうけて居り、支那の移民が、三十六部落もつくつてゐたために、こゝの風俗もまた、純然たる支那風であつた。三味は支那の移民が持つて來たものであつたが、その後百年ほど経てから、この部落民の娘と、漂流して來た紅毛の間にうまれた、赤犬子といふ人があつた。この人は音樂の天才で、琉球に傳はつてゐる歌を、うまくこの三線に合せて、町から町へ、村から村へと流れ渡つて、天才的音樂に、人々の舌を捲かせてゐた。その赤犬子の天才をたゞえた歌が、今でも琉球に傳はつてゐる。それは

「歌と三線の、昔始まりは

犬子、音あがり、神の御作」

といふのである。その後、いつかこの樂器は、蛇皮線といはれたが、尙家のこの蛇皮線は、赤犬子が、三線にいろ／＼の工風をしてつくりあげた。その形のもの、同じだといはれてゐる。

わが國で三味線は、酒興などを助ける樂器になつてゐるが、琉球では「御前清曲」と稱し、こよなき高尚神聖な樂器とせられてゐる。聞く人、弾く人、ともに羽織袴といふやうな、端然たる形であるが、蛇皮線は士族は男が弾き、平氏は女が弾くものとされてゐる。

蛇皮線

55  
3



泉州堺に、これが始めて渡來した時は、蛇の皮が貼られてあつた。わが國には、蛇の不足な所から、これをひろめた中小路といふ人が、猫の皮としたものだが、この三線で最もひろめた人は例の琵琶の石山檢校で、初めは、琵琶の櫛でこれを弾いたが、この形がかわつて次第に今のやうなものになつたのだといふ、尙支那、琉球には、今でもこれに用ふる櫛がなく、みな爪弾にしてゐるといふことである。

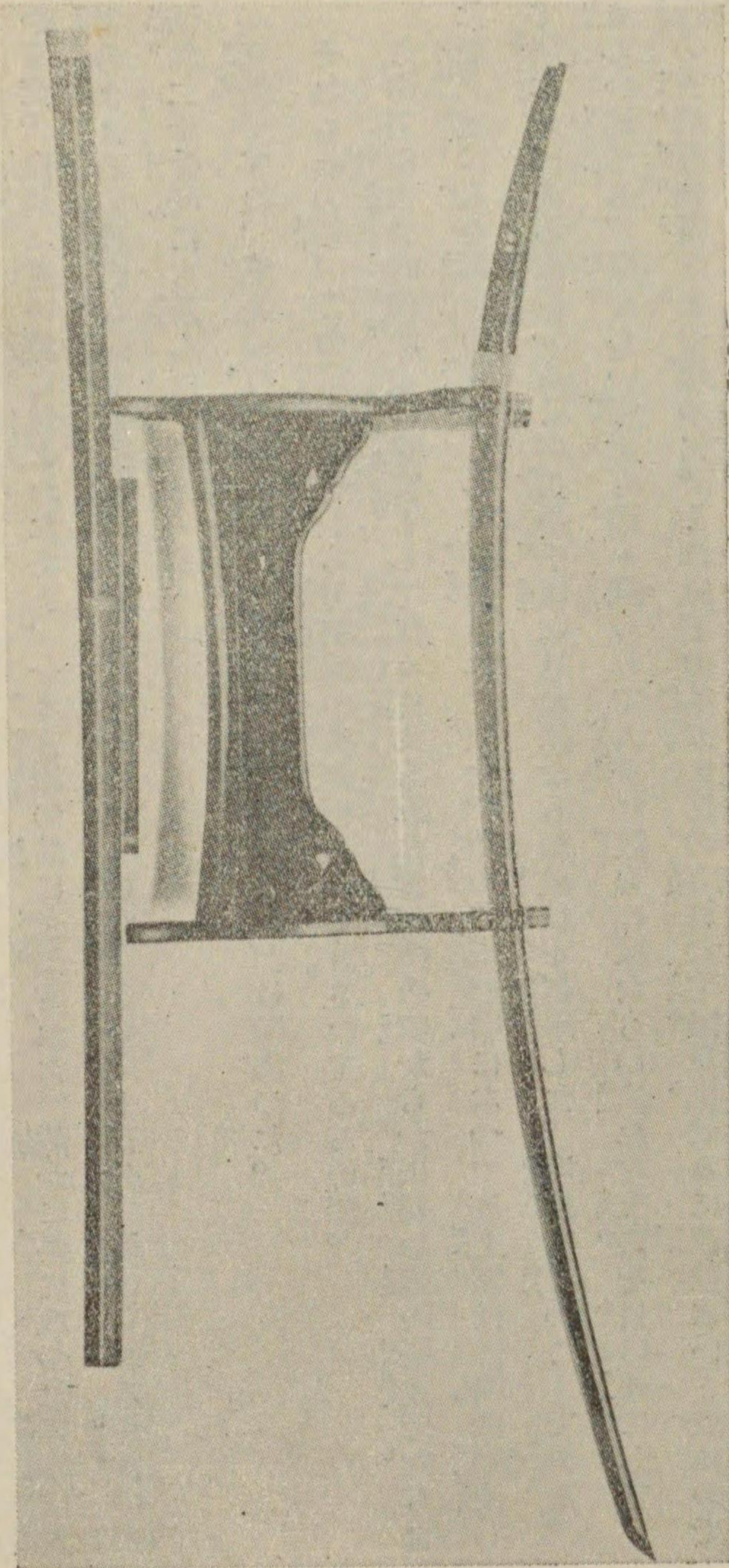
### 國寶 鬼切丸太刀

……京都 北野神社所藏……

刀劍に深い趣味を持ち、其鑑定は玄人も時に驚くほどの眼識を持つ宮内大臣一本喜徳郎氏が或時京都に旅した。ふと思ひついたのが日頃希望してゐたこの鬼切丸を見たことだつた。早速北野神社の山田宮司にこのことを頼んだものだ。ところが山田宮司もこの鬼切丸が大の自慢で何か機會のある毎に大いに鼻高々とこの由來を誇るといつた具合であるから即座に承諾し

た。

○ 長さ二尺七寸九分二厘、光芒燦として肌寒きを覺えるこの大業物、然も一千百年あまりの永い



鬼切丸太刀

國寶鬼切丸太刀



歴史を匂はしながら静かに眠れるが如き其姿は、これを鍛えた安綱の靈が今尙存在してゐるかのやうだ。白羽二重の袋に包まれたまま、一木宮相の前に差出された。静かに手に取つた宮相は無言のままあの謹直な顔を微動だにさせずに見入つたものだ。十分、十五分、続けられる無言の表情は二十分間にも及んだ。

「立派ですね、感銘に打たれました」と宮相の言葉はこれだけであつた。

それもその筈、この業物は昔から刀劍界の横綱格として許されてゐるのだ。

この刀は古き時代源家の重寶として代々傳えられたが何時の頃からか出羽の國の豪族で知られた最上家に入り累世の寶器として秘藏されて來た。徳川の末期頃になつて最上家は江州に在住して居たが、ある事情からこの刀を手離さねばならぬ破目を招來した。明治初年のことである。正しい傳來も、輝かしい歴史も踏み躓られて人手に渡らねばならぬ哀れな末路を目前にして、時の古房田知事が先づ起つた。これほどの名刀にこの哀れな末路を見せるに忍びないと云ふので自ら發起人となつて百方奔走したものが流石の鬼切丸を惜愛する有志は此處彼處から出て、集つた金も三千兩以上に達したのでこの名刀も人手に渡らずに濟んだ。

○

其後間もなくこの刀は京都洛外の北野神社に納められた。管公の靈を祀る北野神社の神器となつた譯である、刀匠安綱も、どれ位地下で喜んでゐることか。

安綱は、大同年間の人で伯耆國大原に住ひして刀匠の祖としてあがめられた仁、この鬼切丸を鍛えたといふことは古い記録にも見えてゐる。其他、坂上田村麿呂が伊勢大廟に奉獻した太刀も安綱が鍛えたといふことだ。

この太刀が國寶に指定されたのは昭和二年四月である。

### 雉子造、鷹造、及び眞長太刀

……伯爵 南部利淳氏藏……

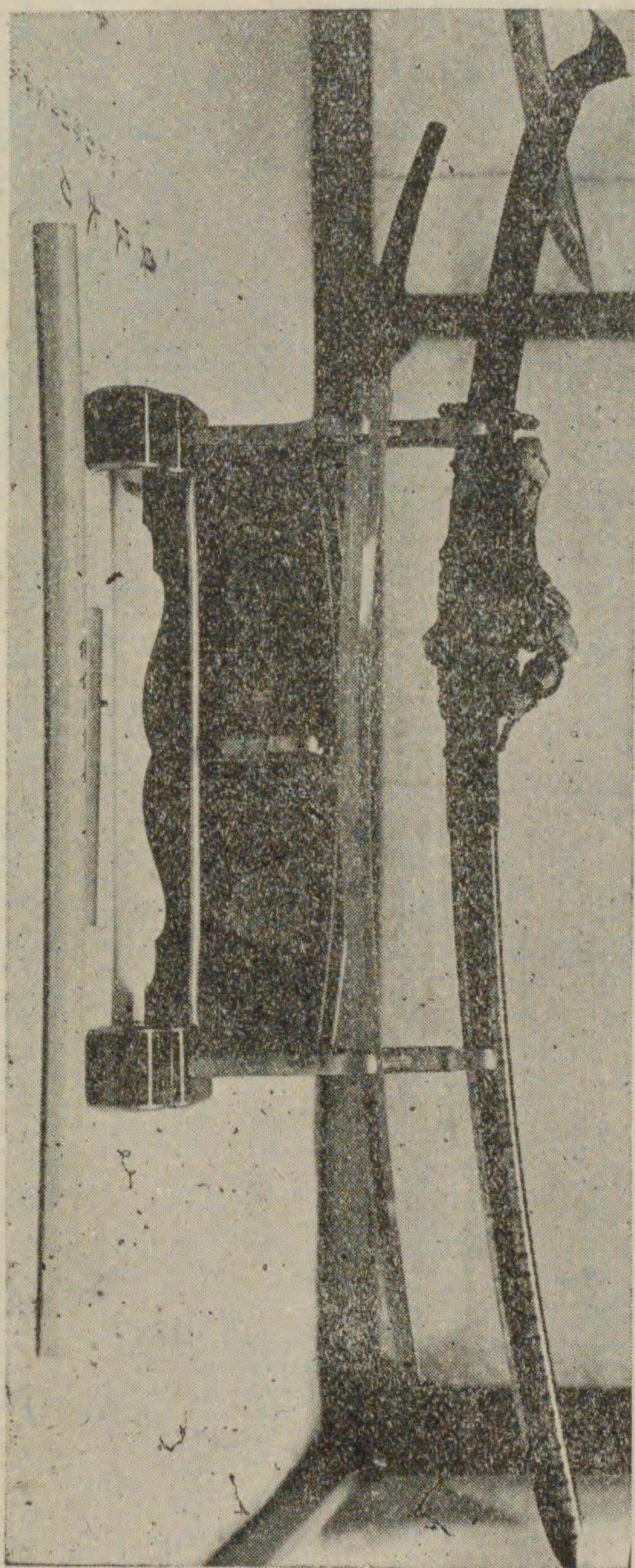
雉子連の太刀も鷹造の太刀も、その作りが珍らしく美事なもの、いづれも南部家重代の逸品である。

鷹造の太刀は、拵えが黄金造りで、頭が鷹、鞘も鷹の尾になつて居るのでこの名がある。雉子

鬼切丸太刀



頭もこれと同様に頭が雉子で尾も雉子の尾を塗り出してある。眞長の太刀はこの雉子造の雄の中身で長さ二尺六寸一分、備前國長船の刀匠眞長の作中屈指のものとして折紙付き。

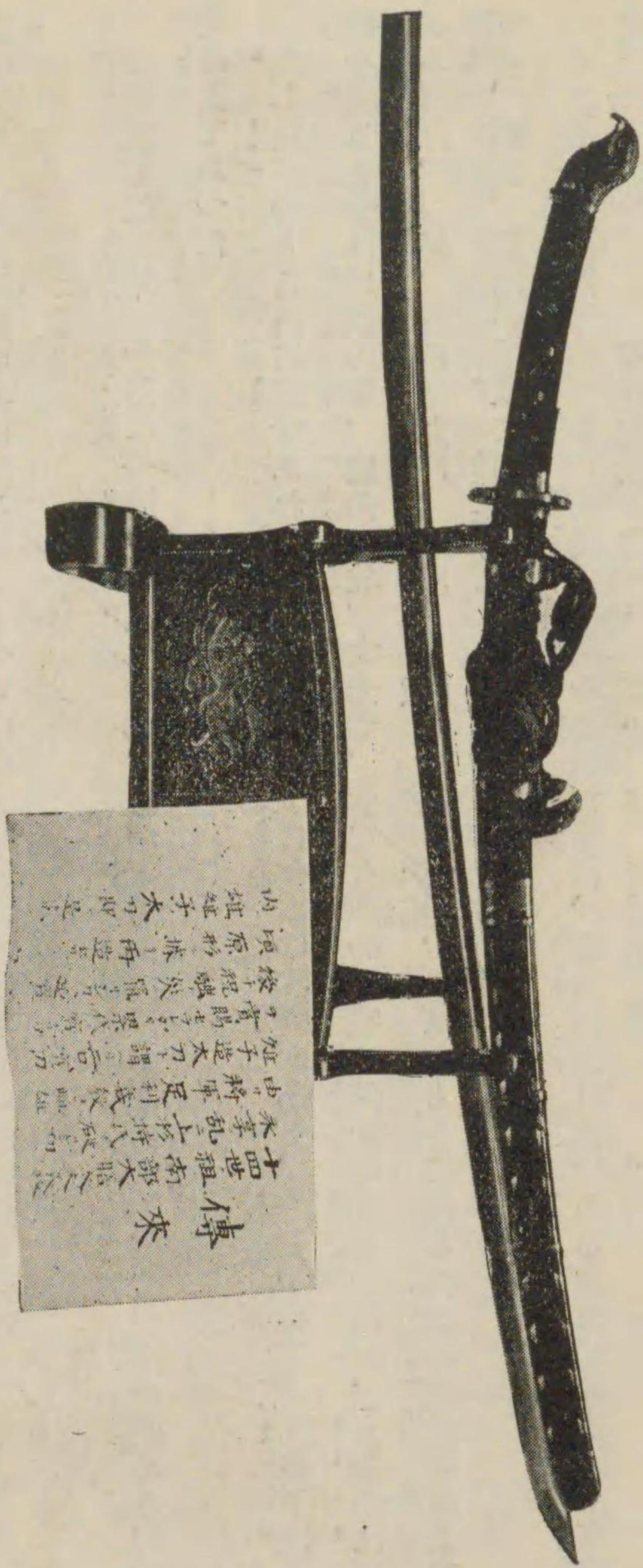


刀 太 造 子 雉

○

ところが雉子造の太刀には次のやうな傳來がある。南部家十四世の祖であつた南部太膳大夫義

政公は永享の亂に上杉持氏の軍を大いに破つた。その功を賞されて時の將軍足利義教から『雌雄雉子造太刀』と云はれてゐる二口の寶刀を貰つた。累代の寶として秘藏してゐるが、後火災に禍



刀 太 頭 應

されたので、延寶年間になつてから、原形に據つて再造したものである。

鬼切丸太刀



この二口の雉子頭の太刀に傳はる話が面白い、これは奥羽の古い文献によるものであるが、それによると南部家の甲州以來の重臣で所謂四天王の一家であつた對島家の古い由緒書に次の如き意味で雉子尾太刀の中身に出る錆によつて南部家一族の吉凶事變が占はれてゐた。

○  
南部家では毎年正月に一度、手入れとしてこの太刀を拭ふのが慣例で、その役を勤めるのが對島家であつた。

若し茫子のところに錆があれば南部公の身上に何かの事變があり、茫子から二寸位の下位に錆を見るときは近親の東、鹿角、北、大光寺、南、久慈の六家に何かの兇事があり、うちつほにある時は、一月、四月、九月、八月、七月の五家の異變、はばきもとにある時は南部家の直親で安藝、福士、對島の三家に何事か起る……と言傳たえられたのである。

それでこの五箇所のうち、何處でも錆を認めた時は、太刀の拭ひ役である對島が陸奥國三戸郡名欠井岳に鎮座する早瀬觀音に水垢離の祈願を籠めて息災を願ふたと云ふのである。傳説と云えば、それまでであるが名劍雉子尾太刀にまつはる話だけに興味が深い。

### 淨瑠璃坂仇打の脇差

……豊後 櫻神社所藏……

「語れ、聽ふ、淨瑠璃坂の敵打」の俗謡が江戸の町々を賑はしたのは寛永十二年の春からであつた。綺羅に嬌るこの時代に世人の眠りを醒ましたのがこの仇打ちで徳川時代天下三大仇打の一つであつた。全くこんな堂々たる仇打ちは夢想もせぬほどの泰平の世であつたのだ。

それは四年前の寛永八年の春の出来事であつた。野州宇都宮の城主奥平美作守 忠昌が死んだ、その葬儀が宇都宮興禪寺で行はれた時、忠昌の法號のことで家老の奥平内藏允は、その同僚である奥平隼人のために衆中で辱かしめられた、やるかたなき鬱憤を押しかくして葬儀の終るのを待つた内藏允は、隼人とその弟主馬を相手に刃傷に及んだが、人々に阻まれて恨みを晴らすことが出来なかつたので其夜、「必ずや復讐を頼む」と遺言して自刃した。嬌れる世とは云え武道未だ地に墮ちず武士としての面目が躍如たる最後であつた。

『淨瑠璃坂仇討』の脇差



双傷は天下の御法度、内藏允の一家も隼人の一家も家録を没收されて主家を追放された。内藏允の一子源八は十二才の若輩、痛々しくも住みなれた宇都宮の城下を去つて行つた。

ところが内藏允の家來に奥平傳藏と云ふ武士があつた。幼時兩親を喪つて以來、内藏允の慈愛の裡に成人したので其情愛は父子のやうであつたので敢然として仕官を辭して源八を援けて那須の地に去つた。復讐の一念に燃えてゐた、源八の伯父夏目外記、桑名友之允、その弟頼母なども仕えを辭して那須に馳せ參じた、浪々の劍客の誰彼れが義憤措かず那須の地に集まつて腕を撫して仇打の機を覗つてゐたのだ。

復讐されるな、と感じた隼人の一味は宇都宮の城下に居たたまらず江戸に来て、市ヶ谷に居を構えて浪士數十人を養つて萬一に備えた。隼人の弟主馬はこの時出羽の國に居たが形勢險惡と見て江戸に出ることになつた。

奥平傳藏がこれを探知したから大變、「主馬も敵の片割れだ、まづ首途の血祭にせよ」とばかり、これを途中に待ち受けて美事首級を刎ねた。源八等が主家を追はれてから二年、寛永十年七月十三日、うら盆の日である。

○

討ふ、討れまい、で双方とも睨み合つたまま二年の歲月が流れた。寛永十二年二月二日は前夜から吹き荒んだ烈風が砂塵を天に漲らせて、面をあけることも出来ぬほだつた。

千秋の思ひで待つた日は今日を外してはない、恵まれたこの荒天に討入れとばかり、源八を援ける同志五十餘名は淺草から舟を仕たてて濠を溯流して夜になつて漸く敵奥平隼人の屋敷近くの淨瑠璃坂に到着した。

三日丑の刻である、隼人の邸附近で紅蓮の焔、「火事だ」と叫ぶ町民の聲に隼人の家中も騒ぎ出した。源八等が茅を山の如く積んで火を放つた討入りの策戦であつたのだ。五十餘名の浪士は遂に討入つた。一味の總大將は奥平傳藏、大聲で「男子は生す勿れ、女子は殺すなかれ」と、四年の忍苦は報ひられた。黍明東天を染める頃、牛込見附外の土橋の邊で双方百餘名が斬結んでゐた。馬上から大弓を引く奥平隼人は桑名頼母の浴せる一刀に濠に墜落して首を刎ねられた。水に濡れた隼人の首級を携へた源八は故郷の父の墓に供へた後、井伊大老の邸に自首して居た。大老は大いにその孝義を褒め、將軍家綱に乞ふて、外記、傳藏と共に伊豆の大島に流された。

隼人の首級を刎ねた刀がこれである。  
長さ一尺九寸七分、和泉守藤原國貞が鍛えた業物、中心に

『淨瑠璃坂仇打』の脇差

59  
3



「寛文十二壬子二月三日早旦、於武江牛込土橋、以此劍打取敵將奥平隼人、矣桑名頼母勝興」とある。

### 武藏筆蘆雁屏風

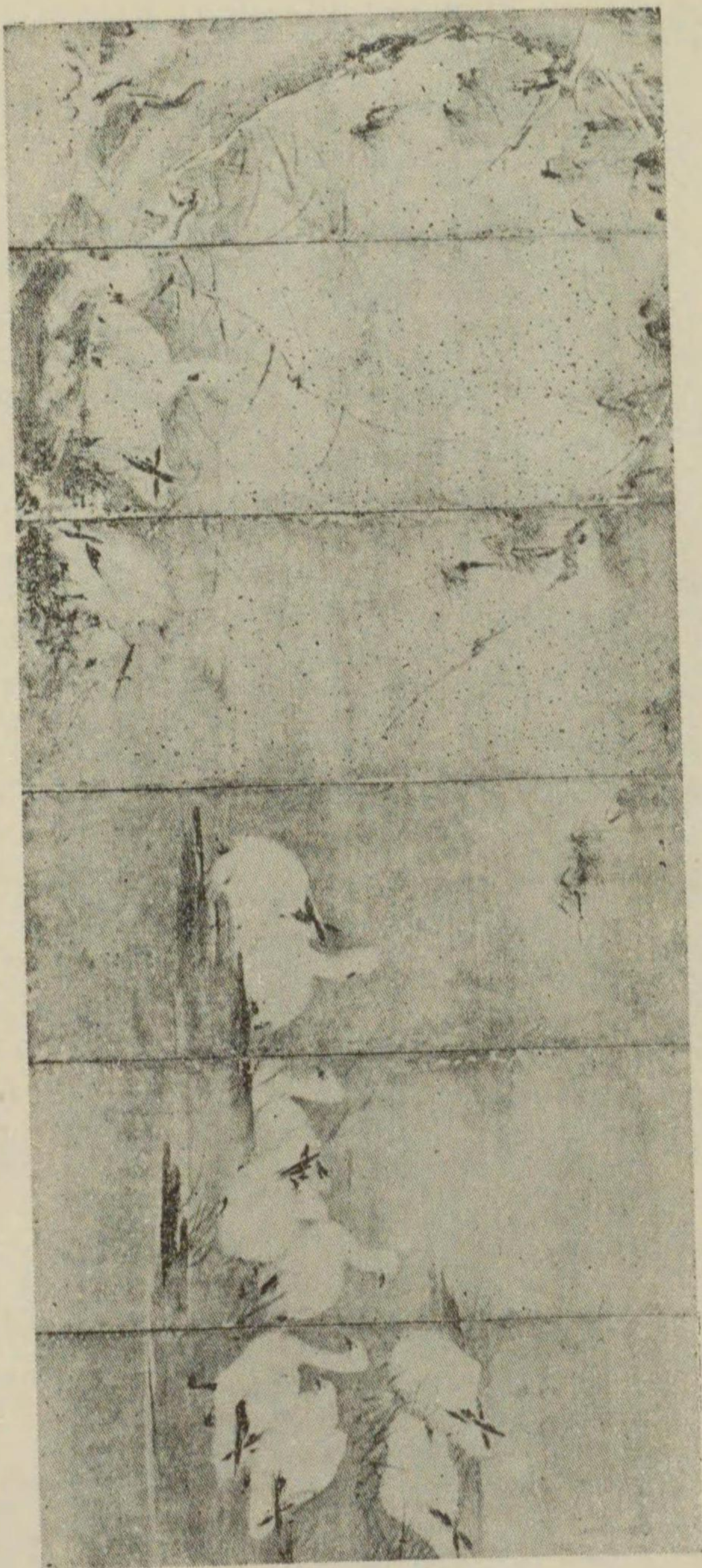
……侯爵 細川護立氏藏……

徳川初世の劍客、宮本武藏の描えた蘆雁屏風の一雙、これは細川護立侯の秘寶になつて居る。んど世に觸れぬ稀世の珍品、細川家でも年二回の風通しをするほか、秘庫にかたく納めて居る。武人の描えた畫としては、恐く宮本武藏の右に出づる人は殆んど無いといつてよい位であるが、その武藏が、一生たゞ一度の大作として筆を染めた蘆雁屏風の一双、奇世の劍客であるだけに、その筆跡を仔細に眺めると、いひ知れぬ感興の世界が、この屏風一雙を通して現はれて來るのを覺える。

○

武藝者鑑の筆頭に名の現はれた武藏は、人も知るやうに二刀流の始祖、播摩の人で赤松氏の流

れを汲んで居る。幼年には官次郎といづてゐたが後に武藏と改め、一天と號してゐた。父は新免無二齋といつて、武藏をうんだだけに劍法と十手に長じて、隣近に鳴りとどろいた劍客であつた。



(一) 「蘆 雁」 筆 藏 武 本 宮

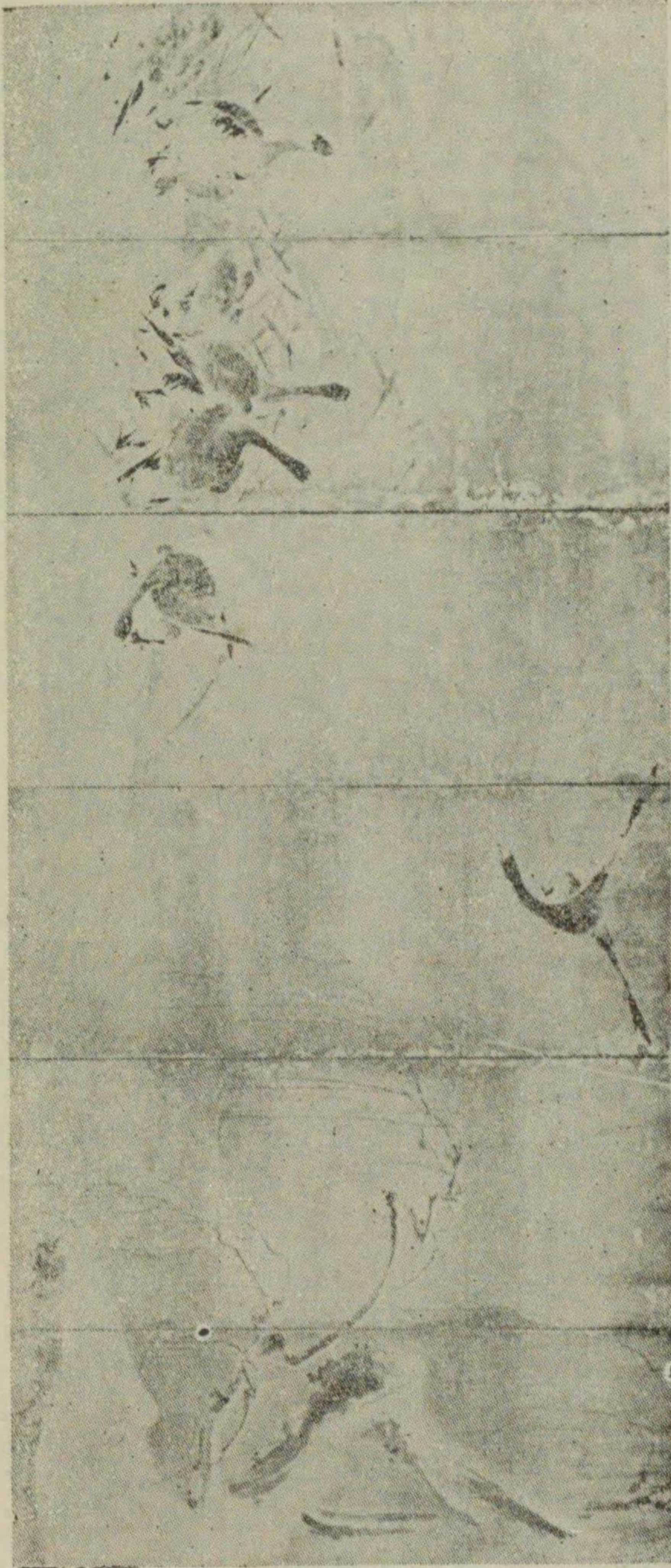
武藏は幼にして二刀流を創意し、盛んに道場破りをやつて歩いたが、大劍小劍を天地に構ふた時

武藏筆蘆雁屏風

59  
3



は、いかなる名人でもこれを打破することは出来なかつたといはれて居る。まづ十二歳の時は、播磨に於て有馬喜兵衛を叩き伏せたのを手始めに、十六歳には但馬に於て秋山某を撃ち、後京都で



(二) 「麗 麗」 筆 藏 武 本 宮

名うての劍客吉岡兼房に勝ち、さらに豊前の船島で佐々木嚴流を撃殺した。試合の數前後六十余

回に及んでゐるといはれるが、この傳説は、幾分講釋師の張扇から出たらしい所もあるが、兎に角、當時三歳の童兒と雖も、宮本武藏の名を知らぬ者なきまでに、鳴り轟いてゐた事は事實である。

かれは慶長年中、關が原の役起るやこれに従ひ、大陣の役にも奮戦して驍名をとどろかせた。寛永年中島原に一揆起るや、武藏は細川家に屬してこれが討伐に趣いたが、正保二年五月の十九日、病を得て熊本城下に往生を遂げた。法名を玄信二天。いま細川家の秘寶となつてゐる蘆雁の屏風は、實にかれが熊本にあつて悠々自適をしてゐるころの所産で、藩主細川公の下命により、沐浴齋戒して描きあげた、榮えの大作であつた。

劍法の神といはれた武藏は、五輪の書五卷、兵法三十一ヶ條一卷を著はした。武藏は劍法のほかに諸藝にも通じてゐたが、殊に繪畫をよくした。當時の劍客はおほむね猪武者のたくひで、劍法一點張りであるのに、武藏が繪をよくしたことは、かれの心に流れてゐるゆとりを汲み取ることが出来る。このゆとりが劍聖といはれたかれの房法に結びついて、一世を驚かせる大作を描

武藏筆蘆雁屏風



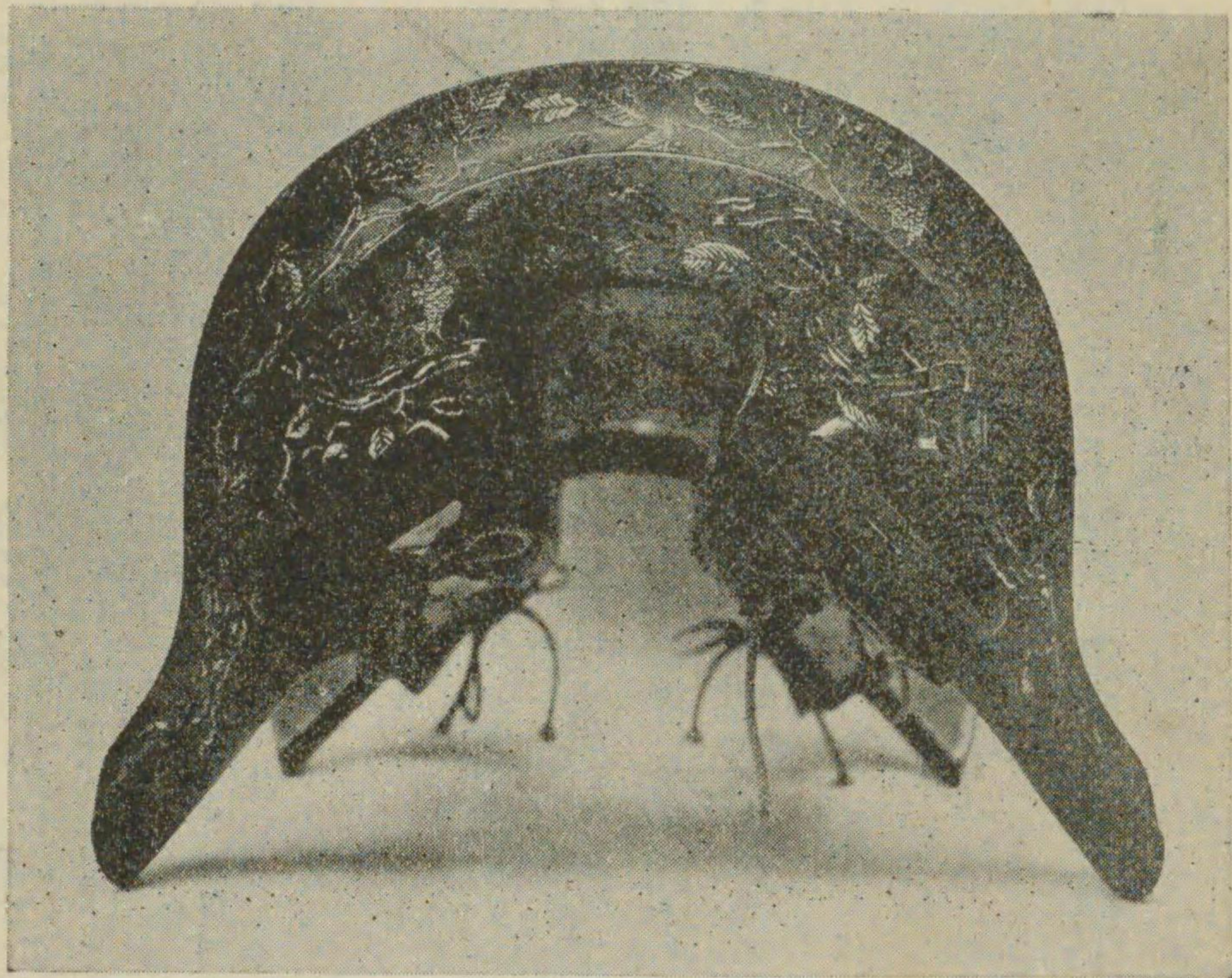
えたこともまた肯けることである。かれは畫を、海北有松に就いたといはれてゐるが、この芦雁屏風を見ると海北友松の手法と違はぬ所がある。勁拔なるも淡々として一抹の銜氣なく、しかも洒脱にして塵氣なく、構想、筆ともに凡手でないことが窺はれる。武藏の作として世に傳はるものは極めて不足であるのに、この大作が細川家に傳はつてゐるのは、洵に稀世の珍品といつてよい。

### 柏木菟螺鈿蒔繪鞍

…侯爵 細川護立氏藏…

細川家に傳はつて居る二つの名鞍、一つは義經の愛用した「時雨の鞍」であるが、他の一つは「柏木菟螺鈿蒔繪の鞍」である。これは足利忠綱が治承四年、宇治川合戦の際に、これを乗用して縦横に奮戦した。それでこの名鞍へさらに歴史的由緒が秘められて、細川家寶物のうちでも有數に擧げられてゐるもの、今の世に、眞に天下の珍を稱し得るものである。

○



柏木菟螺鈿蒔繪鞍

柏木菟螺鈿鞍

この鞍は一名「宇治川渡しの鞍」とも稱へてゐる。忠綱は驍勇絶倫の侍で、當時の人は「忠綱の人に過ぐるもの三つあり」といつて驚ろいてゐたものであつた。その三つといふのは、齒の長きこと一寸、聲の聞ゆること七里、力百人に適すといふのだから、恐らく怪物扱ひにせられてゐたに相違ない。この鞍を使つた宇治川合戦の時是最初知盛方が敗軍し一旦兵をまとめて引上げやうといふ軍議のあつた時、忠綱は道を廻れば僧兵の援けがあるので宇治川を乗切るほかはないと切言し、從騎三百と共に馬を乗入れたが、一騎

59  
3



も溺ることなく、諸軍も相繼で激まされて續いたため遂に大勝したと傳へられてゐる。この時忠綱は僅か十七歳の若武者であつた。忠綱は後に足利義兼と事を起して追はれたが、文治六年、ついに奥州安蘇郡飛約村で自殺した。郎黨で殉死するもの十三人といはれてゐるが、忠綱はこの地に今でも神として祀られてゐる。

○  
宇治川合戦の時、忠綱の武者ぶりを平家物語では「連錢葦毛なる馬に柏木にみづく打ちたる金覆輪の鞍置きてぞ乗りたりける」と書いて居る。いま細川家のこの宇治川渡しの鞍を見ると金覆輪は剥けて見分けることは出来ぬが、柏木にみづくは鮮かに現はれて、その精妙な蒔繪のうち、忠綱の武勳を傳へたけにかゞやいて居る。

### 伴大納言繪詞

……伯爵 酒井忠克氏藏……

酒井忠克伯の先々代忠義は、京都所司代であつた。風流の人で、文人墨客との交際も深かつた。朝廷の役人を勤めてゐて、大和繪をよく描く冷泉爲恭が、こゝに出入りをしてゐたことは、皆の驚きと疑ひをかけさせるに充分であつた。なぜなら、爲恭は朝廷に仕ふるもの、忠義は幕府方の代表者であつたからである。

○  
爲恭が忠義公に近づたいのは、忠義公が命よりも大切にしてゐた『伴大納言繪詞』を、ひと目見たいからであつた——で、爲恭にその望みは叶へられたが、禁中の秘を幕府に洩らすものだといふ疑ひから、爲恭はつひに暗殺せられた。暗殺の前、爲恭はそのことあるを知つてゐるには、たのだが、『あの繪さへ見れば、殺されても本望だ』と、口癖にいつてゐたさうである。

○  
『伴大納言繪詞』の作者は、はつきりしてゐない。藤原末期か鎌倉初期のものであるが、土佐繪の始祖といつてもよい、平家時代の大和繪の巨匠で、従四位下刑部大輔を勤めてゐた藤原光長の作らしい。さう鑑定されたのは、これも光長に違ひないといふ『年中行事繪』と同筆から來てる結果であつた。三卷になつてゐる巾が一尺四分、これについてゐるのが、參議雅經卿の筆にな

伴大納言繪詞

59  
3



る詞書、それに青蓮院宮尊純親王の外題があるからたしかなものである。

三卷に盛られた繪詞は、清和天皇の御宇、伴大納言善男が、應天門を焼き討ちしてゐるものを描いた繪である。雅經卿の詞書は『宇治拾遺』と同じもの、三代實錄に載つてゐるところによるとかうである。

貞觀八年の三月十日夜、伴大納言は、時の左大臣源信の榮達をねたんで、宮城の正門である應天門に火を放つた。そして、その罪を源信にぬりつけるために、あらゆる悪宣傳をしたが、伴大納言の仕業だといふ證據があつた結果、ついに捕へられて殺された。これは『伴大納言繪詞』三卷のうち、上卷に納められてゐて、この『繪詞』の中心をなしてをり、國寶級のものゝうちでも第一流のものとして、古典藝術の匂ひ匂かに、眞に陸離たる光彩を放つ。

天明八年、京都御所は一物も餘さず炎上した。光格天皇の御宇寛政八年に、御所の大造營を行はせらるゝに當つて、それに必要な記録がなかつたところから、宮中では、正門をつくるのに『伴大納言繪詞』にある應天門こそ、こよなき參考圖だといふことになつて、その旨、持主である

酒井修理太夫忠貫へ御沙汰があつた。

御門は美事に出来あがつた。それは炎上した御門よりも、遙かに壯麗華美なものであつた。そしてそこに、應天門の大部分が、參考として取り入れられてゐたことは無論である。——忠實へは、次のやうな感謝狀が贈られた。

『先達而新造内裏之節、依物内沙汰伴大納言繪詞三卷被備觀覽候所、專造内裏御用相立觀感不斜此旨別紙議奏方連署之賞諭一通被添之、久我殿還賜候付其儘御近進被申候儀依御出慮無據被見候所、早速立御用此度御造營之有候殿内規度相應候由於久我殿深畏入被有事』

『伴大納言繪詞』は、酒井家では門外不出の品であつたが、勅命におそれ謹んで差し上げたものなので、光格天皇のお欣びはひと通りではなかつた。すぐに久世宰相をお召し出しになつて、自ら繪詞を模寫すべきことを命ぜられた。宰相は八年がよりで、これを寫し上げた。

この三卷には、藤原時代の風俗がもつてゐる最高の技巧が、層々と盛られてゐる。極めて自由な骨描に、やゝ濃彩を加へたもので描かれてゐる人物數百名、悉く面貌表情の異つてゐるのには

59  
3



藤原佐理卿詩懷紙

洵に驚嘆せすにはるられない。その一人々々の相が、今にも繪卷から抜け出でんばかりに、躍動した筆力、作者一代の心血は、恐らくこの三卷に、悉く注ぎこまれてゐるものと見ねばならぬ。そして一巻ごとに、巧みに中心を擱んでゐるその構圖、第一卷の應天門燒き討ちには、右往左往する數百名の群衆が、火に逃げ惑つてゐるさま、眞に迫つて居り、この『伴大納言繪詞』こそ、洵に繪卷物中の壓卷である。

ボストンの博物館では、この繪卷に百萬圓といふ値を付して、酒井家と交渉をした。また最近ドイツ博物館のキユメメル氏は、我國に古美術を探りに來て、酒井家でこれを一見し、口を極めて賞讃しての歸り際に『御不用なら、いかなる高價にても譲りうけたい』とさぐりを入れて戻つた位である。

藤原佐理卿詩懷紙

…伯爵 松平頼壽氏藏…

歌懷紙の研究家が、完全に、それをきはめようとするには、まづその母胎である、詩懷紙の研究に溯らねばならぬ。が、この唯一の資料となるべき詩懷紙は、日本にたゞ一つしかない。讃州高松藩主の後、わが社名寶展會長松平頼壽伯の藏で、これは日本最古の詩懷紙たるばかりでなく、筆者は日本三筆の一人の藤原佐理卿、いよいよ珍重せざるを得ぬ。

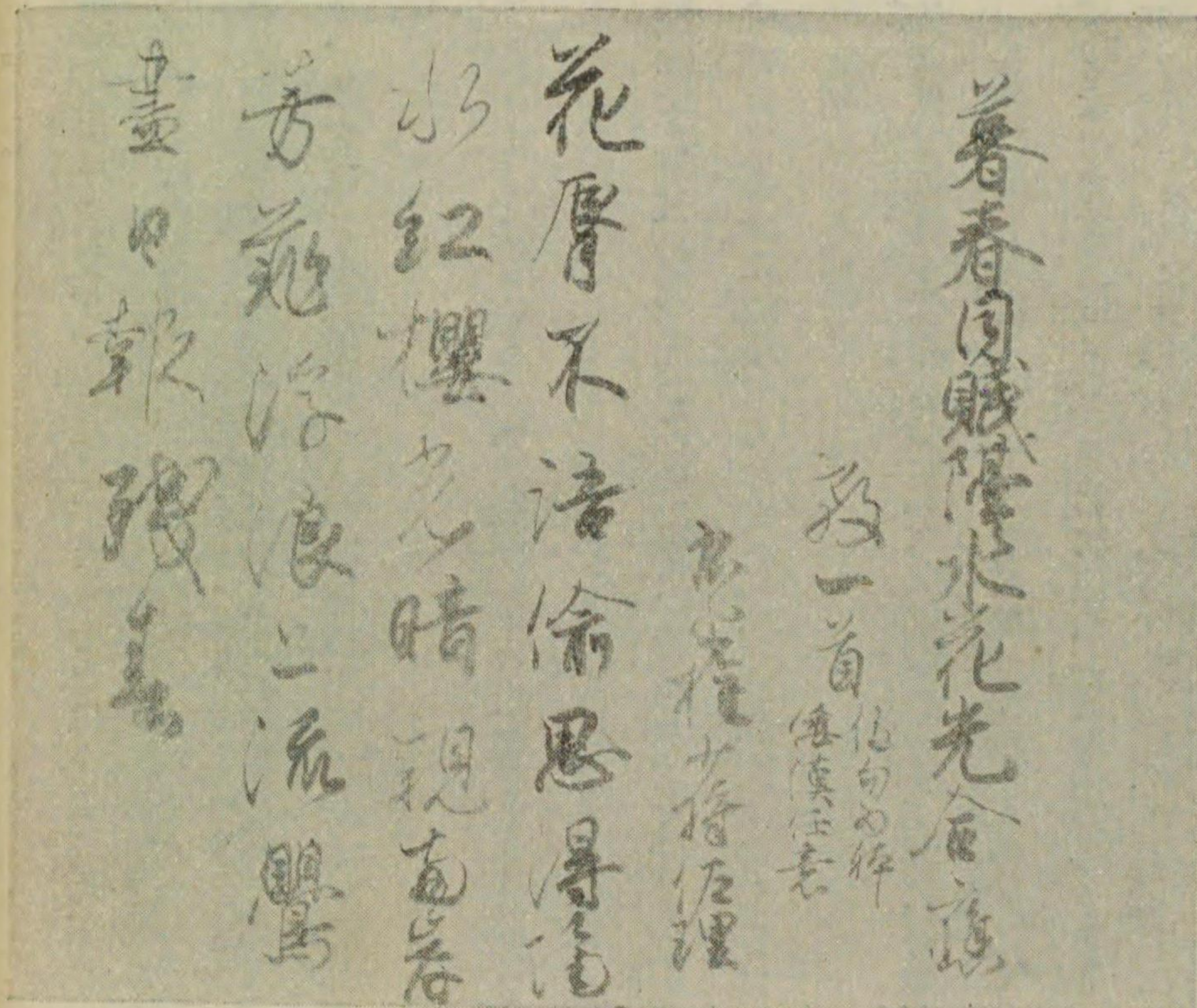
天徳年間——今から千六百餘年前ごろに書いたもので、筆者の正確なものは、ごく稀である。概ねはいひ傳へであるが、署名して確證のあるものは、實に、この佐理の詩懷紙たゞ一つ、『暮春月賦隔氏花光合應』といふ題で書いてゐる。その筆の蹟は、全くなだらかな純日本風の文字で、この頃まで多分に影響せられてゐた、支那文字の匂ひは、少しも見出せない。

佐理は左近衛少將敦敏の子で、關白實賴は、實にその祖父に當つてゐる。書をよくし、四條公任、一條行成と共に三筆といはれた。天徳天元の間に、累官して參議となつた。正暦年間、太宰大貳となつて正三位に叙せられたが、任にあること數年、宇佐の神人と争ひごとをして、祠官から朝に訴へられた。佐理はこの不快な雰圍氣から逃れて、久々で京のふところに眠るため、豊後

日本名寶物語

59  
3





藤原佐理卿詩懷紙

より船をもとめて瀬戸内海にさしかつた。

その朝の天色は、いとなごやかであつた。森閑と静まりかへつた空に、たゞ大きな輪に傳つて飛ぶ、鳶の聲が徒らに冴えてゐた。佐理は、おほろに浮いてゐる兩袖の山々を見ては、不快な思ひ出を消してゐた。伊豫海岸にかゝつた時、紺碧の色は消されて、眞つ黒な空あひから、射るやうな颯風が吹き出した。船客や舵子は、耳を掩うて時間の経過ばかり待つてゐた。

その嵐は數日つゞいた。眠つてゐる佐理が、朦朧とした意識のうちに感じたのは、三島神社の神靈からのお告げであつた。それは佐理に、三島神社の扁額を書けといふことであつたので、かれはおうけするに、荒れ狂ふ空は忽ちにをさまつて、拭はれたやうに輝き出した。佐理には、この奇蹟が怖ろしかつた。伊豫の濱で身を淨め、扁額の揮毫をした。——佐理の筆名はさらにとゞろいた。かれは、その後もしばし四國に旅した。この詩懷紙も、その時に残されたものらしいといはれてゐる。

藤原の擅權期は、文學と藝術とに、著しき發達を促した。そのころの我が國の文化は、支那文化のデカダンと稱せられたが、遣唐使派遣廢止の後には、純粹の日本文學、日本藝術が、俄に擡頭した。藤原の道長が、この新興文學の保護者で、自身もまた、文學者として有名であつたことは明瞭な事實である。書の如きも弘法大師、菅公、小野道風などの名筆が出たが、弘法大師などの字には、殊に著しく支那風の味が加はつてゐた。この直後に現はれた佐理の文字こそ純日本流のものであることは、前に書いた通りである。

藤原佐理卿詩懷紙



震災當時、佐理の詩懷紙を藏してゐる水道橋の松平伯邸も、寶物と共に焼失したので、この詩懷紙も失つたと傳へられたが、これは讃州高松の本邸にあつたので無事だつた。賴壽伯のみの悦びばかりでなく、實にその道の研究家の悦びでなければならぬ。

### 大阪冬の陣と大阪夏の陣

…侯爵 長田長成氏藏…

六曲のうちに、描きつめとれた鎧武者の数が三千數百名、これに濺いだ精力と、その緻密きはまる構圖のあと、これがすでに、天下の驚きで、他に比類がない。この屏風を戰場として、みな決死の相をたゝへた個々の相、抜け出でんばかりに、鬭争をつゞけてゐる。物凄筆の流れて、畫は、慶長十九年、秋十月一日に起つた「大阪冬の陣」、當時徳川方の雄將黒田長政の裔、長成侯の所藏であるが、筆者は無名の大天才畫家、たゞ八郎兵衛といふ名が判るばかり。

○ 冬夏の陣がすんだ元和の年、黒田長政は、その戦ひのあとをうつすために、上席家老の黒田美

作へ藩中で繪をよくするものを、探し出せと命じた。美作は詮議の末に、無名の八郎兵衛といふものを推薦した。長政は、すぐに八郎兵衛を召して、陣中の模様を口述し、晝夜兼行で急がせた。長政は神經がこまかく動く男であつたので、その畫室に出かけて行つては、兵の配列や、陣中の模様などを、手にとる如く、詳細にいひ聞せて、八郎兵衛の完成を助けてゐた。

○ 八郎兵衛は、その畫を九分九厘まで描いたときに、ほつくりと死んだ。その畫は、八郎兵衛の描いたものといふより、かれの精力全部——かれの魂そのものであるといつた方が、適當な言葉かも知れぬ。僅かな病にとりつかれると、魂を屏風にうばはれてゐるかれは、たゞその畫のことばかり口走りながら、木枯のやうに死んで行つた。

○ その畫には、前にも書いたやうに關東勢と、大阪勢の軍兵三千數百名が描かれてゐる。そして畫中の人物がみな異つた服裝をし、陣形、旗印、鎧、物の具、さては軍馬にいたるまで、個々に描かれ、當時の狀が窺はれる。この中には、無論黒田長政もゐた。かれは、福島正則と交換した一の谷の兜をいたゞき、中白の旗印を負うて、采配を振つてゐる。この黒田勢の先頭に、一つの

大阪冬の陣と大阪夏の陣



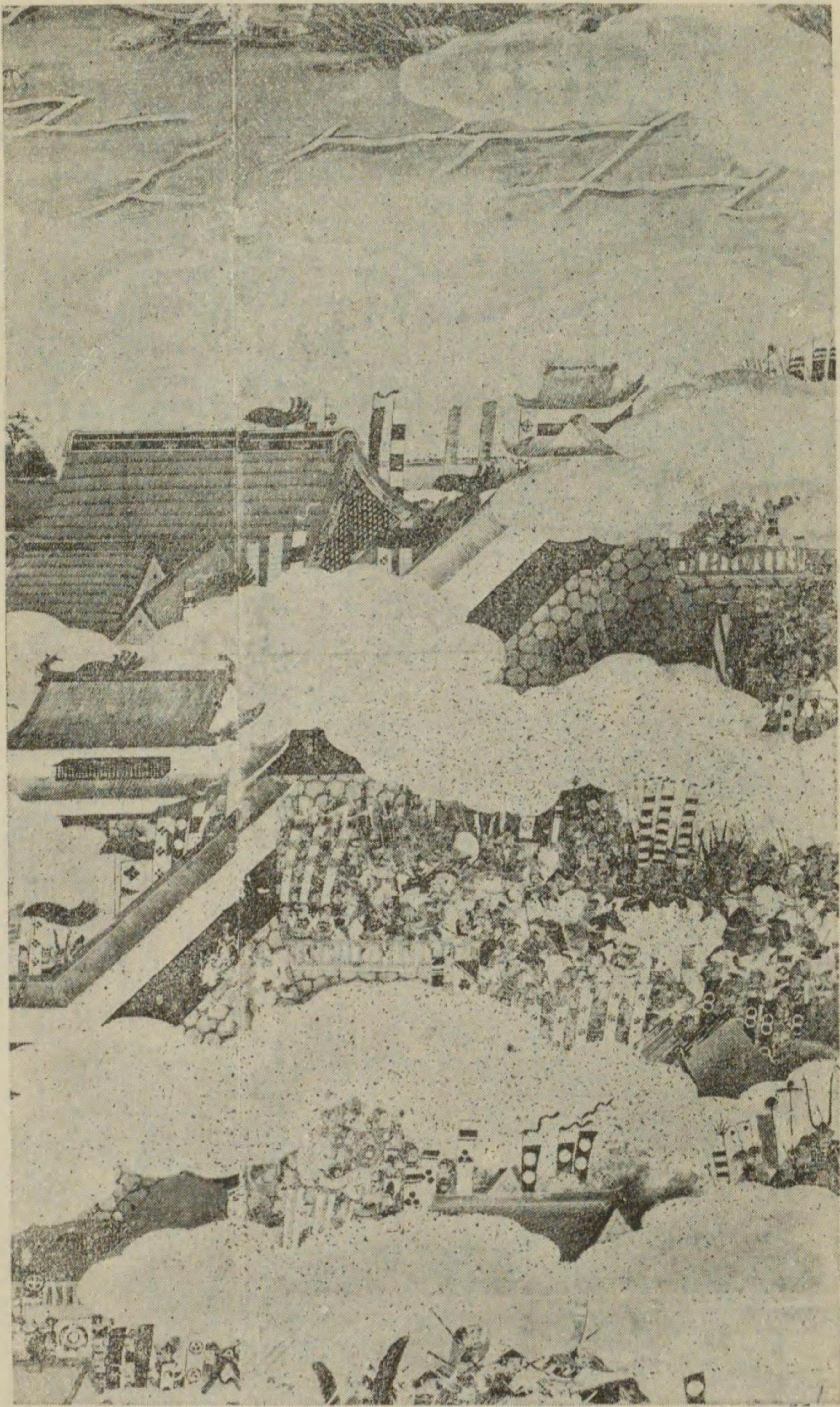
大阪夏の陣と大阪冬の陣

奇怪なる旗印、それには十字架が染められてあつた。これについて、一つの挿話が生れてゐる。

○  
秀吉は、長政の先代、黒田如水を相談役として、九州征伐の軍を博多に進めた。常時長崎には紅毛の切支丹宣教師が入りこんでゐて、盛んに金を貸付けては、土地を抵富に取つてゐた。この中に、博學の者が多かつたので、新知識の如水は、これ等を博多に呼び寄せて、秀吉に紹介した。秀吉は大喜びで、かれ等が持つて来たボートを博多の海に泛べ、香の高い南蠻煙草の煙にむせびながら、子供のやうに乗廻してゐた。

○  
——この三四日後、長崎から来た侍に、秀吉は、意外のことを囁かれた。それは長崎の地は、みな紅毛宣教師の金に、奪はれたといふことであつた。秀吉は、例の雷のやうな癩癩から、さつきまで、お世辭を並べてゐた宣教師を集め、怒鳴りつけた揚句に、即日博多より追拂つた。宣教師連は、煙にまかれて退却した。そして秀吉の怒りは、最初の責任者である黒田如水にまでも延長し、謹慎を申渡したのであつた。

大阪夏陣圖屏風の一部 (一)



大阪冬の陣と夏の陣

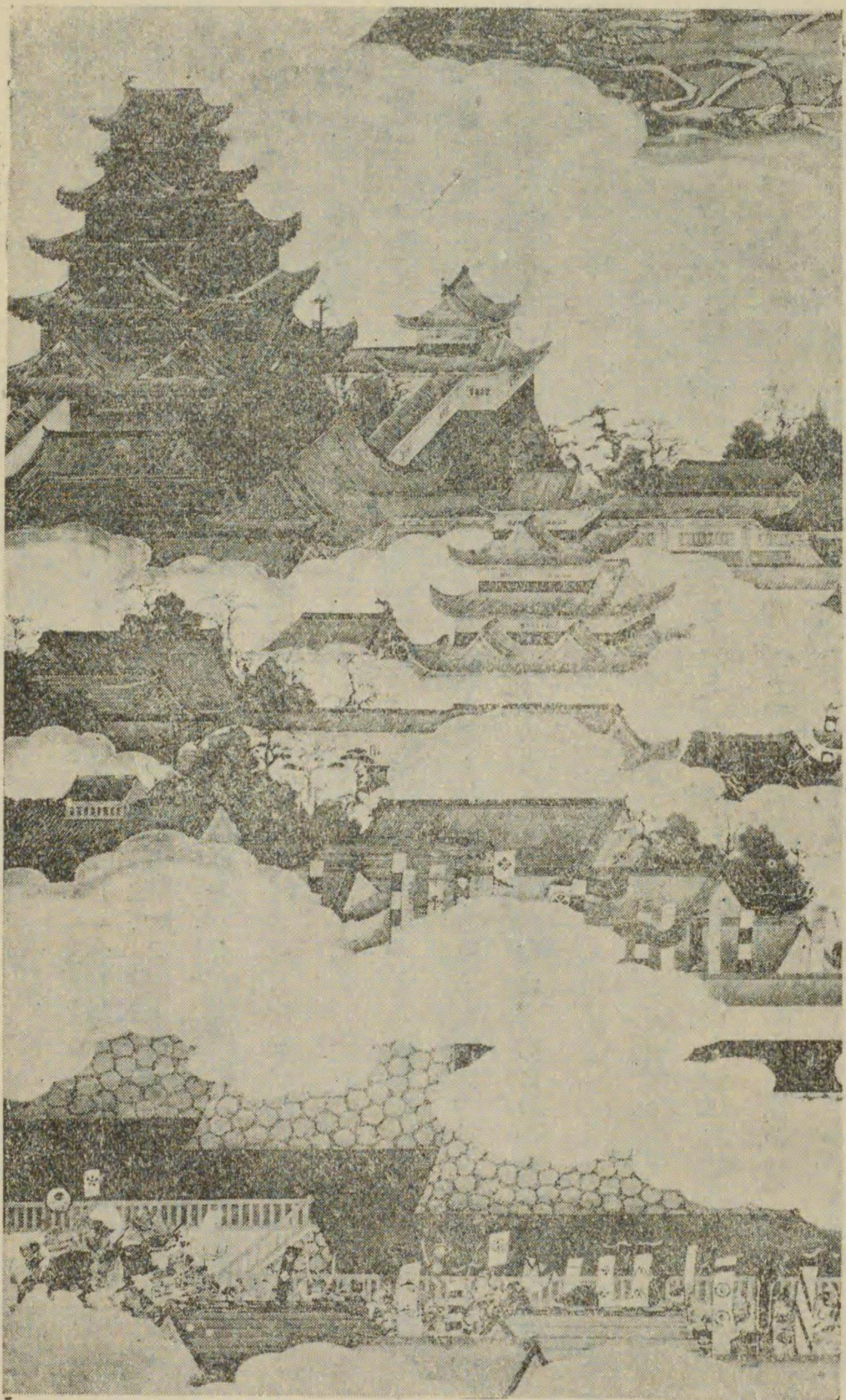


○ 如水は、宣教師連に對する面目なさと、秀吉より受けた不當の刑罰に、二重の怒りを感じながらつひに剃髪した。長政は、この親の怨みに酬ゆるため、徳川方に加擔し、特に十字架の旗印をつくつて、それを先頭に押立てたものであつた。

○ 豊臣家を、最後の運命に導いた大阪「夏の陣」、それは、元和元年の夏五月に始つた。黒田長政は無論この戦ひにも參加したので、これも「冬の陣」と一雙にするために、記憶のあとを、こまかにたどつて口述し、やはり八曲の屏風に描かせた。

○ 長政は、この畫も、八郎兵衛に描かせるつもりらしかつた。しかし九郎兵衛は、九分九厘まで描いたまゝ、急に死んだので、長政は家來の竹森石見に命じて、これに適當な、後繼畫家を探がすことを命じた。これには多數侍女の姿も現はれて來るので、幾分、浮世繪風のものを描ける畫家といふ條件を付した。竹森石見といふのは土木工事にかけて、當時天下第一といはれ、大阪城や名古屋城を設計した男であつた。そのうへ、畫の心得もあつたので、すぐ探し出したのは江戸田町に住む、久左衛門といふ畫家であつた。

大阪夏陣圖屏風の部分圖 (二)



大阪夏の陣と大阪冬の陣

59  
3



久左衛門は、その準備にかゝる前に、まづ八郎兵衛の遺した『冬の陣』の書残しに、補筆せねばならなかつた。いま黒田家に藏せられてゐる、この『冬の陣』の圖を仔細に見ると、専門家なら、すぐに、この補筆した部分は、指摘出来るといはれてゐる。久左衛門は、それが完成するとすぐに『夏の陣』の構圖を、長政の口述によつて描きはじめねばならなかつた。

『夏の陣』は、『冬の陣』とくらべて、線がすこぶる柔かに出来てゐる。それは、この畫に浮いて来るものは、侍女らの最期の姿が、中心になつてゐるからである。火の城から逃げ出す夥しい女の群、家財を車に積み、大阪を間道より避難するもの、濠におほる裸女、首を刎ねられる侍女、初夏の空の下に、羅衣を着て喘いでゐる一様のさまが、限りなき、なまめかしさを覺えさせる。

『夏の陣』の筆者八郎兵衛は、いまに至るまで、たゞ無名の大天才のみといはれてゐるが、『夏の陣』を、描いた久左衛門とは、現に國寶となつてゐる浮世繪『職人づくし』を描いた、浮世繪の巨匠、河野久左衛門吉信であるらしい。『職人づくし』の中にある、鎧づくりが作つてゐる鎧、夏の

の武者が纏ふてゐる鎧とが、筆法寸分違はぬので、吉信の作であるまいかといはれてゐるのである。

この『兩陣の畫』は、無二の參考資料となつてゐる。實戦に臨んだ黒田長政が、口述監督して作りあげたところに、この繪の尊さがある。殊に天守閣の城壁にほりこまれてゐる、鶴や虎の彫刻などは、當時を偲ぶに、こよなき參考圖なので、帝大の史料編纂室などでは、黒田家に數回往復し、寫眞として大切に保存してゐる。それから、黒田家にとつての尊さは、この畫が、他より移されたものでなく、祖先が天才畫伯とともに、共同で製作したところにあるため、唯一の家寶にしてゐる。

この畫を、明治四十二年に、明治大帝が黒田邸臨幸のみぎり、親しくお眼にかけたことがあつた。大帝には、これによつて當時を偲ばせられ、いと御感興深かつたと傳へられてゐる。

### 熊野懷紙

伯爵 大谷光照氏藏……

熊野懷紙

59  
3



西本願寺の寺寶として、庫裡深く秘められてゐる『熊野懷紙』を、いつか文部省が、國寶として保存したいと交渉したことがあつた。その時本願寺では、すぐに寺職會議を開いたが、喜んでこれに應ずるものと思はれてゐたのに、この指定を斷つた。それほど『熊野懷紙』は、西本願寺にとつて、何物にも換へ難き秘寶であつた。引きつゞいて西本願寺に納められてゐる。

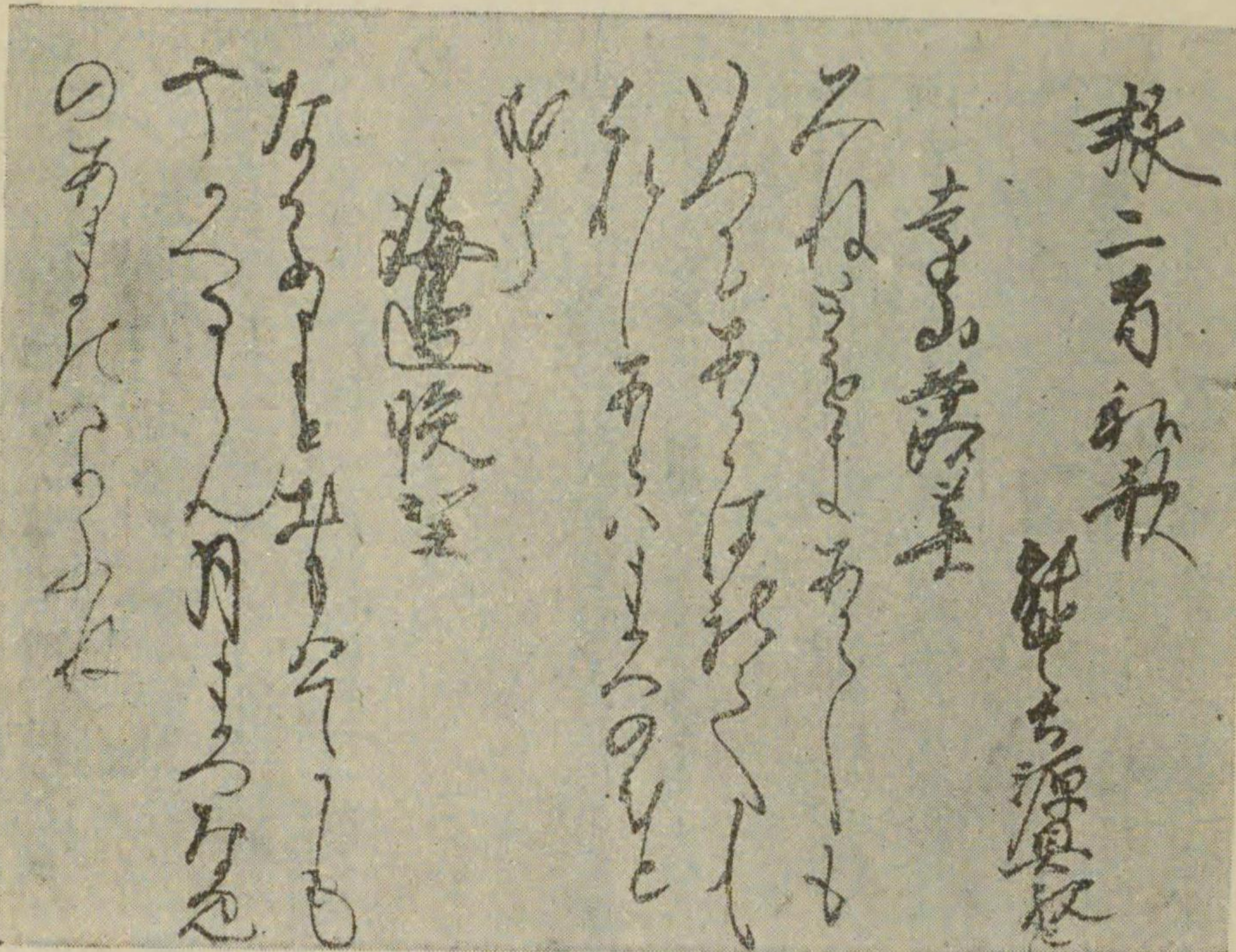
暴虐極まりなき逆臣のため、孤島隱岐へ流謫の悲運にあはせ給うた後鳥羽帝が、まだ京の御所にましまして、蒼茫と沈みゆく京の街々を、眺めさせ給ふことが出来た平和なあけくれに、居らせられたころ――。

後白河上皇が、熊野那智神社御參拜のため、しばし御幸せられたやうに、御信仰の篤き後鳥羽帝も、これへ成らせられたことが、三十幾度に及んだ。京からこゝへ往復するのに百餘日、その十幾度目の御幸の時のことであつた。眼も眩むやうに、美々しく飾り立てた行列のうちには右近衛大將通親、藤原公純、藤原範光、藤原家隆、藤原雄徳、藤原具教、藤原隆實、藤原家長、藤原秀景などが加はり、それへ、歌で名高かつた寂蓮法師もお伴をした。一行はかどやかなしい冬

秋二月の紙

熊野懷紙

幸ふ萬葉



熊野懷紙の部一

の陽ざしを背にうけて暫しの間、京をあとに、熊野へ行列をすゝめた。

○ 京と熊野の間には、九十九ヶ所の宿があつた。一行は日に二つか三つの宿を歩んでは泊り重ねた。奈良を経て紀州路にさしかゝつた時には、もう十二月の聲を聞いた。山谷を朱に染めた紅葉は、やうやく梢を離れ、行く徑をせばめて散り積んだ落葉は、霜に掩はれて冷たかつた。一行のすべての人には、大氣を吸ひこむたびに胸を氷柱で撫でられるやうな刺戟をうけることが、ひとしく感ぜられた。眞向ひに見ゆる阿波の山肌が、顛へをの



くその月の四日に、一行は、切目王子に泊つた。

その夜、旅のつれづれをお慰め申すため、一座の人々の間には、歌會が催された。歌題は、寂蓮法師によつて『遠山落葉』と、『海邊晚望』の二題がえらばれた。帝もお出ましになつて興ぜられた。『熊野懷紙』は、この時の懷紙十一枚を蒐めた歌集であつた。切目王子でつくられたもので、『切自懷紙』の別名もある。

御製、遠山落葉——あきのいろはたにのこほりにとどめおき梢むなしき越智のやまもと。海邊晚望——うら風になみのおくまで雲きえてけふ三日月のかけぞさびしき。

右近衛大將通親

遠山落葉——きりの山おちの紅葉はちりはて、尙いろのこす明けのまたき。海邊晚望——あかねさす潮路はふかきながむれば入日をあらふなみのいほかな。

寂蓮法師

遠山落葉——よそに見しふもとのいろとなりけりかさなる山の蜂のみぢ葉。海邊晚望——ながめやる沖の小島に雲きえてなみに近づく三日月のかけ。

藤原定長

遠山落葉——紅葉たる山のはちかきやどならば散りくる色はなみにみてまし。海邊晚望——ながめやる沖の小島の夕けむりいかなるあまの住居なるらん。

帝はしばしば熊野へ御幸あらせられたので、この『熊野懷紙』のほかにも、『瀧尻懷紙』、その他にもいろいろ、数は多かつたが、『熊野懷紙』の如く完全に保存せられてゐるものは、全く見當らない。『熊野懷紙』は、時價卅萬圓以上に評されてゐる。最初は西本願寺の家老職である下間某が買ひ入れて珍重してゐたものだが、いつのときか、法主に贈つたものだといはれてゐる。

日本名寶物語了

熊野懷紙



59  
37

昭和四年六月 二十五日印刷  
昭和四年六月 三十日發行

日本名寶物語  
定價金貳圓

著者 有所



著者 讀賣新聞社

發行人 小川菊松  
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷人 高橋惠  
東京市神田區松下町七番地

發行所 誠文堂

東京市神田區錦町一丁目十九番地  
電話 神田 (三二九六) 四三二一七  
振替東京 六二二九三三九四



時事新報主催  
世界一週選手

荒木東一郎氏著

四六判約三百頁・總クロ  
ス特製・口繪挿畫隨る豊富

定價壹圓卅錢

送料  
十二錢

# 三十三日世界一週

何故荒木氏は世界一週早廻り競争に於いて世界記録を破つたか

是れは實に尊い

又得難い教訓的

な物語である!!

又得難い教訓的

▲荒木東一郎氏が三十三日十六分三十三秒の短時日を以て世界の代表都市を歴訪の上世界を完全に一週したのは昨年の五月十日の事であつた。

▲爾來滿一ケ年荒木氏は其能率事務所にあつて、其後時事新報所載の旅記に力を入れ、更らに多くの趣味豊かなる餘談逸話を盛り、或ひは深く自ら顧みてかの「世界早廻り」の成功の原因を探り之を一巻の著書に纏めたのが即ち是れである。

▲荒木氏は此世界一週旅行の計畫を僅か廿日間の中に完成したが、本書は其科學的計劃時代の慘澹たる苦心から書き起して途上の見聞、各地の人情風情等を敘し來り叙し去つて、讀む者をして思はず手に汗を握らせ著者と共に身は異郷の空に銀の翼を張る思ひあらしめる。

▲米國の女市長は何と云つたか、世界の五大市長は如何に著者に接したか異國の市民は著者を迎へて如何に歡待したか等三十三日のスピードと焦慮と喜びの記録である。

▲しかも高速度旅行中の支出は一錢も之をおろそかにせず合計三千六百餘圓一々擧げて本書に記入してあるの、各國物價の實際紹介とともに今後の旅行家にとつては生きた旅行案内ともなるであらう。

三宅克己畫伯著

定價壹圓五十錢

送料一冊十八錢  
四六判特製七百頁の大冊  
插畫眞頗る豊富函入

# 世界めぐり

旅行案内についての本は多いが本書ほどに興味的に著者自筆のスケッチや寫眞やら又頗る明細な地圖やらを掲げた堂々たる著者は尠い

目次の一節―旅に出るまで―先づ旅行券から―紹介状と道づれ―旅行の手引―服装はどうなさる―携帶品―旅費はいくらから―上海―香港―シンガポール―南洋の小二港―コロンボ―熱帶の海路―スエズからポートサイドへ―カイロ―マルセイユ―鐵道旅行の心得―ハルビン―シベリヤ―モスコ―レニングラート―ロシヤめぐり―アメリカ上陸心得―ホルル―サンフランシスコ―シヤトル―シカゴ―ニューヨーク―ワシントン―ボルチモア―フィラデルフィア―ボストン―ナイアガラ―ロンドン見物―日本人會―パリ見物―宿屋と食事―イギリス内地―フランスめぐり―マドリッド―ポルトガル―フランダー地方―戰跡見物―ロツテルダム―ヘーグ―アムステルダム―ベルリン―ドイツめぐり―ライプツツモ―ドレスデン―デンマーク等々々。



597

37

東京陶磁器  
研究所長 大森光彦先生著

四六版特製函入美本  
三色刷四枚寫真版口繪入

定價金貳圓送料  
十八錢

# 室内 樂燒 趣味の陶藝



鑑賞に創作に陶藝美術の眞境は本書によつて知られたい。本書は單に陶藝美術の何たるやを教へるばかりでなく、本書を繙く事によつて、油然として湧き起る藝術慾を誰でもが容易に陶藝の上に表現出来るやうに詳しく述べたものである。

## 電氣陶藝爐

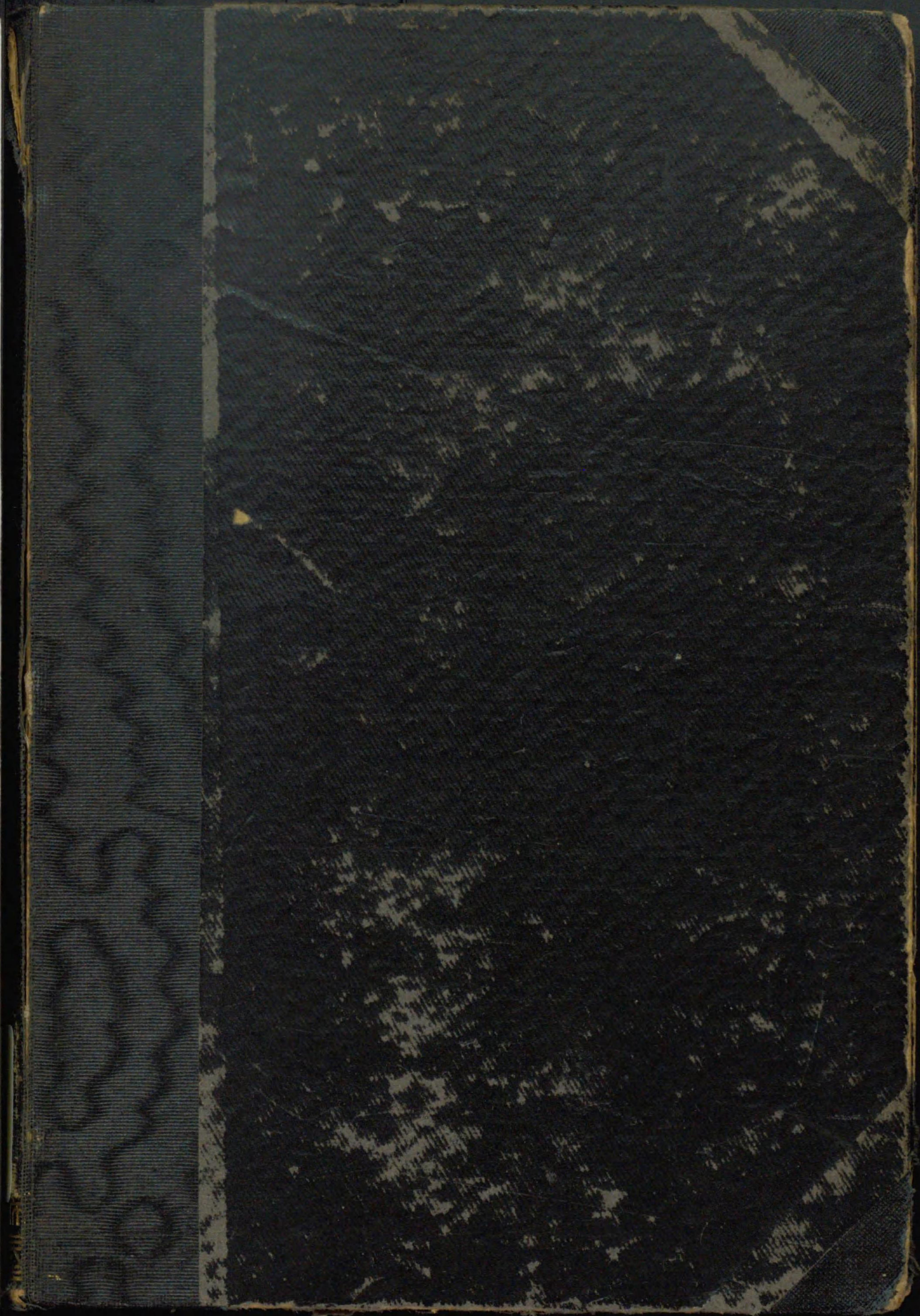
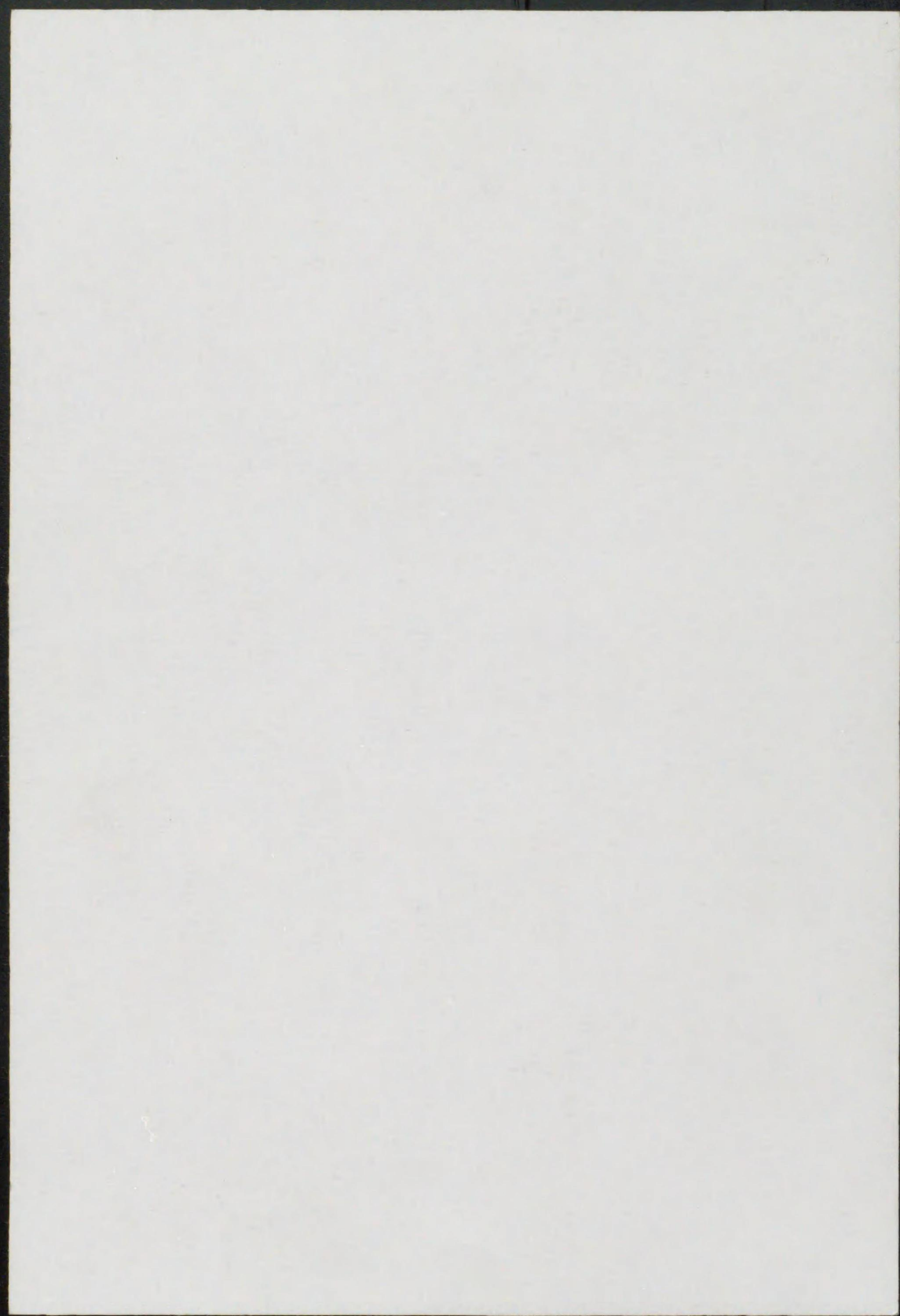
荷造費八十錢  
運賃到着拂  
定價金貳拾圓  
説明書 申込次第送呈

大森先生が、多年の苦心の結果發明されたもので一般家庭にあつて、自由自在に趣味の樂燒を楽しむ事が出来る。一般家庭は勿論、旅館、料理屋、等へて客の即席樂燒を興じさせる事は面白いものである。殊に名士の來訪、投宿、旅興等に揮毫を乞ふて記念とする等最も面白い。



597  
37





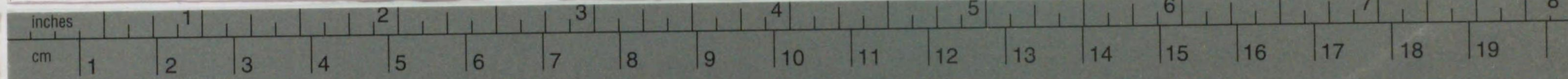


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

